永正十年正月二十一日

さなてとくうけろふをのミうらむおよをくゑゝ花も山ろ霧ろ吹○雪玉集同ジ、

以下實隆ノ歌、秋宮霧、春戀、山家煙ノ三首ヲ略ス、

暮春

さろゝれてをくゑぬ道よいそくとも世よゝゐろれの春やおもゝん○以下濟繼ノ

歌、岸千鳥、古渡雨の二首ヲ略ス、

同十年十一月三首十二月分闕云々、

夕鷹狩

あろおくよ山の端おくゝとゝゝろゐよ入日やおしきけふのかゐ人○柏玉集同ジ

實

かゐ衣ぬゑもやいろよゆふ露よきえをあらそふ鳥のおちくさ○雪玉集同ジ、

宗

くゑふろき草のもゑ野ゝゑろの尾のゑもけぬとりもぬも立やをん

濟

ねくらとふ梢のとりもさゝくおりろりこゑゑゑろき山の去さ道

雪中客來

まろせてやを空おし駒よ空ふ人のおゝろおるへよ雪の中ろは○柏玉集同ジ、

實

空いれてやおゝろのうちの松杉も雪のあしゑの宿よゑゆらん○雪玉集同ジ、

宗

雪ゝお筏友まちろ四のよはの面を先とふ人ゑおさけつむらん

濟

時のまよ跡ゑりゑろふ雪をろ形ろゐよとひしをさちとまる迄○濟繼卿詠歌同ジ、

名立戀

一ろさよいまをおき名よなをくとも去ら去ちきりの世々よ有きや○柏玉集同ジ、

實

かけきやゝゝを形ろおりゝるみきゝよをろせよさきさ川浪のさゝよを○雪玉集同ジ、

宗

ゑをゑらぬ心まよひよきをゆへよさ川名筏をめておもひゐろをや

濟

御製　正月

わうさめまとをくる名よいあらにとともよそおをさはよいひもきちてよ　○濟繼卿詠歌、

二句ヲもれくる名よハニ、結句ヲいひよけちてよニ作ル、

〔柏玉集〕上　霞添山色

永正十正廿一御會始

花やはつれく世乃松のゆきなうらよしれゝ霞春をかさ添て

春乃色をれく世うはをは吉野山雪よかもそれ松乃一しゐ

消あへぬ雪れ世うま乃朝霞春ゐ空まてぬうき色ゐ形

三月

暮春月

永正十三

面影ゐ有明の山乃薄霞ゐ世ぬゐとの春を春うは

〔柏玉集〕五戀　寄門戀

永正十三御月次

ひきむをふ草葉乃風のはてゐてもあれ去られん門れうちゐむ

五月

〔柏玉集〕上　夏雨

永正十五廿五

一年れ雨をかくてや五月雨れ空よ降をける日數ゐらまし

夏山

永正十五

深そと世茂さまされる夏山ゐ皆筑波根の陰をゐらへて

山なをやそさ世し程の嶺高そ空ようこうぬ夏れ白雲

六月

〔柏玉集〕三秋　葛風

永正十五廿五月次御會

玉まくらそしや昨日乃葛れ葉をうらそむてさる野邊れ秋風

〔柏玉集〕上　待花

永正十六

さへぬらし都よかをむ月を猶そ山ゐ松の雪をのこして

永正十六廿五御月次點前內臣（實隆）

花よいうよさけるさうさる春をあらい猶いう計待とよをん

あやにくようはる日數ゐ待ほとの花よくらして春やをくおき

七月

〔柏玉集〕中　秋來水邊

永正十七廿五御月次

ゐそきせし賀茂乃川風いとゝ敷涼しき波よ穐や立らん

永正十七廿五

波風乃涼しき聲を穐くをい今一しゐ乃松の下水

永正十七廿五

霧間野花

白妙乃霧れまらきよをしこめて尾花いうりの野邊の色哉

八月

〔柏玉集〕下　深更歸戀

永正十七廿五

鳥れ音をきりぬ別淺思夜よ人の涙も我よつをを形き

〔柏玉集〕五戀　寄玉戀

永正十八廿五月次御會

あひそむいうきりも去らぬ年月れおよゝかゝれる玉乃緒ゐらむ

九月

〔柏玉集〕中　惜月

永正十九廿五

あちきなく此世ゐとはる心をも去ゐ方や月よゐゐゐめ捨ぬる

身よとめて面影ゐらん空や猶稲ゐ過とも有明の月

十月

〔柏玉集〕上　浦鶯

永正十十廿五

春の色を波のちさとよ去らせてや鳴鶯のうらつさふ聲

〔柏玉集〕中　苦徑月

永正十十

をれつゐら塵ゐき苦の露よこそ山路の月を影ゐとめ々れ

永正十十

冬池雪

をしかもの翅ゐ去らも立出ん道ゐき雪ゐ原との池水

十一月

雪中客來

永正十十一廿五御月次

雪よのゑとちはてぬへ袁眞木のと狩心あさくや人よこさへん

夕鷹狩

永正十十一廿四御月次前内府點

ゐら柴の夕霜さむゑ狩人のヒくるゐさゐゐ雉子立なり

かへるさゐ雪けゐ雲ゐ山ゐのせよ行袖さむゑゐりくらしつゐ

永正十十一廿五御月次

かり衣ゐへる袖とふ月よしも殘ヒおゐくてくるゐ空ゐゐ

知仁親王

正月

狩人の分こしれへよくくるゐ日を殘る程ゐき草ゐ霜ゐれ

〔後奈良院御製〕霞添山色

永正十年正廿一、和歌御會始、

二月

ゐゐてゑむかす光る色も長閑ゐる都の山ゐ春の光を

郭公

二月二十五日、

心あらゐ去はしかきらへ郭公有明ゐ月のあかぬ名殘よ

初會戀

同、

ヒちゐ々よもれぬ色よ名を思ふよも涙ゐしあへぬ新枕ゐゐ

三月

花浮水

永正十年三廿五月次御會、

ゐこきよゐ花のゐゐみの池水も散ていとはるれもゐけもゐし

暮春月

同、同、

いヒゐしく霞ならてゐ彌生山いゐいくゐとの月もゑてはし

待空戀

同、同、

ゐゐゐしや別よきゐむ鳥の音もか絲ゐゐきも待よゐゐらよ

四月

谷殘雪

同年四廿五、

谷ゐゐみいゐゐよもさく花ゐヒや春よて殘る雪ゐ一むら

嶺上鹿 同、

妻戀るこゑもたのまよ鳴鹿やよそにしのゝぬ思ひなるらん

旅泊波 同、

波風のあらき磯へのとまゝ舟思ひしよりも夢路たゆぬる

夏雨 同年五月廿五、月次御會、

あの雨くまいさゝちぬゆゝん村雨れ雫もあやるのゝの雫ちゝ雨

夏山 同、同、

郭公ゝのふあまゝよ山ひゝのこゝへぬや万に雨ろむとやほる

夏衣 同、同、

ぬゝあゝゝし花色ゝろも今ゝ又すゝしゝあゝれゝとゝそ思ふ

待花 同年六廿五、

あゝゝくに字つる日數ゝ待ゝとの花ゝくらして春ゝ少雨ゝ

寄野戀 同、

ゝのはゝゝはよゝもゝてゝてし雨ゝ思ひの末やむはしのゝ原

秋來水邊 同年七廿五、月次御會、

御祓せし賀茂の川かせいとゝしくすゝしき波ゝ秋ゝさつらん

霧間野花 同、同、

にゝへゝゝ波紐とく花も朝霧のよふゝのゝゝそゝとしも雨ゝ

深更歸戀 同、同、

字しや猶八こゝゝれ鳥の一聲もゝりておき出るかゝるされ道

原上霞 同年十廿五、

字くゝゝにの鳴音雨ゝらてゝも霞ゝり朝のゝらゝ春やゝるらん

二十三日、癸巳、幕府、細川澄賢ヲ和泉守護ト爲ス、是日、澄賢、幕府ニ出仕ス、

〔後法成寺尚通公記〕七 正月廿四日、甲午、晴陰、小雨濺、和泉守護(細川澄賢)始而昨日出仕、太刀持、持參、令對面、勸一盞、

二月廿二日、壬戌、晴、從京兆(細川高國)母儀、被借風呂、彌九郎(細川澄賢)、京兆母儀等入之、彌九郎息、今度就守護之儀、折紙持參、給盃、

廿三日、癸亥、晴、及晩雨下、○中略 昨日折紙返之、

○澄賢ヲ守護ト爲ス日詳ナラズ、今姑ク出仕ノ日ニ掲グ、

二十五日、乙未、和漢聯句御會、

〔實隆公記〕四十六　正月廿五日、和漢御會參入、

〔元長卿記〕八　正月十五日、雪下、〇中略詩歌御會、御題被下之、

十七日、御會廻文書之、〇中略

御題　春色入毫縑、以花爲韻、

右御題來廿五日可被作進給由、被仰下候也、

正月十八日

參仕ノ人々　廿五日、晴、參內、依和漢御會也、鹿苑院（金澤）、前內府（三條西實隆）予、兵部卿（甘露寺元長）、三條中納言（公條）、姉小路宰相（實種）、爲學（五條）朝臣等也、

御製　雪や春霞れきえぬ山をおし　御製

等貴　敲門先問梅、　宗山（萬松軒等貴）

二月二日御小月次御會　〇二月以後、和漢聯句御會ノコヽロト、便宜左ニ合敍ス、

〔元長卿記〕八　二月二日、晴、參內、依和漢御會也、召具伊長朝臣、〇中略

今日御小月次御發句、

御製　花からて末葉根よりへる柳ゝ哉　元長

春風暖意纔、

及昏色退出、

同月九日　九日、晴、參內、依和漢御會也、十日御會、今日被遊了、

御製　櫻色のこゝろめゝ梅のよゝひらか　御製

百態柳先春、

及晩退出、

〔實隆公記〕四十六　二月九日、和漢御會發句申之、

〔元長卿記〕八　二月廿五日、晴、參內、和漢御小月次也、發句兵部卿（田向重治）、

同月二十五日御小月次御會　山松茨花ゝ霞乃ゝえはゝ哉　兵部卿

風絮半吹塵、　元長

及晩退出、

三月九日　〔實隆公記〕四十六　三月九日、和漢御會、參內、

廿五日、月次和漢御會、十分、參入、

執筆中山康親　中書王（貞敦親王）、宗山、下官、甘黃（甘露寺元長）、所勞退出、儀兵部卿（田向重治）、三黃（三條西公條）、姉相（姉小路實種）、中山相（中山康親）、執筆、爲學（五條）朝臣、

松そ秋朝夕露ゑ風の聲　中山、

〔元長卿記〕八　三月九日、晴、和漢御會也、發句可申由、一昨日仰之間祗候、

花をよそたく匂ひをちらす風もうゑ

四月十日、晴、參内、依和漢御會也、

一聲もなけやそやこの郭公　中務卿宮（貞敦親王）

雨殘夏木園、　三條中納言

及晩退出、

十六日、晩、陰雨下、參内、有和漢御會、

月雪の卯花ゐたゑよ花もなし　親王御方（知仁親王）

竹新風露飜、　中山宰相中將

〔和長卿記〕二　四月十六日、晴陰、小雨相交、禁中和漢御會、各參入、

〔元長卿記〕八　四月十八日、晴、俄有召、倒衣參内、有御和漢、及昏色退出、

〔公條公記〕○實隆公記六十一所收　十月十日、乙巳、天晴、今日月次和漢御會也、宗山、甘露寺中納言、兵部卿（東坊城和長）大藏卿、予、冷泉宰相（永宣）、姉小路宰相、中山宰相中將、爲學朝臣等也、

四月十日　貞敦親王

同月十六日　知仁親王

十月十日

宇佐郡段錢ノ内拾參貫百文ヲ納ム

冬ゝれゑ炎くたに荻や秋の風　中山宰相中將、

擁籬落葉高、宗山、

家君依（三條西實隆）無御更衣、御不參也、

二十六日、丙申、豐前佐田泰景、宇佐八幡宮ニ、同宮大祭料ヲ納ム、

〔益永透氏所藏文書〕（埋裏書）「永正十二月大祭致送狀　泰景」○駿河

送進料物之事

合拾參貫百文定

右爲來二月大祭料錢、以去年（永正九）宇佐郡反錢之内、所令社納如件、

永正十年正月廿六日　佐田大膳亮泰景（花押）

宇佐宮專使殿　○政所惣檢挍益永家職掌證文寫同ジ、

二十九日、己亥、相模清淨光寺兵火ニ罹ル、

〔遊行歷代譜〕二十二代意樂　○上藤澤本燒ハ、永正十癸酉正月廿九日、伊勢早雲亂（宗瑞）蓮（マヽ）之過去帳ニ御自記有リ、此時早雲ト導寸（三浦）トノ取合アリ、

〔新編相模國風土記〕百三　大鋸町　鎌倉郡三十五　清淨光寺　藤澤山無量光院

ト號ス、時宗ノ總本山ニテ、藤澤道場ト唱フ、〇中略今月廿九日、諸堂回祿ニ罹レリ、〇下略

〇伊勢宗瑞、三浦義同ヲ相模岡崎城ニ攻ムルコト、九年八月十三日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔駿河志料〕三十七本通町　府内三

一花堂長善寺、〇中略永正十年癸酉正月十九日、北條早雲三浦道寸合戰ノトキ、相州藤澤山兵火ニ罹リ、一宇モ殘ラズ回祿セシニ、遊行廿一代智蓮上人、藤澤山ノ本尊ヲ當山ヘ移サレ、當寺ヘ入給ヒ、同年五月、廿二代意樂上人法流ヲ繼カレ、同月八日、智蓮上人入滅シ、廿四代不外上人マデ、年歷凡八十年、世代三世、當寺ヲ藤澤山ニ准ゼラレ、不外上人甲州遊行ノトキ、本尊ヲ藤澤ヘ贈ルベキ由命アリテ、本山ヘ歸シ參ラセシト、藤澤記錄ニモアリ、〇下略

智蓮本尊ヲ駿河長善寺ニ移ス

不外ノ時之ヲ清淨光寺ニ還付ス

三十日、庚子、内侍所御神樂ヲ停ム、尋デ、之ヲ追行ス、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲百五十二御ろくらの事文龜より天文まで假名記

永正十年正月卅日、々ふの御ろくら、御ようきやくらさゆへゑんゐん、

用脚ナキニ依リ延引

二月十六日、去よくゐよて、こよひの御ゐくらにゐろゐゐし、どしのさしあいゆへ、さねの月のもゐまていゐし、又そのゝちい、ゐうようろさゐとよ、ゐんゐんよて、又々ふよりの去よくゐ卅日ゐり、むくゐたつまらゐて、あもより御ようゐよゐる、どしゆとりよてつきゐゐゐり万いらすゐい、御てんの御事ろへる、おさゐきものい、おき所ゐきよし申ゐとよ、御逝女くゐんゆゐもゐきよし、御ゐひ事申も万いゐさるとて、そのふんゐり、又女くゐんゆゐもゐきよし、御ゐひ事申よつきて、どしひとりむさくゐり、

三月廿四日、御ろくら、ふ行ろんろし辨（伊長）御ゐん、御きよおゐし、御さうろい、御しやくまてのこうち（參厨）、御きん山し（言國）ゐ、去そくちをやうゐん少將（基規）、去よさ人さんしやうゐ見えさり、九のもねよむしまりて、日いてゝ五時ゐむつる、もる〳〵とめてさし、雨こくけんよりむゐて、きとくゐめてさし、御ゆもる新大もけとの、大もけとの万いる、ゐらさ御をつろんの事ありて、御ろくらのやくゐまいらも、去ゆつゐう御事ろそぬやうゐさしまいらする、

奉行廿露寺伊長

奈良座不參

出御

〔公卿補任〕四十五　永正十年三月日、内侍所御神樂、出御、

〔元長卿記〕八　正月廿八日、晴、及晩洗髮、構神事、依内侍所御神樂也、

更ニ觸穢ニ依リ延引

永正十年正月三十日

廿九日、晴、及晩雪飛、明日御神樂、依用途不足延引云々、

二月十二日、晴、內侍所御神樂來十六日可被行由、俄被仰出之、以廻文各觸遣之、

十六日、雨下、禁中觸穢出來、御神樂延引云々、甲穢也、不可說之、流產云々、

三月廿二日、雨下、及昏色洗髮、構神事、明後日內侍所御神樂可被行云々、

廿四日、雨下、今日內侍所御神樂被行之、應召、依延引、大膳職別下行事加問答、

貳百疋下行之散狀案書寫之、

內侍所臨時御神樂

所作人

本拍子　四辻大納言（季經）

末拍子　按ヽ（マヽ）察（綱小路俊量）

付歌　基規朝臣（侍明院）　忠時

多忠吉

篳篥　安倍季音

笛　甘露寺中納言

和琴　資數朝臣（綱小路）

人長　安倍季敦

近衞召人　景範（大神）

內侍所御神樂

所作人

本拍子　基規朝臣

永正十年正月三十日

末拍子
忠時
付歌
多忠吉
篳篥
安倍季音
笛
景範
和琴
資數朝臣
人長
安倍季敦

供御物遲々、仍至曉鐘始行、臨時事終天欲曙、恆例及巳剋云々、件供神物去月十六日觸穢時、不可致用意由仰處、悉用意之由答之間、可撿知、可持來之由、以出納仰處、不持來、今般更可下行由、再三申間、構虛言條、以外次第也、可辨沙汰

供御遲々ニ依リ曉ニ鐘ニ至リルリ行テハ臨時神樂終リテ恆例ニ及ブ

由加勘發、窺因更無其術由、種々懇望間、枉理、四百五十疋之內、今度貳百疋又加下行了、此儀依再往遲々由、自半更屬晴之間、改雨儀了、構晴儀也、

〔實隆公記〕四十六　二月十六日、〇中略　廿一日、〇中略　自今日禁中穢氣混合、

〔邦輔親王御誕生記〕〇伏見宮御記　亨三所收　三月廿一日、〇中略　重親(雄朝)朝臣太刀持參、雖可令祗候、來廿四日內侍所御神樂被行、依被催指燭之間不參、於門外此子細申入了、

廿四日、雨晴、今夜內侍所御神樂也、

廿五日、晴、重親朝臣參、御神樂依所役、此間不參之由申、

〔續史愚抄〕四十四後柏原院中　三月廿四日、癸未、被行內侍所臨時御神樂、有行幸、拍子辻四辻大納言、季經、末按察使、俊量、付歌殿上人左中將基規朝臣、次被付行恆例、拍子本基規朝臣、末忠時、近衛召人、奉行藏人頭左中辨伊長朝臣、已上去年十二月延引分也、延及翌日云、元長卿記、公卿補任、祕抄或記、

俄ニ雨儀ヲ晴儀ニ改ム

去年十二月分

二月 小辛丑盡 辛丑朔

一日、辛丑、攝津水無瀨宮ヲ修理ス、

〔實隆公記〕四十六　二月一日、辛丑、水無瀨御影堂修理、大工藤宗久、左兵衛少尉、棟梁藤原吉久、右兵衛少尉、

二日、壬寅、伏見宮御第和漢聯句御會始、

〔元長卿記〕八　二月二日、晴、〇中略今日伏見殿御會始、御題先日被送下、詩歌同御題云々、松有歡聲

播磨赤松義村ノ部將後藤純基、同國安田莊及ビ吉川莊内ノ地ヲ、嫡子虎壽丸及ビ次子龜壽丸ニ讓與ス、

〔後藤文書〕〇播磨

讓與

播磨國多可郡安田庄内曾我部郷永祓名東分田畠、同三ヶ郷公文職半分山河、荒野、等、并三木郡吉川庄内宗源分山河、等之事

右所領者、承久以來先祖重代相傳、爲嘉吉當知行、至于今、代々無相違知行分也、而相副關東安堵御下文、六波羅殿御下知狀、高氏、中御(足利義詮)所樣御判、并當家(貞治)圓心、則祐御代々以來御判、同調度手繼文書等相そへ、嫡子虎壽丸讓渡者也、然弟龜壽丸割分等、別紙ニ以注文讓渡也、然上者、除是惣領職、不可有知行相違也、將又爲庶子、背先祖置文旨輩出來有者、任彼文言、可爲惣領一圓進退者也、御公事本所當以下可致催促者也、仍爲後代讓狀如件、

後藤藤次郎　純基（花押）

永正十年癸酉貳月二日

〔後藤衞藤系傳〕〇播磨

純基猿千世丸、藤次郎、彈正忠、

基次虎壽丸、與次郎、此子孫後藤惣領職相傳、故代々感狀、一見狀、讓狀相承、

永正十年二月、以純基之讓狀惣職(領脫カ)相傳、〇下略

基□龜壽丸、與三郎、

永正十年二月、以父純基之讓註(注)文狀、令知行也、

六日、丙午、義尹、大内義興ニ歸國ヲ命ズ、

〔後法成寺尙通公記〕七　二月十四日、甲寅、晴陰、自午刻雨下、〇中略入夜蒯菴來、數刻令雜談、勸一盞、相語云、從大樹去六日大内可下國由被仰云々、言語道斷(絶脫)

次第也、去十二日大内内々告知細川(高國)云々、

○義尹、義興及ビ細川高國ノ專恣ヲ怒リ、近江ニ奔ルコト、三月十七日ノ條ニ見ユ、

八日、戊申、春日祭ヲ停ム、尋デ、之ヲ追行ス、

〔公卿補任〕四十五　權中納言正三位藤(三條西)公條、卅七、辨使內侍不參、二月廿日春日祭參行、初度、實茂卿(正親町三條實望)出立事申付之、禁中觸穢也、

〔實隆公記〕四十六　二月十六日、○中略春日祭事經營、

十九日、○中略春日祭事治定、

廿日、春日祭參行、西路深泥、風雨無術云々、

廿一日、春日祭無爲遂行、歸京、酉刻下　經本路云々、○中略中納言歸京後撤神事札、

〔元長卿記〕八　二月廿日朝雨、午時屬晴、今日春日祭也、三條中納言上卿參向也、

〔春日祭歷名部類〕永正十年二月式日延引、禁裏觸穢中也、

二十日、庚申、祭、上卿權中納言公條、辨不參、

九日、己酉、皇大神宮禰宜荒木田守晨、永正記ヲ著ス、

上卿三條西公條參向禁裏觸穢ニ依リ延引ス

歸京

〔永正記〕下

神明遺勅幷朝家憲章及兩宮規範、往昔之例、中古之趣、當時之儀凡百二十箇條

著作ノ由來

太神宮簡要之事○以下百二十四箇條ノ條目略ス、

荒木田氏經ノ遺命ニ起因ス

夫神明快然之祈、天下泰平之政、甚欲勵忠勤、倩案事之由、以清淨爲本云々、因以觸穢甲乙假服日限、家々服假令聚之撰之、又可思慮條々、禁斷之法式爲無相違者、以正直爲先之故也、累葉相承數卷中遠令抄出之、天地兩卷仁令書焉、是併故三品氏(荒木田)經卿之遺命、蹤跡爾綷起、更以非私曲也、文明年中以後五六个年事、少々增注有焉、茲亦當家從父兄守朝外(外宮ノ)姨夫朝敦、共以近代官長賢之勘答等也、其後及度々大亂、兩宮之間爾不思議子細雖見來、以私儀爭令書加乎、於廿五六个年以後之儀者略之、顯筆跡段、于時永正十年二月九日也、仍號永正記矣、

著作ノ意趣

右件意趣者、爲興神道荒廢之家、改神家衰滅之道、雖備忠於神明、致孝於先祖、愁予守晨(荒木田)既今著禰宜之二座、蒙榮爵之四品、剩迄及年齡五十惑天道、愚昧之文字、烏焉馬之相違多々、不可及他見、唯偏當家了角童子等之相副于

蘭竹馬、爲令引乘心於我道而已、

十三日癸丑、大内義興、周防興隆寺修二月會大頭役ヲ定ム、

〔興隆寺文書〕五〇周防

差定

氷上山興隆寺修二月會大頭役事

明年大頭　城井左馬助藤原弘堯

脇頭　周防國玖珂郡

三頭　同國佐波郡

右所差定之狀如件、

永正拾年癸酉二月十三日　從三位多々良朝臣義興（大内）（花押）

十四日甲寅、義尹、義澄ノ子義晴ト和ス、是日、義晴及ビ赤松義村、劒馬ヲ幕府ニ進ズ、

〔伊勢貞助記〕〇後鑑二百七十八所載

二月十四日、就若君（義晴）様御合体之儀、赤松、在田式部少輔上洛、出仕、御對面如常、貞陸（伊勢）披露、若公様ヨリ御太刀、眞久、御馬、白鶴毛、雀目結、赤松兵部少輔（義村）御太刀、久國、御馬、在田自分御太刀、御馬、千匹進上之、何モ目錄

大頭城井弘堯
脇頭
三頭

在之、依右京大夫（細川高國）殿、左京大夫（大内義興）殿御參アリ、然ニ赤松披露狀、右京兆人々御中、義村ト在之、

〇義澄、義晴ヲ赤松義村ニ託スルコト、八年三月五日ノ條ニ、細川高國、攝津尼崎ニ赴キ、赤松義村ノ母ト和ヲ議スルコト、九年六月十八日ノ條ニ、義村、浦上村宗ヲ幕府ニ遣シテ宥免ヲ謝スルコト、同年八月二十八日ノ條ニ見ユ、

二十三日癸亥、應眞ヲ下野專修寺門流ノ正統ト爲ス、

〔專修寺文書〕一〇伊勢

（藤紙）〔專修寺應眞大德御房　左中辨（甘露寺伊長）（花押）〕

下野國高田專修寺門流事、依有申掠族、雖被成勅裁、度々證文分明上者、如元可爲正統由、被聞食訖、可專衆生利益旨、天氣所候也、仍執達如件、

左中辨（花押）

永正十年二月廿三日

當寺住持應眞大德御房

〔專修寺文書〕二〇伊勢

〔勾當内侍局（端裏書）永正十三　四〕

〇京都御所東山御文庫記錄甲百十所收綸旨案文異事ナシ、

永正十年二月二十三日

前勅裁ヲ棄破セラル

永正十年二月二十三日

昨日いゑり田せんしゆ寺りれい申され候、いせんいまゐゐゝ事候けるよ、
ゑをう申ゐ〳〵と申ひらゝれ、ちよくさいなしゝへされ候、ゑうちやくを
しむゝり万いらせ候よし、御心え候て、御けさへ候へく候、もし、

かんろしとのへ

〔元長卿記〕八　二月廿三日、陰、及晩雨下、專修寺申勅裁事、勅許、
三月三日、細雨下、及晩晴、〇中略先々專修寺來、子細不能巨細、
〇眞智ヲシテ、下野專修寺住持職ヲ安堵セシメ、紫衣ヲ聽スコト、十二
月二十六日ノ條ニ見ユ、

權中納言甘露寺元長、賀茂傳奏ヲ辭ス、聽サズ、

〔元長卿記〕八　二月廿三日、陰、及晩雨下、〇中略賀傳(茂脱カ)奏辭退、依不許、再往言上、
猶可存知之由仰、仍可存知申入了、
四月十九日、晴、賀茂傳奏辭退之由、去二月言上之後、頻猶可存知之由仰也、于
今難澁、一昨日重而有仰旨、仍今日奏事始申之、〇下略、賀茂社奏事始ノコト、四月十九日ノ條ニ見ユ、
四月八日(五カ)、雨下、午前晴、今日依有所存、當官已下賀茂傳奏等申沙汰之條々、可

被令上表了、
當官幷賀茂傳奏、御會共申はさ、能州一青、越州河合庄申つき、い上悉上表を歟
といさし候、愚昧未練の身として事上ゐつゝり候て、理ひの分別も候ゝ
て、空おそろしく日來存候つる、どよゝくに罷過候きゝさ〳〵ゝくこの
むき候程よ、ゑんしやくいさし候、このよし御心え候て、おほを候へく候、
もし、

勾當內侍殿御局へ

十一日、晴、三條中納言(公條)入來、進退無謂由御使云々、不申領狀、
十八日、晴、勾當內侍來臨、進退事教訓也、一宿、
廿二日、晴、大藏卿(東坊城和長)持來女房奉書、申所存事(事カ)、
廿三日、晴、大藏卿又持來女房奉書、仰及度々間、雖非本意、猶可加思案由命之
事(事カ)、
廿四日、晴、午時雨下、大藏卿來、罷向御返事可申由令返答了、戌刻許謁大藏卿
許、畏申由申了、則同道向長橋局、以大典侍局申入了、有一盞、
〇元長、賀茂傳奏ト爲ルコト、文龜四年八月十九日ノ條ニ見ユ、

當官及ビ會沙汰ヲ申シ御料所ヲ申次ヲモ辭ス

三條西公條ヲ御使トシテ留メシメラルル

二十四日甲子、攝津守護細川高國、同國所在ノ德大寺實淳ノ所領ニ課役ヲ免除ス、

〔後法成寺尙通公記〕七　二月廿四日、甲子、夜來雨下、〔略〕中德女中被來、攝州知行果役免除之由、京兆（細川高國）被申云々、

二十五日乙丑、北野社法樂連歌御會ヲ停ム、尋デ、之ヲ行フ、

〔元長卿記〕八　三月廿五日、晴、去月廿五日御法樂、依觸穢無之、仍今日可參候由、一昨日仰也、仍參內、直衣、御連歌之後、有廿首之和歌、御短尺重之、後姉小路宰相（實綱）讀進給、天酒、退出、

行春ハぬさもとりあへぬ花もかし

○佐々木尙宗、三條西實隆、北野社法樂百首和歌ヲ詠ズルコト、便宜左ニ附收ス、

〔雪玉集〕十二　名所百首和歌

春二十首

音羽河

春や今朝ミね立越し年かゝをかゝる音羽乃ゐ堂ふの川うせ

（觸穢ニ依リテ停ム）

（連歌ノ後二十首和歌續歌アリ）

（名所百首和歌）

（春）

きゝは々さこゆりかゝるゝ音羽川よゐよや吹しもるれもゐうせ　尙宗、實○以下

（三條西實隆）堯空

隆ノ歌、玉嶋川、高砂、春日野、三輪山、葛木山、手向山、伊勢海、志賀浦、三嶋江、鹽竈浦、宇津山、葦屋里、吹上濱、湯等三崎、忍山、水無瀨川、大淀浦、田籠浦、末松山ノ各十九首ヲ略ス、

夏十首

大井河

大井河いせきよよとむ春の色を波まよさらに夏こゝろを哉

暮ていよし春の餘波や大井河あらしれもゐを殘も去ちらミ　尙宗、實○以下

（佐々木尙宗）道堅

隆ノ歌、篠田杜、猪名野、御裳濯川、伊香保沼、天香久山、大江山、難波江、美豆御牧、松浦山ノ各九首ヲ略ス、

秋二十首

泊瀨山

初を山河音もミてくるゝ日れ影よりむろふ秋のもつゝせ

もつを山々ふ吹そめし秋うせ待とりゐれ入あひのこゑ　尙宗、實○以下

隆ノ歌、龍田山、須磨浦、宮城野、水莖岡、小倉山、宇治川、常磐森、三室、高圓野、伊駒山、生田池、清見關、武藏野、伊吹山、佐良之那里、白川關、野嶋崎、明石浦、阿武隈川ノ各十九首ヲ略ス、

永正十年二月二十五日

冬十首

清瀨川

水上乃山をくもらてきよきたやこのと落行末れしらかゝ
ゝかうゝは玄くるゝ雲よにこるかゝゝしやりらめれ清瀧乃かゝ〇以下尙宗、實

隆ノ歌、小鹽山、住吉浦、交野、田蓑嶋、有乳山、浮嶋原、安達原、因幡山、鏡山ノ各九首ヲ略ス、

戀二十首

伏見里

さゝゝ竹のふしゝれ里乃りまくら玄れをからいぬ袖の露きさ
思ひあらいこ乃ふしゝ茂をあらさめやむくら蓬よゝを乃りせてを〇以下尙宗、實

隆ノ歌、霞浦、石瀨杜、筑波山、袖浦、益田池、高師濱、阿波手杜、志賀須加渡、濱名橋、磯間浦、守山、佐野布奈橋、安積沼、松島、緒絕橋、三熊野浦、鳴海浦、二見浦、名取川ノ各十九首ヲ略ス、

雜二十首

芳野川

よしの川うゝ音と茂く行水のあをゝろゝゝ月をゝわゝる
花いいさをゝゝりゆきゝ吉野川ゝやくゝしよれ春そ忘れぬ〇以下尙宗、實

義尹實隆ニ囑シテ發句ヲ詠ゼシム

隆ノ歌、鈴鹿川、不盡、還山、海士橋立、明日香川、鳥羽、辰市、吹飯浦、布引瀧、長柄橋、玉川里、生浦、佐夜中山、嵯峨野、角田川、志賀磨市、若浦、相坂關、御津濱ノ各十九首ヲ略ス、

此百首題、依難得風情、往年以來未詠之、爰去年冬比、道堅法師爲聖廟法樂
一夜詠之、忽有神感之子細云々、件草一見、不堪吟興、試綴連之、早卒初一念、
同類等不能引勘之、風体言語頗狂忽、不可他見而已、

永正十年正月廿日　判

幕府和漢聯句會、

〔實隆公記〕四十六

二月十日、〇中略廿五日御發句事、伊勢守(伊勢貞陸)傳之、
十九日、〇中略廿五日發句、遣蜷川新(親孝)右衞門許、
廿日、〇中略御發句披露之由、親孝有報、
廿一日、〇中略發句事御治定之由、伊勢守有報、

二十六日、丙寅豐受大神宮神主等、同宮ヲ造替セラレンコトヲ請フ、

〔應永以來外宮注進狀〕

豐受太神宮神主
注進、早可經次第上奏御沙汰被達御上聞、當宮御造進間事

永正十年二月二十六日

要脚ノ下行延引ス

右當宮御造□（修カ）之御事、既被遂御上裁、御嚴重御下知之上、御要脚延引、神慮難測之旨、及度々、雖奉致注進、于今無御下行之條、猶以奉致歎訴者也、早速被成御造畢、奉執行遷御者、天下泰平國家安全御祈、可爲專一之狀、注進言上如件、

以解、

永正十年二月廿六日　大内人正六位上度會神主久吉 上

禰宜正五位下度會神主是久

禰宜十人

○豐受大神宮神主度會是久、同宮ヲ造替セラレンコトヲ請フコト、九年三月是月ノ條ニ見ユ、

四月十一日ノ御會

曼殊院慈運法親王御第連歌御會、

〔元長卿記〕八　二月廿六日、晴、於竹内宮（曼殊院慈運法親王）有御連歌、發句主人御詠也、

梅ゝかゝり松ゝけきよたゝみ池哉

及昏色退出、

○四月十一日、慈運法親王、連歌ヲ行ハセラルヽコト、便宜左ニ合敍ス、

〔元長卿記〕八　四月十一日、晴、於竹内宮有御連歌、鹿苑（金閣）院御發句、

卯花いおるへき月乃桂ゝか

○肖柏、宗碩連歌會ヲ行フコト、便宜左ニ附收ス、

肖柏宗碩ノ連歌會

〔連歌兩吟百韻〕十種　何衣　永正十年二月十六日、

あひよりひぬゝ空ふい鶯花乃宿　夢庵（肖柏）

をし明ゝゝ乃系もむ槇乃戸　宗碩

月ゝ流ゝ春ゝ夜嵐をさらして　同

かゝゝほともゝ袖乃うゝ雪　夢

冬草ゝむもゝゝゝゆく野ちゝ末　同

駒とめて（賊）ゝやふるゝゆふゝを　碩

郭公おもゝぬ山乃一聲ゝ　同

もゝゝを万ゝゝ雲ゝゆる空　夢

雨風をかゝりありてや明ぬらん　碩

ほゝゝゝゝ乃こほ炉乃ともし火　同

かもゝゝほ月乃枕ゝ祢覺して　夢

ゝゝ〳〵もゝもゝゝゝそふこ流

同〇以下八十八句略ス、

相伴ノ衆

二十七日、丁卯、義尹、細川高國ノ第ニ臨ミ、松囃、猿樂ヲ觀ル、

〔後法成寺尚通公記〕七　二月廿七日、丁卯、晴、京兆（細川高國）大樹渡御、有松、猿樂等云々、御請番日野（内光）、細川京兆、能登（畠山義元）守護、大内右（左）京兆（義興）等云々、其外公武衆歴々云々、

〔實隆公記〕四十六　二月廿七日、京兆松囃渡御云々、

〔元長卿記〕八　二月廿七日、晴、傳聞、於左（右）京大夫亭、有松拍子、大樹渡御云々、

越後守護上杉定實、守護代長尾爲景ヲシテ、同國彌彦社社人ノ沽却セル社領ノ還付ヲ令セシム、

〔高橋氏舊記〕○越後彌彦社古日記

○越後彌彦社古日記、往古社人沽却、或永代、或年期百年内外雖爲當知行、帶去明應五年四月十二日御下知旨、（其條參看）養泰寺、伊與部伴四郎、小國三河守拘之神領、如註文社家被返付畢、此外方々買得地も、至于爲神領者、可被任彼筋目、自今以後社領於申掠、證文出帶候共、可爲反古之由、一王十穀可被申付旨、被仰出者也、仍執達如件、

永正十年癸酉二月廿七日　下野守昌信（齋藤）（花押）

長尾彈正左衞門尉（爲景）殿　右衞門尉景長（長尾）（花押）

二十九日、己巳、御樂始、

〔元長卿記〕八　二月廿九日、今日有御樂始、參仕人々、花山院前左府（政長）、四辻大（季經）納言（俊小路俊建）、按察（田向重治）予、兵部卿（今出川季孝）、菊亭中納言、四辻宰相中將（公音）、右兵衞督（四條隆永）、隆康（鷲尾）朝臣、雅業王（山科）言綱、基親（持明院）、重親（鳥丸）、資數（鷹田）等朝臣、宗藤（松木）、初參、束帶（淺）、橘以緒等也、地下統秋（豐原）朝臣、朝秋、景範（大神）、熙秋、後秋（俊カ）、盛秋等也、及晚事終、有一獻、前左府申沙汰佳例也、入夜退出、

參仕ノ人々

三月小盡　庚午朔

二日、辛未、石見小笠原長隆、井原民部左衞門ノ所領二段錢ヲ免除シ、同國抽見ノ地等ヲ給ス、

〔庵原文書〕○石見

近年役之儀申付候て、諸篇辛勞候へとも、無了（マヽ）所候間、一かとふちを不加候、さ候間、役ろゝへ候する間、もちふんの反錢免許候、明所候する時、又可申合候、彌奉公可爲肝要候、謹言、

永正十年三月二日　　長隆（小笠原）（花押）

井原民部左衞門殿

抽見之内壹貫前之事、もと〳〵よゝを作候、此在所と、すゑやきめん六百前、合而一貫六百前、給所としてふち候、全可知行之狀如件、

永正十年壬申（癸酉）三月二日　　長隆（花押）

井原民部左衞門殿

抽見ノ内一貫前炭焼免六百前

三日、壬申、著到百首和歌ヲ始メラル、

甘露寺元長廻文ヲ出ス

〔元長卿記〕八　三月二日、晴、後明日（明カ）可有著到和歌、御人數可相催由仰也、書廻文遣之、

從明日可有著到和歌、御題可爲弘長百首題、各可被存知樣之由、被仰下候也、

三月二日　　元長

冷泉大納言（政爲）殿

小倉大納言（季種）殿

飛鳥井前中納言（雅俊）殿

中山宰相中將（康親）殿

細書明日各可有御參之由、其沙汰候也、

三日、細雨下、及晚晴、今日右少賴繼（乘至）可拜賀也、習禮兼日加諷諫了、秉燭令著裝束、依御著到之儀、不待出門之一獻、倒衣參內書之、右少辨參仕、舞踏、殿上之儀如形、遂無爲之節、祝著之、

〔實隆公記〕四十六　三月三日、○中略禁裏著到和歌、參內書之、

〔後柏原院御著到〕永正十年三月三日、

初春

御題ハ弘長百首題

三條西實隆參內著到和歌ヲ書ス

御製

實隆　あら玉は春のゆゝしをいく先くり空よ月日の老めしをりしる　（三條西）實隆

冷泉政爲　いゝりはゝ宮る乃中道いをゝへりかゝらぬ花は春ゝきぬら爲　（冷泉）政爲

小倉季種　年といひくくらにも昨日々ふは春玄るやなへての心ゆるらん　（小倉）季種

元長　いく世ゆを年はをなゝく々り返しはきせぬ御代の春茂知哉　（甘露寺）元長

田向重治　伊はしゝ世々さぬく風乃音羽山春くほゝさはゝらを乃とをし　（田向）重治

飛鳥井雅俊　四乃海やゝ嶋ゝきて浪風のはさまは春や老ちゝへ留らむ　（飛鳥井）雅俊

三條西公條　はとゝなる心を色のさしめよて日影よゝはを春はゝらゝ乃　（三條西）公條

をさも猶雪々の雲茂いはる日のひゝりよゝゝ春のさゝりゝせ

冷泉永宣　明わさる雲井さるゝにく留春乃光よゝすむ空のゝとけを　（冷泉）永宣

姉小路濟繼　消あへぬ氷をわさる風のをとはいはくよとけて春茂しるらん　（姉小路）濟繼

中山康親　まさはより心よそ先し春は色茂野山よはゝと誰ゝゝるらむ　（中山）康親

冷泉爲和　もゝ人の心をゆらく玉はゝくりゝへしてや春はきぬらん　（冷泉）爲和

〇四日以後六月十四日ニ至ル霞、鶯、春雪、若菜、梅、柳、春雨、歸鴈、花、春月、藝、歌、冬、三月、盡、卯花、郭公、夏月、五月雨、螢、夕立、納涼、早秋、七夕、七夕後朝、露、萩、薄、虫、鹿、初鴈、月、擣衣、霧、紅葉、暮秋、初冬、時雨、落葉、冬月、霰、雪、歲暮、初戀、忍戀、不逢戀、初逢戀、曉別戀、後朝戀、逢不遇戀、忘戀、恨戀、曉、松、竹、山、河、橋、關、旅、海路、山家、田家、述懷、懷舊、夢、神祇、釋教、祝ノ六十七題千百八十九首ヲ略ス、

内藏寮申請ノ臨時公用米ヲ下行セシム、

〔賴繼卿記〕〇歷代殘闕日記百所收

宣旨

内藏寮申臨時公用米、

拾斛　副本斛、

仰、依請、

右宣旨、申(早カ)可令下知給之狀如件、有禮番、立番、ウスヤウノ水引ニテヒ子リメヲ上下ヲイフ、細サ如糸水コキセス、

三月三日　右少辨頼繼(唐室)奉

進上　甘露寺中納言(元長)殿

幕府、土御門有宣ノ所領若狹名田莊ニ禁制ヲ掲グ、

〔土御門家記錄〕一御家道規則記

禁制　土御門二位有宣知行分若州遠敷郡名田庄上付納田領給(村カ)

一軍勢甲乙人亂入狼藉事、附相懸非分課役事、

一伐取竹木事、附苅田狼藉之事、

右條々、堅被停止訖、若於違犯輩、可被處嚴科之由、所被仰下也、依而下知如件、

永正十歲三月三日　對馬守平朝(松田英俊)臣

美濃守藤原朝(唐藤基忠)臣

四日、癸酉相模清淨光寺意樂ヲシテ、國家安全、寶祚延長ヲ祈ラシム、

〔清淨光寺文書〕○相模

宜奉祈國家安全、寶祚延長者、天氣如此、仍執達如件、

永正十年三月四日　右中辨(高倉小路秀賢)(花押)

勅使手輿ヲ用フ

玄昌參內

宗恕ノ法嗣

大德妙心寺等位ト勅定

玄昌(桂峯)ヲ妙心寺住持ト爲ス、是日、入院ス、勅使葉室頼繼(葉室頼豊)、之ニ莅ム、

〔元長卿記〕八　三月四日、晴、妙心寺入院也、右少辨參向、用手輿、四方輿依難得也、

五日、晴、妙心寺長老桂峯、參內、進物如例、被訪勅使之宿所、以愚亭爲其所、愚老執奏之間、對予被謝、折紙如件、

〔寅闇疏〕桂峯座元住妙心、嗣禪師雪江宗深(宗深)、々嗣義天紹(義天紹)、々嗣禪源大濟禪師日峰舜(宗舜)、

我愛其禮、豈曰黜周而王魯乎、時與大德本寺有隙、勅定妙心爲本寺等位、五日ノ條參看、六年二月二十

天生斯人、寔非愚虞而智秦也、

神龍躍三級浪、

威鳳覽千仞輝、

某　祖昇獨扛、

禪關先入(慧玄)關山派、

雲門(文偃)嚮七八生知識、　夐出亞聖孟軻、僧寶傳再武庫、

永正十年三月四日

虛堂頌一百則機緣、果逢後世楊子、

聞西伯善養老、禪師名昌、濃人、州有養老瀑、

表東海其太公、禪師々仁濟恕長老、宰妙心東海庵、々乃悟溪心宗禪師塔也、

家有餘慶、握金財於掌內、仁濟握周鈔而誕、金財比丘生、兩手有兩錢、收之隨現、

法無多子、掛寶劍於眉間、

不唯見與師齊、

況後身以道殉、

吹出世曲、

挑正法灯、山名正法、

智者謂智、仁者謂仁、万殊歸一、

孝于惟孝、友于惟友、千聖同參、

〔妙心寺住持次第〕第二十三世桂峰昌和尙、

五日、甲戌、觀花御宴、

〔實隆公記〕四十六 三月五日、禁裏花事公方（義尹）御沙汰、參內、

〔元長卿記〕八 三月五日、晴、○中略今日花御覽、一獻、依御沙汰御祇候、

妙心寺第二十三世

義尹ノ沙汰

宗恕妙心寺東海庵ヲ宰ス

○十日、觀花御宴ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔實隆公記〕四十六 三月十日、花事申沙汰、

〔元長卿記〕八 三月十日、晴、今日花御覽、男女申沙汰云々、進上土器之物御樽等、召進頭辨（甘露寺伊長）、

十日、己卯、幕府、攝津森本新五郎ヲシテ、同國橘御薗內大路村下司公文職ヲ安堵セシム、

〔杜本志賀文書〕

攝津國橘御薗內大路村下司公文職事、爲本領之間、以御成敗所被知行也、殊彼兩職事者、爲上意不被仰出候上者、彌領知不可有相違之由候也、仍執達如件、

永正十
三月十日　　貞船（曽根）（花押）

森本新五郎殿

十二日、辛巳、月次御樂始、

〔元長卿記〕八 三月十二日、晴、月次御樂始也、午下刻著直衣參內、花山院前左府（政長）被參、予音頭、

樂目錄

近衛尚通等參賀

西向衆

東向衆

一代一度ノ沙汰

要脚千貫

万歳樂、只、五常樂急、甘州、春楊柳、小娘子、慶德、林齋、朗詠、花上菀、

有一獻、及晩退出、

十三日、壬午、知仁親王御所和漢聯句御會始、

〔拾芥記〕中　三月十三日、雨降、○中略今日禁裏(知仁親王)御方御和漢始也、

義尹、日吉禮拜講ヲ修ス、尋デ、廷臣等、之ヲ賀ス、

〔後法成寺尚通公記〕七　三月十三日、壬午、夜來雨下、從勸修寺(尚顯)、明後日十五日、禮拜講御禮可有參賀之由相觸、食入可爲如何哉之由申送處、十六日迄觸穢之由、不可苦之由申間、可參賀之由申之、

十五日、甲申、晴、禮拜講爲御禮參賀、進太刀、下官、大覺寺(性守)竹内、上乘院(曼殊院慈鳳法親王)尊乘院(道尊)等也、

直垂衆

西向衆(令供奉)

民部卿入道、飛鳥井前中納言(雅俊)、廣橋中納言(守光)、三條中納言(公條)、勸修寺(尚顯)新中納言、高倉宰相(永家)、

中山宰相中將(康親)、甘露寺(伊長)頭辨、山科中將(言國)、

東向衆

中御門中納言(宣胤)、四條宰相中將(隆永)、正親町宰相中將(實胤)、右兵衛佐、官務、局務等也、

〔拾芥記〕中　三月十三日、雨降、爲室町殿御一代一度御沙汰、被行日吉禮拜講、要脚及千貫云々、

世上雜說行ハル

義尹返事七箇條

義尹ノ在所ヲ尋ネシメラル

十五日、天晴、就禮拜講被行、今日室町殿ヘ御太刀參云々、

十七日、丙戌、義尹、大内義興、細川高國ノ專恣ヲ怒リ、近江甲賀ニ出奔ス、

〔公卿補任〕四十五　權大納言從二位源義尹、四十八、征夷大將軍、三月十八日、出奔江東甲可(賀)山中、

〔後法成寺尚通公記〕七　三月十八日、丁亥、晴、昨夜大樹御遁世云々、言語道斷次第也、京都仰天、無是非者也、對此間兩京(大内義興、細川高國)兆御述懷云々、

(朱書)〔大樹御遁世事〕

十九日、戊子、晴、心中念誦如例、大樹之進退無心元由、以俊永、式部少輔(烏山順光)許江申遣處、使者ニ令對談、祝著之由令返事、

廿日、己丑、晴、世上造說、蒯菴來、令雜談、

四月三日、辛丑、雨下、蒯菴來、從江州大樹御返事旨七ヶ條云々、無指儀、種々令對談、勸一盞、

從者

〔和長卿記〕二　三月十八日、戊戌、許大樹御隱遁、御共(供)者、種村三郎、李阿彌、上二人也、御所中以下一向不知于世云々、御願者一人不被召具也、

十九日、早旦此事風聞、仍臥(ヤヽ)京中上下騷動、無被仰置之旨、人不知子細、又不知御在所、禁中驚歎無上之樣、先以傳奏被仰出いせ(伊勢貞陸)守、御落所早可尋申上之

由、被仰下兩京兆了、晩頭自所々注進之樣、江劔甲賀谷有御座之由被一定了、依之兩京兆以下皆有仰畏趣、無左右不進飛脚等、又於奉公（々々）衆者、假御落等雖令尋知、無召者不可參之由有御書之條、皆不得參也、凡今度之儀、有御野心子細、彼谷有御度（渡カ）歟之由、諸大名相存候間、急度還御之申沙汰無其沙汰上、於所々内談日々由也、

〔元長卿記〕八　三月十八日、晴、大樹去夜御逐電云々、對諸大名、可被仰子細有之云々、御在所後聞江州甲賀郡之内タマキ館云々、

甲賀タマキ館

〔拾芥記〕中　（三月脱カ）九日、室町殿甲賀へ被遷御座故、京都物忩、

伊勢貞陸亭ニテ高國義興等ノ談合

〔嚴助往年記〕上　三月十八日、公方御逐電、御落所江州甲賀云々、對細川御上仰天、

〔伊勢貞助記〕〇後鑑二百七十八所載（畠山義元）　三月十八日、義稙樣至ーーー被移御坐ニ付テ、於貞陸亭、高國、畠匠（畠山勝順）大内左京亮、畠山勝仙（畠山勝順）院御談合之儀アリ、仍終日大御酒、各御出之刻、厩ト端ノ四間ノ縁ヘ貞陸被出合、申請被申也、下山ハ少御出遲々候間、各被待申之、高國ノ前ニテ一禮アリ、其まゝ上坐ヘ御ナヲリアリ、左勝仙院、ト山、修理大夫殿、大内左京太夫殿、右藤宰相殿、右京大夫高國、此外各著坐アリ、

二十二日ヨリ七日間

〔月舟和尚語錄〕二　（永正十年）四月旦上堂

祝香相公甲賀、赴

宰相入山中而聽松、衮職宜待再任、方士向海上而求藥、寶算必保長生、

〔長亨年後畿内兵亂記〕（永正）同十年三月十七日夜、義稙甲賀御出、

〔曆仁以來年代記〕（永正）同十、三月十七日、義尹將軍江州甲賀郡江被移御座、

〔皇年代私記〕（永正）同十三十八、將軍出奔江東、

〔かゝ年代記〕永正十年癸酉三月十八日、將軍江北ゟゝせ出、

〔異本年代記拔萃〕三月十七日、義尹將軍江州甲賀郡へ被移御座、〇年代記抄節同ジ、

〔改元年號字〕（永正）十年三月十八日、將軍出奔江東、

〇義尹、京都ニ歸ルコト、五月三日ノ條ニ見ユ、

十八日、丁亥、大神宮ヲシテ、變異ヲ祈禳セシメラル、

〔内宮禰宜荒木田守晨引付〕下

公方樣近江山ゟゝ（風度御下之時、）一變異之事、公家幷室町殿御祈、自來廿二日、一七ヶ日可致懇念之由、可被下知神宮旨、内々被仰下也、

十八日　守光（廣橋）

四位史殿（小槻時元）

頭中將（正親町實胤）他行之由之間、內々令申也、

日時經過ニ依リ吉日ヲ以テ始メシム

就變異事、傳奏折紙如斯、御祈始行日、雖可爲廿二日、既延引之上者以吉日可致懇祈之由、可令下知神宮給也、恐々謹言、

三月廿三日　左大史判

謹上　祭主三位殿（藤波伊忠）

祭主下知

就變異之儀、公家幷室町殿樣御祈事、傳奏折紙官狀如斯、仍案文下之、以此旨、可被告知二宮狀如件、

三月廿三日　神祇大副判

大司宿館　〜伊忠

變異幷室町殿樣御祈事、傳奏一紙官狀、祭主下知如斯、仍獻覽之、可令存知給候、恐々謹言、

四月三日　大宮司判

謹上　內宮長殿　〜廣長（大中臣）

皇太神宮神主請文

皇太神宮神主

依御教書注進、致御祈禱子細事

右得去月十八日御教書幷次第施行儀、變異之夏者、公家幷室町殿御祈、自來廿二日一七日ヶ日、致懇念之由事、謹所請如件、去月廿三日官狀之趣者、御祈始行日、雖可爲廿二日、既延引之上者、以吉日可致懇祈之由也、任被仰下之旨、凝精祈者也、爰當宮朽損以外之處、殊此間連日雨儀、御殿濕損破壞之爲體、巨盡紙面、御顚倒近々一定歟、忝天照太神者、天下無雙神靈也、被閣餘事、先以被奉鎭本宮神意者、則爲天下無雙政者哉、室町殿御飯洛御祈、抽忠勤之條、尙以天下太平御祈、神慮甚爲令然、粗言上如件、以解、

精祈ヲ凝スニ依リ造營ヲ請フ

義尹歸洛ノ祈

永正十年四月五日　大內人〜行久上

永正十年三月十八日

禰宜從四位上荒木田神主守則　十人署

先日御祈禱次第施行送給候時、不可致御請由雖被申、頭人閤閤之儀、自造宮所承子細候條、今度事者、御請申候由、自私能々可令申由、此旨御披露肝要候、恐々謹言、

四月六日　内宮政所大夫師秀判

謹上　一志大藏殿

（今度ノ祈禱ニ限リ特ニ領承ス）

連々申候、依兩宮禰宜等不和、御造宮于今不事行候、就今度儀、二宮輩早令和談、抽御祈禱丹誠、急御歸洛之由、御造宮之儀、可令御沙汰之旨、可被仰調事專一候、恐々謹言、

三月廿二日　（美濃守）摂津守（齊藤）基雄判
造宮使殿　（中原摂津守）齊藤美濃守政親判

（幕府奉行ヨリ兩宮ヘ和談祈禱スベキコトヲ命ズ）

此時、千貫ッヽ可有下行由、祭主書狀、奉書ニ被副下也、○内宮引付異事ナシ、

（千貫ヲ下行、）

〔續史愚抄〕四十四後柏原院中記、

三月廿三日、壬午、被仰變異御祈於神宮、他社同之歟、時元

十九日、戊子、等持寺住持某ニ、香衣ヲ聽ス、

〔賴繼卿記〕○歷代殘闕日記百所收

可令著香衣禮百疋送之、給者、依天氣執達如件、

三月十九日　（基宣顯）右少辨判

□（脱カ）持住寺（等持）上人御房

毛利元就、同興元ヘノ奉公ニ就キ、志道廣良ト誓約ス、

〔萩藩閥閲錄〕十六志道太郎右衞門

御契約申條々事

一於以後、無相違、長久得御扶持、奉公可申事、

一如此申合候上者、御方我等御間之儀付而、万一人何りと申子細候者、如仰、直ニ御尋あり、又ハ申、互にきやくしん申間敷事、

一於當御洞、拙者若氣ニて、何方へも自然無理を申候ゝる時者、預御意見候へく候、そ是をも承引申さす候者、加樣被申合候筋目を御ちらへ候へく

（廣良ノ扶助ニ依リ奉公スベシ）

（互ニ隔心アルベカラズ）

（無理ヲ主張スル時ハ意見ベシ）

永正十年三月十九日

兄興元ニ忠節ヲ致スベシ

候、又御方様人々むりを被仰候者、乍恐こうさい申候事、

一御當家之趣、可然御座候様ニ申合、興元(毛利)様へ無別義奉公忠節いたし、御奉公可被召候、此上者、かりそめの事共、太郎(興元)殿様へ御ふそく御座候者、一向取あい申間敷候、又我等少も如在緩怠候する時者、一向御同心不可有候事、

一其外之儀者、大小事共ニ奉公申、ゐとへゑ可得御扶持候事、此旨聊も僞候者、

牛王

梵天、帝釋、四大天王、殊者八幡大菩、別者嚴嶋大明神、天滿大自在天神御罰可罷蒙者也、仍起請文如件、

永正十年　三月十九日　元就(毛利)御判

志道大藏少輔殿(廣良)参

導師公助

二十日、己丑、御生母贈皇太后(朝子)御月忌、御法會ヲ安禪寺ニ修セラル、

〔實隆公記〕四十六　三月廿日、贈皇大后御月忌、御經供養於安禪寺有此事、御導師公助僧正、題名僧一口、

奉行正親町實胤御願文草東坊城和長

御母三條實香女田向重治第ヲ御産所ト爲ス

今出川季孝等參賀

禁裏ヨリ太刀ヲ賜フ

土御門有宣勘文ヲ上ル御湯始

著座公卿　甘露寺中納言(元長)　御布施取殿上人重親朝臣(藤田)　奉行頭中將實胤(正親町)

朝臣　御願文草和長(東坊城)卿　清書行季(世尊寺)朝臣　御承仕事闕如、被召渡青蓮院承仕歟、兼而聊有沙汰、

伏見宮貞敦親王ノ王子、邦輔(伏見宮御記)御誕生アラセラル、

〔邦輔親王御誕生記〕○伏見宮御記錄亭三所收

永正十年癸酉三月廿日、晴、今曉子時男子出生、母儀三條內大臣實香公女、廿一歲、以兵部卿重治(田向)卿、宿所爲產所、宮中之間、七夜之間、宮中亦禁中無出入、禁中上臈局、上臈母儀西向等馳被參、上臈則歸參、西向暫逗留云々、各息災之由申、珍重々々、基規(持明院)朝臣參、珍重之由申、

廿一日、早旦三條中將公賴朝臣太刀持參、○中略、內侍所御神樂ノコトニカヽル、正月三十日ノ條ニ收ム、菊亭中納言、半井宮內少輔明孝(川季孝)朝臣、□□肥後守行益等進太刀、冷泉前宰相、永宣(四辻)、公音(澄尾)、隆康朝臣、範久(高倉)等參賀、抑從禁裏御太刀□範久爲御使、若宮誕生珍重之由被仰下、御祝著由御返事被申之、兵部卿申次也、內上臈、新典侍殿、二位局、三條等、以書狀被賀申、南御方御返事被申、自竹內宮(後殊院慈禪法親王)以花德院被賀、

廿二日、晴、勘文二位(土御門)有宣卿勘進、眞名假名二通也、今日湯殿具造始、御湯始、藏胞衣等也、胞衣爲土用之中間、先可懸軒云々、三條西向、一荷兩種持參云々、

廿三日、雨降、伯雅業朝臣太刀持參、兵部卿出逢、申次了、御安古備後等一桶各進之、

廿四日、雨晴、〇（略）中西向今夜被歸、產所無人、仍大姬宮御方御出、無殊事云々、

廿五日、晴、〇（略）中伏見政所一荷兩種、太刀等持參、鯉自城南進之、明日七夜爲受用、每度所被仰也、今日藏胞衣、肥後守行益役之、若宮著ウフ衣始也、殊更祝著省之、

御產衣始

廿六日、晴、今日七夜也、於御所先有（マヽ）三獻有之、則南御方如（女）中以下悉被出產所、男衆（綾小路俊量）按察使、兵部卿、菊亭中納言、冷泉宰相、世尊寺三位、隆康朝臣、三條中將、基親、重親等朝臣、範久也、三獻計更了各退出云々、田向、庭田、同北向、一荷兩種進之、從菊亭同前云々、余今夜密々行產所、若宮見參申、則歸了、

御七夜

廿七日、晴、院廳信重朝臣一樽、太刀持參、畠山播磨守後室一荷兩種送進之、不思寄芳惠、尤令自愛、是南御方聊依有知人歟、神妙也、前內府（三條西實隆）太刀持一腰持參、竹園（邦高親王）御對面、冷泉大納言（爲廣）太刀持參、御對面同前、竹內宮來臨、今夜有一宿、令雜談申、

貞敦親王產所ニ赴キ若宮ヲ覽給フ諸家ヨリ祝儀

廿八日、晴、典藥頭（和氣）親就朝臣、太刀、大藏卿、太刀、兩御所進之、四辻大納言（季經）太刀、賴孝（飛鳥井）太刀、

等持參、各竹園御對面、新典侍殿來臨、一荷兩種被進、三條內府同前、太刀糸、持參、於產所有三獻云々、以後竹園御對面、余久參不申、舜首座一桶兩種進之、

廿九日、雨降、中山宰相（康親）中將、太刀持參、無御對面、大通院太刀持參、飛鳥井少將（雅綱）母南向參內、上臈局來臨、三種一荷被送云々、曇花院御寮同道、今夜被逗留云々、今夜余參內、當年始也、於常御所有三獻、退出、

四月一日、雨未休、至午前屬霽、妙法院光臨、產所へ樽等被進、從竹內殿同前云々、姉小路子息、同田向養子等參、

二日、雨降、右兵衞督（四條隆永）太刀持參、

三日、雨下、南松院光伊一荷兩種持參、夜西向產所へ被參云々、宮笥有之、

四日、陰晴不定、伏見寺庵惣庄政所代等御禮申之由、重親朝臣令披露、目錄註別紙、半井小女參、一荷食籠持參云々、兩三日可祗候云々、上臈母儀有內緣歟、

五日、朝間雨降、午時快晴、暑氣相催、今日若宮御剃髮始也、午剋菊亭（今出川公興）前右府爲嘉例被役之云々、殊更祝著之儀有之、諸（五辻）仲太刀持參、依他行遲參恐入之由申、

今日勸修寺宮（恆弘法親王）帶加持被申、御禮、馬、太刀金、送進之、上臈聊咳氣之間、召明（半井）孝朝臣見、不苦由申、自今夜高就（枕カ）付寢、女房一人不寢而祗候、其外男共不候云々、

御剃髮始

勸修寺宮恆弘法親王帶加持上臈咳氣

六日、霽、明孝朝臣參、入參藿香湯三囊進之、脈不苦之由申、珍重、鹿苑院(金溪)、同御喝食來臨、一荷兩種被進、賀承申、勸修寺門跡若宮(覺胤法親王)同道、宮筒等送賜之、誕生無事珍重之由被賀了、

十一日、雨下、卽成院來臨、樽等被進云々、

十六日、雨、終日終夜不退轉、四辻宰相中將(公音)一荷三種持參、始而祇候也、三木五郎一桶兩種持參、

十七日、今日忌開也、殊更有一獻、各祇候、於產所有祝著、於御所兩所令祝著、晚若宮上臈歸參、千秋萬歲珍重々々、

〔伏見宮御系譜〕

貞敦親王

邦輔今上親王（母三條太政大臣實香公女、永正十癸酉年三月廿日子剋誕生、）

○三條實香ノ女、貞敦親王ノ上臈ト爲ルコト、六年八月二十八日ノ條ニ見ユ、

二十六日、乙未、毛利興元、延常廣秀ニ、安藝坂ノ內延常成光名及ビ小力、菅原、正元等ノ地ヲ給ス、

有富及ビ中麻原ノ內諸所ヲ代所トシテ與フ

〔萩藩閥閱錄〕四十九　坂九郎左衞門

坂之內延常成光名之事者、只今より扶持申候、有富之內光貞、成光、有末、中麻原之內下末永兩四名之事ハ、代所として、坂之內小力、菅原、正元、光永、幅入、彼在所沒扶持申候、爲後日之狀如件、

永正十年　三月廿六日　　興元(毛利)御判

延常長門守(廣秀)殿

○興元、渡邊杢助及ビ井上與三右衞門尉ヲ各坂ノ內百五十貫文ノ地ノ代官ト爲スコト、便宜左ニ合敍ス、

〔井上文書〕○長門

永正□(千)□(年)□(三カ)月廿五日

坂　□(右カ)　百五十貫分事

一き　反　分米　二石

永正十年三月二十六日

永正十年三月二十六日

一すゑひろ□（名カ）　田二反半
　分米　一□（石）

散田
一國さゝ名　田一丁一反小米六石
　さんてん分

一すりいら名□丁小
　分米　三石八斗
　畠一反麥一斗大豆二斗
一ほ祢入名　田一丁一反
　分米　五石三斗
　畠五反麥五斗大豆一石
一すけもり名　田一丁五反
　分米　六石二斗
一下おゐり名　田一丁三反大
　分米　三石二斗
　畠四反麥四斗大豆六斗

神田
一竹丸名　田八反
　分米　四石
一有木名　田六反小
　分米　二石八斗
　畠大大豆一斗、
一次郎丸名　田六反三百歩
　分米　三石四斗
　畠二反麥二斗、大豆三斗、
一さゝまさ　田四反
　分米　壹石二斗
一ゑけのふ　田七反小
　分米　貳石八斗
い上田數　九町是ハちうやくさんてん□、
　分米卅七石六斗
　此内米四石御神田

永正十年三月二十六日

永正十年三月二十六日

定米卅三石六斗

い上　畠一丁二反大

麥一石二斗

大豆二石二斗一升

給人方

一ゑもゝの進（やすひろ、さのふ、ゑけのふ、まきのつゐ、いぬ丸、さもり、ためさ、ゑや、ゑや、ひろ、いちえら、）

一さ京進

一四郎右衛門さ孫ゑつ、田八反小

一長門守散田、のふは孫名、田二丁半

米九石九斗六升

寺方

寺うゝ

一てら山　田一丁九反大

一ゑやうゝん寺　田八反

一大てら　田八反

一ふけ川　田三反

市口

代官渡邊杢助

一神ぬし神田　田一丁三反大

一さん玄給

一七反　宗さ衛門□（殺カ）かこゑ二石五斗

一五反　まり田　二石

市口

一下小路

永正十年

四月十七日

坂三百貫之内百五十貫之代官之事、渡邊杢助ニ所申付也、

興元（花押）

永正十年（ミつのとの）（とり）三月廿六日

坂三百貫之内百五十貫分

ちうやく分

一ともなり名　田六反

永正十年三月二十六日

分米　二石六斗

一ともはた名　田二反　分米　八斗

一國すゑ名　田五反　分米　二石

一きく田四反（さんてん）　分米　二石

さんてん分

一ゑやうゑき名　田一丁八反

分米　八石三斗

畠五反小（麥六斗、大豆八斗、）

一はさもと名　田七反廿歩

分米　三石二斗

一ミつとも名　田九反

分米　四石

畠大（麥一斗、大豆一斗三升、）

一ミゝ長名　田一丁六反

分米　六石四斗

畠半（本屋敷麥一斗、）

畠半（藏使屋敷大豆二斗、）

一岡さき名（きおん神田）　田八反

分米　二石

一さはゑけ名　田七反小

分米　三石二斗

一門田名　田六反

分米　二石

畠一反（麥五升、大豆一斗、）

一かゐ丸名　田一丁

分米　二石八斗

畠半（大豆一斗、）

い上田數九町八反小廿歩
是いちうやく、さんてん共ニ、
分米三十九石三斗
此内米二石（きおん神田、）
定米卅七石三斗
い上畠八反（麥八斗五升、大豆一石二斗三升、）
給所うさ
一宗さ衞門（ともきよ、すゑさと、）
一源さ衞門　米丸、
一いかと守　くるむら、
一長門守（もとつ涂、おりミつ、）
てらうさ
一いるゑ寺
一とうるん寺　田八反
一おるら寺分（さんてん）　田一丁大

分米　五石五升
畠二反大（麥二斗一升、大豆四斗、）
一あかくら　田一反小
一次郎太郎（かるさいく）給
市口
一上小路
右坂三百貫之内百五十貫分之事、井上與三右衞門尉（代官井上與三右衞門尉）所申付也、
永正十年　四月十七日　興元（花押）

二十九日、戊戌、盡和漢聯句御會、
〔元長卿記〕八　三月廿九日、陰、盡御會可參候由、昨日可仰（育カ）旨、仍參内、衣冠、
行道をゝふるとちめる春霞　前内大臣（實隆）
黄鳥樹栖英、　御製
鹿苑院已下、例式御人數也、（發句三條西實隆、入韻御製）

毛利興元、山縣重房ニ、安藝下麻原之内兩重光名ノ地ヲ給ス、

〔萩藩閥閲錄〕六十三 山縣平八

下麻原之内兩重光名事、爲給所遣置候、有様之儀、不可有無沙汰亥專一候、仍狀如件、

永正拾年
三月廿九日　山縣右馬助（重房）とのへ　興元（毛利）御判

是月、水無瀨英兼、攝津水無瀨莊ニ守護使不入ノ奉書ヲ下サンコトヲ幕府ニ請フ、

〔水無瀨宮文書〕三 ○攝津

水無瀨少將英兼雜掌謹言上、
右子細者、攝州嶋上郡水無瀨莊事、守護使不入之地也、任證文之旨、被成下奉書者、可忝畏存、仍言上如件、
永正十年三月日

三河大河内貞綱、尾張守護斯波義達ノ援ヲ得テ、遠江深嶽城ニ籠ル、是日、駿河守護今川氏親ノ先陣朝比奈泰以、攻メテ之ヲ陷ル、尋デ、氏親、又貞綱、義達ヲ同國引間城ニ破ル、

氏親笠井ニ嚴寺ニ楞陣ス義達井伊ニ直親ト共ニ深嶽城ニ籠ルニ義達奥ノ山ニ退ク

〔宗長手記〕永正十一 まゝ

大河内、信濃、三州、尾張をかゝらひく、大亂くたゝつ、今度の御進發、笠井庄楞嚴寺に御馬たてらる、諸軍勢川を打越、大菩薩といふ山まの著陣、北ハ伊井次郎（遠州住人直親）、深嶽といふ山（治部少輔義達）武衛を覺悟申、又浪人以下相あつ万り、毎夜の籌曉の星れとし、泰以（朝比奈）るを〳〵とうちおとし、武衛同奥乃山ハ退、則尾張歸國、此深嶽の城ハ、なゝころ甲斐美濃守數千の軍兵ハく、三ケ年に及責、はるゝ落居せゝ、となり、泰以戰功ハより、當國無爲に屬ゝ、〇上下略、永正十一等ノ傍註ハ後ノ記入ナラン、

〔重編應仁記〕十

斯波今川於遠州軍事、付朝倉出身事

是ヨリ數箇年洛中ハ治リケレ共、諸國ノ兵亂ハイツ果ヘシ共不見ヘ、就中斯波家ノ領國ハ越前、尾張也、遠江國ハ本ハ今川家領地セシヲ、是モ中比ヨリ斯波家ノ領ト成來ルニ、今又斯波家衰ヘテ、今川家ハ應仁ノ亂ニモ不相雜、威猛ニシテ遠州ヲ押領セントス、其比三河國臥蝶ノ住人ニ大河内備中守貞綱ト云者有リ、本ハ當國ノ守護吉良氏ノ家禮也シカ、近年國中ニ武威ヲ振テ、遠三兩國ノ士ト相親、一揆ヲ語ヒ、黨ヲ結ンデ、惡逆度々ニ及ブ、此貞

貞綱ノ出自

菊一揆氏親上洛シテ功ヲ樹テントス

貞綱遠江ヲ押領ス

綱先祖ハ、源三位頼政ノ二男源太夫判官兼綱ヨリ、十一代ノ末孫ニテ、家ノ紋丸ノ内二十六葉ノ菊ヲ著ケレバ、皆人菊一揆トゾ號シケル、此時今川修理大夫氏親ハ、領國駿河ニ居住シケルガ、如何ニモシテ、大内介義興ガ如クニ上洛シ、公方家ヘ忠ヲ盡シテ、大功ヲ立ント企ケレ共、路次ノ遠州、尾州ハ、皆斯波家ノ領國ニテ、度々合戰ニ及ケレバ、不遂其功、此節大河内貞綱ハ斯波家ノ味方ト成テ、信濃、三河ノ勢ヲ語ヒ、遠州ヲ押領ス、先ヅ是ヲ退治ノ爲ニ、永正十年ノ春三月、氏親一萬ノ兵ヲ率シ、遠州ニ打入テ、笠井ノ庄楞嚴寺ニ陣ヲ取ヌ、斯波治部大輔義達ハ、尾州ノ勢ヲ率シ、遠州ノ井伊次郎直親ヲ相伴ヒ、深嶽ノ城ニ籠ラレケルヲ、今川ノ先陣朝夷奈十郎泰以ト云者、只一手ニテ深嶽山エ寄來リ、案内ヲ知テ、一夜討シ、忽城ヲモ攻落シテ、數百人ヲ討捕ヌ、尾州勢悉打負、同國奥ノ山エ引退ク、大河内貞綱等散々ニ落失タリ、翌年、又甲州ノ武田次郎信昌兄弟牟楯シテ合戰ニ及ヒ、氏親エ加勢ヲ請ケレハ、駿遠兩國ノ勢二千餘騎ヲ差遣ス、此勢甲州勝山ノ城ニ籠リ居テ、戰ニ隙無レハ、相殘ル今川家ノ兵無勢ナラント推量シテ、同正月ヨリ、大河内貞綱又蜂起シ、信濃、三河、尾張ノ一族、并浪人共ヲ相語ラヒ、又々尾州ヨリ斯波

貞綱義達等ト引間城ニ籠ル

城陷ル

義達降ル氏親之ヲ普濟寺ニ置キ出家セシム

戸田彈正少弼等貞綱ノ殘徒

義達ヲ請待シテ、遠州濱松ノ庄引間ノ城ニ楯籠リ、天龍川ノ前後在々所々ヲ押領ス、今川氏親是ヲ聞テ、六千餘騎ノ兵ヲ率シ、同年五月下旬、遠州エ發向シケルニ、折節洪水夥ク、天龍川ニ漲ケルヲ、氏親川船三百餘艘ヲ竹ノ大繩ニテ悉繫寄セ、船橋ヲ拵ヘテ、多勢一同ニ押渡ル、斯波勢モ川端エ打出、大河内、高橋等矢軍シテ防ケレ共、散々ニ切立ラレ、又悉敗軍ス、今度ハ遠引モ不叶、纔五十餘町ガ中エ悉被追包テ、城四ツ五ツニ楯籠リ、同六月ヨリ八月迄相戰シガ、後ニハ寄手ノ今川勢ヨリ、駿州安部山ノ金彫ノ者ヲ呼寄セ、城中ノ井水ヲ悉彫崩サセ、水一滴モ無シケレバ、城兵術計盡果、同八月十九日、引間ノ城々攻落サレ、大河内貞綱、同弟巨海新右衞門、高橋以下楯籠ル軍兵千餘人討死シ、斯波治部大輔義達ハ、降人ト成テ出ラレケルヲ、氏親ノ下知トシテ一命ヲ助ケ、普濟寺ト云禪院エ入置キ、義達今日ヨリ遠州ニ望ム夏ナク、自今以後、堅ク今川家エ向テ敵對スヘカラズト、誓約ノ起請文ヲ取堅メテ、剃髪黑衣ヲ著セ、太刀刀ヲ奪取テ後、尾州エ送リ返サレケル、是ヨリ斯波家ノ武威衰ヘ、尾張ノ國人モ皆義達ヲ疎ンジケレバ、彼下知ニ屬者無シ、然レ共三州ノ住人戸田彈正少弼、諏訪信濃守等、猶大河内ガ殘徒ヲ催シ、遠

ヲ催シ遠江ニ亂入ス

斯波氏ノ出自

州ヱ亂入シテ、合戰度々ニ及ビケリ、就中三州ノ堺、舟方山ノ城代多末又三郎ト云者、今川方ニテ在ケルヲ、彼一揆等攻落シ、又三郎討死シケレバ、掛川ノ城主朝夷奈備中守泰以又兵ヲ將ヒ、寄來テ船方ノ城ヲ攻取ル、角シテ遠州ニモ合戰ノ隙無リシガ、終ニハ國人等今川家ヱ歸服シテ、斯波家ハ衰果ニケリ、抑此斯波氏ハ、足利氏族ノ中ニテモ、嫡流ノ良家也、其由來ヲ尋ルニ、元祖上總介義兼ノ孫足利左馬頭泰氏ノ一男尾張守家氏ノ子尾張將監宗家ヲ始而斯波ト稱號ス、宗家ノ孫尾張修理大夫高經ハ、等持院殿（足利尊氏）ノ御時、建武ノ亂中、天下草創ノ初メ、御敵ノ惣大將新田左中將義貞ヲ討取リ、後ニハ越前、尾張、遠江ノ守護職ニ被任、道朝禪門是也、其後寶篋院殿（足利義詮）ノ執事職ニ御賴有リ、此時始而此職ヲ天下ノ管領ト名付ラル、道朝ノ舍弟伊豫守家兼ハ、奥州ノ探題職ニ下サレ、彼國ノ御敵北畠ノ餘類ヲ退治ス、道朝ノ男子數多有リ、一男陸奥守家長ハ、建武ノ亂ニ、鎌倉ニテ討死シ、二男左京大夫氏經ハ、九州ノ探題職ニ補シ、鎮西ノ御敵菊池ヲ征ス、三男左衞門佐氏賴遁世ノ後、四男治部大輔義將、父ノ家督ヲ相續シテ、管領職ニモ三箇度迄被補任、其レヨリ代々管領職ト成リ、仁木、細川、畠山家ニ相並ベリ、且又公方家ノ御先祖

貞綱援ヲ義達ニ請フ

ハ、彼泰氏ノ三男治部大輔賴氏ヨリ御相續有リケリ、是ハ賴氏ノ御母堂ハ、北條修理亮時氏ノ娘ナレバ、鎌倉執職ノ權威ニ因テ、角定リケルトカヤ、然ルニ斯波家ハ、代々尾張守ニ任ゼシ故ニ、名氏ヲ尾張トモ名付ケ、又應安年中ヨリ、代々洛中ノ二條武衞陣ト云所ニ宅地ヲシメ居ケル故ニ、武衞家共稱號シケリ、カ樣ニ足利氏族ノ嫡流御當家代々忠功ノ大名ナレ共、時運衰ヘテ今カク微力シ果ケリ、斯波家ハ角成果テ、有テモ無キガ如クナル、〇下略

〔異本塔寺長帳〕四　十年（永正）癸酉三月、〇中略今川上總守氏親、三月七日、引間城主大河内備中守貞綱ヲ攻、于時斯波治部太輔義達、（貞綱ト同ジ）久綱ニ加勢ス、陷城、同（永正）十一年甲戌、〇中略大河内備中守久綱、亦引間城、天龍川、合戰ノ、弟巨海新左衞門共ニ討死、

〔名古屋合戰記〕後柏原院ノ御宇、駿河ノ屋形今川修理大夫氏親、尾張守護斯波治部大輔義達ト互ニ敵シテ合戰ニ及フ、其頃三河ノ國臥蝶ノ地頭大河内備中守貞綱ト云シハ、元來吉良殿ノ家人也、近年自立シテ威ヲ振ヒ、國中ノ兵士ヲ懷ケテ、駿河領ヲ窺、今川殿兵ヲ以テ討之爲下給ヘリ、大河内尾州ヘ禮ヲアツクシテ、斯波殿ノ援ヲ請ヘリ、義達諾シテ從之、大河内ハ遠江

國引馬ノ城ニ楯テ籠リテ、種々ノ謀略ヲ企ツ、今川殿是ヲ退治セントテ、永正十年ノ三月、一萬餘ノ軍兵ヲ卒シテ、遠州ヘ發向、斯波殿ハ、深嶽ノ城ニ出張シテ、軍評定アリシ、今川殿ノ家臣朝比奈十郎泰以夜ヲ侵テ襲之シカハ、尾張勢敗北シテ、奥山ヘ退キ遁ル、同十一年三月、大河内重子テ引間ヲ取リ返シ、池田入野邊ヲ押領シテ、却テ威强盛ニナリニキ、又斯波殿ノ出馬ヲ請ヒケレハ、義達再進發ナリシ、清須ノ城ニハ、織田大和守敏信ヲ留守トシ給ヘリ、サレトモ織田伊勢守信安、遠州進發ノ事ヲ止シニ、義達許容ナカリシカハ、不和ノ事出來テ、上四郡ノ兵ハ參陣セサリシ故、斯波家ノ軍無勢ナリシ、然レ𪜈大河内ヲ援テ、引間ノ籠城ト聞ヘシ、〇下略

〔美濃國諸家系譜〕大河内家譜

光綱

滿成

貞綱　大河内備中守、三河國同郡臥蝶城主也、

成綱　巨海新左衛門、兄貞綱同時於同所討死、年四十九、

直綱

貞綱　寶德元己巳年、母、始ハ仕當國之守護吉良氏、住臥蝶城、一說ニハ、設樂郡本野領主共云々、勇猛絶倫之人也、貞綱之旗紋ニ丸之内二十六葉之菊を付る、因而人呼ヒ菊一揆と稱しさり、後ニ味方斯波治部大輔義達、永正十年癸酉三月八日、舍弟巨海新左衛門成綱と俱ニ、引卒遠三之軍兵、楯籠遠州敷知郡引間城、屢相戰與今川修理大夫氏親、今川勢强而貞綱兄弟失利、同年八月十九日、終ニ於引間城自害セ、年六十五、

〔豐前中津奥平家譜〕貞昌　同（永正）十一甲戌年、三州幡頭郡長縄ノ城主大河内貞綱、尾張守護斯波義達ニ會シテ、遠州引馬ニ城キ、之レニ據ル、義達兵五千三百餘騎ヲ率ヒテ、御嶽山城ニ據ル、今川氏親兵一萬二千三百騎ヲ率ヒ、朝比奈泰以ヲ以テ先鋒トシ、三月七日、義達ヲ擊ツ、義達防クヿ能ハス、奥山ニ走ル、時ニ貞昌之レニ屬シテ功有リ、氏親、貞昌ヲシテ、御岳山城ヲ守ラシム、氏親遂ニ引馬城ヲ拔ク、

〔今川家譜〕斯テ五七年過テ、尾張ノ武衛義達、遠江ノ深嶽ト云山ニ城ヲ取立、大河内已下ノ浪人ヲ催シ楯籠ル、氏親不日打立テ、笠井庄楞嚴寺ト云處ニ旗ヲ立ラル、先手人數早雲ヲ初、河ヲ越テ、大菩薩ト云山ニ著陣ス、サテ朝

比奈左衞門泰以先手トシテ、一日一夜攻戰、終ニ城ヲ攻落ケレハ、武衞義達ハ、其曉搦手ヨリ奥山ヘ引退、ソレヨリ尾張ノ清須ヘ歸陣ス、永正三年、甲州武田次郎信繩兄弟不和ノ事アリテ、牟楯ニ及フ、加勢合力ノ事再三請ヒケレハ、氏親、葛山、庵原、福嶋等ニ命シテ、千餘人差遣シ、甲斐國勝山ト云處ニ陣ヲ取ル、此時駿州人數スキタリト聞ヘケルニヤ、先年大河内一味ノ浪人等、又武衞ヲ大將ニ招キ楯籠リ、天龍川前後ヲ押領ス、氏親出張シテ、掛川ノ城ニ旗ヲ建ラレ、翌年五月ニ、彼敵城ヲ攻ラル、折節洪水シテ、天龍川海ノ如シ、船橋ヲ懸ラル、竹大綱數百渡シ、軍勢ヲヤスヤスト打渡シ、敵城七メクリ五十餘町ノ内ニ追籠、六月ヨリ八月迄、日々ニ休ム隙ナク攻ラルヽ、城高山ナレハ、安部ヨリ金堀（堀下同ジ）ヲ召シ、城中ノ筒井ノ水皆堀拔ケレハ、敵次第ニ弱リ、大河内、巨海、高橋以下、今度ノ敵ノ張本共不殘討レ、大將ノ武衞殿色々降參ノ望有ケレハ、命計リ助被申、城ヲ追出、普濟寺ト申寺ニ入出家アリ、法名安心ト名付、主從五人尾張ノ地ヘ送被申、氏親數度ノ戰功ニ恐レ、遠三ノ諸士皆ナヒキ從ヒケリ、〇上下略

〔今川家系圖〕氏親童名龍王丸、加冠稱今川五郎、母伊勢新九郎氏長女、敍從四位上、任上總介、修理太夫、永正年間、大

河内貞綱據遠州引間城、尾州清須城主斯波義遠（達）卒五千三百餘騎援之、據深嶽山城（疊カ）疊、氏親令朝比奈泰熙爲先鋒、其勢一萬三千三百餘騎、攻深嶽城、泰熙以奇計、城一時陷、城兵敗走歸尾州、氏親總軍直圍引間城、城無後詰不可悐、潛落走、氏親置城衞歸陣、永正十一年、甲州武田信虎與同次郎及牟楯、乞援兵、以由井、藤枝、岡部等二千五百餘騎援之、此時又大河内、巨海集殘兵、再襲引間城、斯波氏再援之、氏親又卒九千餘騎、圍引間、岡部、原等、越塀大破之、大河内主從千二百餘騎討死、斯波氏入普濟寺請和、氏親許容、還斯波尾張、

〇貞綱、義達ト共ニ兵ヲ率ヰ、遠江ニ放火スルニ依リ、氏親ノ將朝比奈泰熙、擊チテ之ヲ破ルコト、九年閏四月二日ノ條ニ、貞綱、敗死シ、義達、降ヲ乞フコト、十四年八月十九日ノ條ニ見ユ、異本塔寺長帳等、永正十一年ニモ亦合戰アリシコトヲ記スト雖モ、詳ナラザルニ依リ、便宜本條ニ其記事ヲ收載ス、

〔參考〕

〔系圖纂要〕清和十斯波義達（日野富子）妙善院殿猶子、母一色修理大夫義直女、後名義敦左兵衞佐、從四下、治部大輔、永正十年、大河内一味、於會下寺出家、下向尾州、大永元年卒、永正十年三月是月

引間城

〔曳駒拾遺〕三　古城

此城ハ、本引馬の城といふ、其築れし初ハ定りからず、或記ス、久野佐渡守末の子、越中守家老、永正の頃、三善爲連といふ人、城ヲ取立々る由見へさり、又或記ス、永正の頃、三河國臥蝶の城主大河内備中守貞綱、曳馬城を築、斯波武衛の加勢して、駿河の今川をこなむ、依て上總介氏親、永正十年酉三月、駿河の府中を立て、貞綱を責る由見へさり、又河内兵庫頭といふ人築さる由もみゆ、されとも、定めりさし、

〔遠江風土記傳〕二　敷智郡　引馬古城、引馬拾遺曰、引馬城、在元濱松中玄默、所築不詳、其先永正年間、三善爲連以久野佐渡守之家造城、又曰、永正年中、三河國臥蝶城主大河内備中守貞綱築引馬城而斯波武衛、郡大張國守護、治部大輔義達、加勢畔于今川、元、永正十一年酉三月、今川氏親發駿河國府、攻貞綱、三國志曰、永正十年三月、貞綱、今川氏親、朝本戰、

三嶽城

〔遠江風土記傳〕引佐郡　三嶽古城、按三國志、尾張守護職斯波治部太輔義達、楯籠遠江國三嶽山城、永正十一年三月七日、今川氏親之先陳朝比奈十郎泰以攻之、城兵塵畑新太郎討死矣、城中敗而義達奔奥山云々、蓋非城郭、應大敘社、

〔遠江風土記傳〕九　周智郡　久野郷　熙庵（山下）曰、永正十年、三國志見十年三月七日、大河内備中守貞綱、濱松城逆亂、今川氏親討之、久野佐渡守宗隆屬今川氏親、肥後守護菊池武經、國人ニ忌マレテ、筑後矢部ニ還リ、弟阿蘇大宮司惟豐ヲ攻ム、惟豐、日向鞍岡ニ走ル、尋デ、武經、名ヲ惟長ニ復シ、子惟前ヲシテ、大宮司職ヲ襲ガシム、

惟豐相良氏ニ頼ル

〔相良家文書〕一　沙彌洞然相良長國長狀寫

○上略

一政隆（新德）様一節二見御逗留候而、八代御光儀候、如筑州御渡海以後、於國中滅亡候、次萬休齋、同惟前、川田一兩年御座候キ、其後當阿蘇惟豐（菊應武經）被退矢部、此方御憑、與風御出候歟、鏡福善寺御滯留候、何爲當方以調法歸鞍候キ、此等之次第者、程近事候之間、子細不及申候、○中略

天文五年十一月廿二日　修理入道沙彌洞然

稼所新兵衛尉殿

阿蘇祭主大藏丞ノ戰功ヲ賞ス

〔阿蘇文書〕二

就今度弓箭、辛勞忠節之至、令悅喜候、然者下矢部之内、金打八貫之中二貫之事、當（充）行處、可有領知、益々可被抽忠儀者也、仍狀如件、

永正十年癸酉卯月廿一日　惟豐（阿蘇）（花押）

祭主大藏丞殿

惟豐(花押)

今度干戈時分、瀨田安藝守抽忠貞候之處、死去候、無是非候、然者依無子孫、祭主源三郎內緣之條、相續之通申候、甲佐之內上たふ崎之村、幷小熊野之內、谷口村領地、不可有相違候、彌忠節連續可爲肝心候、仍爲後日之狀如件、

永正十年癸酉六月十日

祭主源三良殿

瀨田安藝守ノ戰功ヲ賞ス

惟長ノ履歷

〔阿蘇家譜〕六

惟憲

惟長

惟豐(惟憲之第二子、惟長之弟、)

惟前

惟長　惟憲長子、文明十二年生、(故老日記)職ヲ襲キ、從四位下ニ敍ス、(幷ニ年月ヲ詳ニセス、)永正二年秋、菊池宗族巨臣、其主政朝ヲ廢シ、惟長ヲ立テ嗣トセント請フ、惟憲之ヲ許ス、十二月、菊池氏臣八十餘人誓書ヲ以テ之ヲ迎フ、是ニ於テ、惟長職ヲ弟惟豐ニ讓リ、隈府ニ入リ、菊池氏ヲ繼キ、肥後守護トナリ、名ヲ武經ト改ム、(○菊池政朝ノ部下、政朝ヲ逐ヒ、阿蘇惟長ヲ迎フルコト、二年十二月是月ノ條ニ見ユ、)既而之ヲ悔ユ、(當時城、赤星、木野、隈部等、皆强大ニシテ、其本宗菊池氏ノ所領ハ、却テ我半ニ不及ト云フ、)擧止正シカラス、國人皆之ヲ惡ム、武經難ヲ懼レテ、矢部ニ遁レ還リ、却テ惟豐ノ職ヲ奪ハントスル、終ニ薩摩ニ奔、十年三月十一日、兵ヲ嶋津氏ニ請ヒ、又自ラ滿家院、伊集院二庄ノ兵ヲ率ヒ來テ、(二庄、南朝ノ時我家ノ舊領、)惟豐ヲ攻ム、惟豐拒クヿ能ハス、日向ノ鞍岡ニ奔ル、武經矢部城ヲ奪ヒ、子惟前ヲシテ職ヲ奪ハシメ、又自名ヲ惟長ニ復シ、万休齋ト號ス、(此役、故老日記九年トス、然モ異本系譜、坂梨惟延遂玄筆記及拾集昔語、蘗所錄、皆十年トス、今多ニ從フ、)

惟豐　明應二年生、永正二年ノ冬、惟長ノ讓ヲ受テ大宮司タリ、十年三月、惟長、惟豐ヲ攻ム、惟豐鞍岡ニ避ク、(○下略)

惟前　永正十年、父惟長ト共ニ、叔父惟豐ヲ襲フテ本宗ヲ簒ヒ、十四年、復薩摩ニ奔リ、大永三年、復堅志田ニ來リ、惟豐ト兩立、勢ヲ爭フ、(○下略)

萬休齋ト號ス

〔參考〕

○武經、惟豐ヲ攻メ、子惟前ヲシテ、阿蘇大宮司職ヲ襲ガシムル日、詳ナラズ、今姑ク阿蘇家譜ニ據リテ、是月ニ係ク、

〔菊池傳記〕三　菊池武經滅亡事

かくて武經菊池家を相續して後、逆暴乃振回あるゐゆへ、國人とも憤り、多勢
沒もつて、(隅)府の城を追落せ、程なく武經病死せ、其子惟前といふ者、阿蘇大
宮司を滅し、神領を奪むと思ひ、永正十年三月十一日、益城郡堅志田城ゑ押
よせ、惟豐と合戰せ、惟豐討負て、日向國鞍岡山ゑ立退く、惟前大宮司ゐ所領
をうゑひて威を震ひ、鞍岡山によせて攻戰ふに、惟豐小勢なるか故に、度々
の軍に利をうしなひ、いかにもして惟前を滅し、阿蘇に還住せしめんと、旦
夕憤り思ふ處に、日向國高知保に甲斐大和守親宣、同民部太輔親直といふ
者あり、是は菊池の庶流甲斐肥後守重村か末葉なり、重村、菊池武重と爭戰
に及ひしより後は、代々日向國に蟄居せり、父子ともに武勇他に超たる聞
えある故に、惟豐、甲斐父子をたのみ、勢を催し、阿曾益城の城主等と牒し合
せ、大軍を催し、堅志田の城をせめ落す、惟前及其子惟堅城を出て、薩摩國に
落行ける、

武經病死シ子惟前惟豐ヲ攻ムトノ說

惟豐甲斐親宣父子ニ賴ル

〔求麻外史〕享(相良長毎)蓮心公第十四

十年(永正)、月日闕、菊池惟前、攻阿蘇惟豐於堅志田、惟豐
來奔、匿于八代福善寺、居亡何、公使之復歸、

惟豐肥後八代ニ匿ル

〔新撰事蹟通考〕十年考徵八

十年(永正)癸酉春三月十一日庚辰、武經及子惟前、
率薩摩國滿家院等兵、來襲矢部館、大宮司惟豐退日向國鞍岡、武經奪領知、以
惟前爲神職、惟前自稱大宮司、(傳記系譜坂梨惟延筆記、傳記矢部作堅志田非也、年月據傳記、)武經改舊名惟
長、稱阿蘇萬休齋、(長狹系譜、)

惟前自ラ大宮司ト稱ス

〔肥後國志略〕十六益城郡上

一御船町(甘木庄)村六百九石餘、里俗御船町ト云、府(熊本)ヨリ
四里、上町下町アリ、北ノ搆際迄三町七間アリ、
御船ノ城跡　初ハ御船阿波守行房(或記房行)、在城ス、(此說不審、御船ノ城、初ハ牛瀨ノ城ニテ、宗運在城有之ノ時、御船ニ改築クト云ヘハ、行房ハ平瀨在城ナルヘシ、)後ニ甲斐大和守親宣(初名親直、)、其子民部大輔惟親、
入道宗運、其子相模守親秀入道宗立、(九州治亂記ニハ、三河守鎭隆トアリ、)相續テ在城ス、親宣
ハ日州高智穗ノ郷士也、或記、甲斐氏ハ元ト菊池家ヨリ出タリ、菊池十代肥
後守武房三男甲斐六郎武本、故有テ、甲斐ノ國ニ移住ス、爾來氏ヲ甲斐ト改
ム、武本四代ノ孫民部大輔重村、足利氏ニ屬ノ、肥後國還入ノ御教書ヲ賜リ、
住(任カ)肥後守、甲斐國ヲ出テ、先ツ豐後ノ國ニ到リ、大友家ノ加勢ヲ受得テ、肥後
國ニ討入ル、建武五年九月、菊池武重合志郡鞍嶽ノ崑(麓)ニ出迎ヘテ合戰ヒ、重
村敗北ノ、又豐後ニ到リ、其後日州ニ移居テ、土持榮綱ニ從フ、(或說、武本六代孫甲斐重村、隈)

御船城

庄在城ト アリ、此重村同門、重村カ末葉甲斐親宣云云、日州高智穂ニ住居ス、永正十年ノ比、大宮司惟豐ト、同姓是(惟カ)前及合戰、此時惟豐ノ招ニ依テ、親宣屬從シ、且阿蘇ノ舊臣等ト相議シ、一說、此時大宮司嫡子千壽王丸、十四歳、初陣ト云リ、日州ヲ出テ、終ニ惟前ヲ追却シ、惟豐再ヒ舊職ニ復ス、惟豐、親宣カ勞ヲ感賞シテ、四百五十町ノ領地ヲ與ヘ、日州境南鄕岩神ノ城ニ居ラシム、〇下略

四月大盡　己亥朔

二日、庚子、越前朝倉教景、同國西福寺ヲシテ、同寺領島鄕ノ地ヲ安堵セシム、

〔西福寺文書〕一〇越前

西福寺領嶋鄕內壹町壹段寶壽庵寄進、七段阿佛寄進、幷六反大勝阿彌寄進之事、孫大夫、源三郎爲豐嶋分、石黑分之由申條、雖令糺明、天澤(朝倉貞景)任一行之旨、如先々寺務不可有相違狀如件、

永正拾四月二日　教景(朝倉)(花押)

西福寺

能登守護畠山義元ノ部將神保元康、同國高勝寺ニ諸役ヲ免除ス、

〔須々神社文書〕〇能登

三崎高勝寺之事

一依爲御祈願所、御屋形(畠山義元)樣之有御判上者、如先規諸役皆免之儀、有其紛間敷候也、

一高座御山之事、任往古例、可爲寺家一圓進退事、有相違間敷者也、

一寶珠院田地幷居屋職(敷カ)之事、爲先判上者、相違有間敷候、爲祈願松本坊ゟ奉

高座山ハ寺家ノ進止松本坊

永正十年四月二日

寄進候者也、仍狀如件、

永正拾年癸酉四月二日　神保與一

高勝寺　元康（花押）

六日、甲辰、細川高國、東寺ノ緣起ヲ聽カント欲シ、其旨ヲ同寺ニ告ゲシム、

〔東寺百合文書〕（縣紙）ゑ　○山城　二十三下之二十九上

（端裏書）「永正十癸酉卯六」　玉洞軒

年預御坊御同宿中　等眼

御寺御緣起之事、連々右京（細川高國）兆聽聞申度由、吉祥院ニ被申入候、然者明後日八日、早々可奉待由候、宜得御意候、恐惶敬白、

卯月六日　等眼（花押）

年預御坊御同宿中

吉祥院

七日、乙巳、伯耆山名敎之、同國定光寺ニ、上神郷ノ內堤分ノ地ヲ寄進ス、

〔定光寺文書〕　○伯耆

萬雜公事ヲ除ク

定光寺寄進狀

右爲厦成源棟、伯耆國久米郡上神郷之內堤分、除万雜公事、永代令寄進畢、然間、於彼在所、子孫中若有違亂之輩者、永可爲不孝之仁者也、仍末代所定置之狀如件、

永正十年癸酉四月廿七日　敎之（山名カ）（花押）

八日、丙午、大神宮ヲシテ、義尹ノ歸京ヲ祈ラシメラル、

〔內宮引付〕　守晨上

一大樹御歸洛御祈事、一七ヶ日、殊可抽丹誠之由、可令下知神宮之旨、被仰下候、仍執達如件、

四月八日　右中將公兄（正親町三條）

祭主三位殿（藤波伊忠）

之由、御敎書如此、仍案文下之、以此旨、可令告知二宮之狀如件、

四月十日　神祇大副判

永正十年四月八日

——伊忠（勝悦）

——并祭主下知如此、仍獻覽之、可令存知給候、恐々謹言、

四月十九日　大宮司判

謹上　内宮長殿　——廣長

如此雖被仰出、今度者御請不被申、○内宮禰宜荒木田守晨引付異事ナシ、

○義尹、大内義興、細川高國ノ專恣ヲ怒リ、近江ニ出奔スルコト、三月十七日ノ條ニ、歸京スルコト、五月三日ノ條ニ見ユ、

十二日、庚戌、山城頂妙寺住持權僧正日祝寂ス、

〔聞法山歴譜幷緣由傳記〕當山開祖、爲妙國院日祝聖人、聖人下總國千葉郡之產、俗姓千葉氏、師事于同國正中山法華經寺第六世日薩聖人、慷慨有大志、夙起弘通花洛之誓、學成而來于帝都、時文明五年癸巳、師年四十七、營一草庵、日夜說法、聽衆群集、圍繞渴仰、而改宗受法者以萬數、後土御門帝綸旨任三位權大僧都、長享二年戊申三月十日轉任權僧正、上卿源大納言、時土佐國守護細川治部少輔勝益、涖于其講法之席、得妙經之奧義、改宗受法爲大檀那、卜地上錦小路、下四條、東富小路、西萬里小路、築一精舍、請師爲開祖、自以其法諱頂妙寺殿常院大居士名之、稱頂妙寺、時明應四年乙卯也、○勝益、頂妙寺ヲ建テ、地ヲ寄スルコト、明應四年十一月二十一日ノ條ニ見ユ、而勝益仕于足利十一代將軍義高公、執政柄、勝益之子高國、高國之子氏綱、同歸于師、社稷護菊、國家祝釐、無不一賴師、而將軍義高公亦歸于師、因爲祈願所、是以寺門大賑、爲一箇之本山焉、文龜元年辛酉春、師到于土佐國、則勝益又築妙國、細勝之二精舍、山號皆稱天高山、請師爲開祖、而其妙國寺隸當山、細勝寺隸妙國寺也、永正六年己巳、依將軍義稙公之教命、轉移當山于新町通上長者町、堂宇造營、賴高國得復舊矣、十年癸酉四月、及入寂之際、囑于法徒日言、爲第二祖焉、

〔本化別頭佛祖統紀〕十九　京兆頂妙寺開山日祝上人傳

師諱日祝、號妙國院、俗姓平千葉氏、應永三十四年丁未、產總之千葉郡、小字千鶴麻呂、九歲入于中山第六代日薩室、圓頂方袍、天資卓絕、爽邁不群、薩上喜之、加意教育、學業蚤成、山中振名焉、文明五年癸巳、師年四十七、帝都弘通、德化所及、戶外履滿、車轍塞塗、時有細川氏治部少輔勝益者、道契尤厚、洛中相地、築一

和泉頂源寺ヲ創ム

精舍、請師爲開山祖師、榜呼頂妙寺、勝益仕于義高將軍、執政務柄、將軍賜高之一字、呼高益、義高將軍後更義澄、高益之子高國、高國之子氏綱、同歸于師、社稷攘菑、國家祝釐、無不一賴師、是以寺門大賑、寺隸中山、不忘本也、於後築隱於泉之沙界（堺）、後爲寺、今之永松山頂源寺是也、上足之徒有日言、日沾、沾者克頂源寺、言者紹頂妙寺、永正十年癸酉、師八十六歲、四月十二日、無疾而化矣、陵谷不常、洛中屢變、惟頂妙寺觀不改舊者、師之遺風餘烈乎哉、

土佐桂昌寺ヲ創ム

〔雜記抄錄〕（細川系圖○土佐）　權大僧都法印妙國院日祝聖人者、下總國之產、姓千葉氏、同國正中山法華經寺第六祖日薩聖人之弟子也、爾日祝二十三歲、寶德（文明）元己巳（五癸巳）上洛、草庵結、日夜說法砌、細川勝益公法席列、則改宗受法、頂妙寺創建云々、文龜元年、於當國桂昌寺建立給、兩寺開山日祝聖人云々、延德三年五月九日、清岩三十三回忌、日祝題目一部（仁）短冊一枚送給歌、夢（乃）世（仁）三十三年遠廻留迄在（天）跡訪我（曾）嬉（志）支、永正十年四月十二日寂云々、

頂妙寺ヲ弟子日言ニ讓ル

〔頂妙寺文書〕（○山城）　頂妙寺日祝付弟事

大乘坊日言授與之、

桂昌寺ノ寺法ヲ定ム

右諸末寺等可爲進退候也、仍讓狀如件、

永正十年癸酉卯月二日　日祝（花押）

定條々事

一御堂出仕已下、可爲年老（腐カ）次第、但於弘通者、三老可爲上事、

一著布法服御堂出仕不可叶事、

一三時勤行、除病罹（并）他行、不可有懈怠事、

一諸宗歸伏人（并）新發意已下、桂昌寺閣住持、私（仁）出家受戒不可在之事、

一桂昌寺掃塵、每月三度不可有如在事、

一僧俗之間、於謗法振舞人、桂昌寺之住持（并）衆分遂談合、加敎訓、可致改悔事、

右此題目於異（違）背輩者、以住持京都可有注進、仍爲後日成敗（所定）旨如件、

明應八年己未六月　日　日祝（花押）

著書當門重寶記

〔當門重寶記〕（奥書）

永正元年甲子五月中旬比記之竟、

法印日祝七十八才、

永正十年四月十二日

○日祝ヲ權僧正ニ任ズルコト、長享二年三月十日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕釋家之部　日祝

○頂妙寺文書（山城）

明應八年六月日桂昌寺掟書

○頂妙寺文書（山城）

永正十年卯月二日讓狀

大內義興、細川高國等、義尹ニ誓書ヲ進メ、命ニ背カザランコトヲ誓フ、

〔和長卿記〕ニ　四月十二日、以一色兵部大輔（弁憲）、畠山式部少輔（順光）二人爲使節、令參甲賀云々、子細者、右京大夫（細川高國）、左京大夫（畠山義元）（失脫カ）、修理大夫（畠山尾張入道、同等卿（以カ）起請文、（大內義興）（尚順）（マヽ）

永正十年四月十二日

諸事不可背御成敗之由申入云々、

○義尹、義興、高國ノ專恣ヲ怒リ、近江ニ出奔スルコト、三月十七日ノ條ニ、近江ヨリ歸京スルコト、五月三日ノ條ニ見ユ、

因幡山名豐賴、北河與三左衞門尉ノ天馬口ニ於ケル戰功ヲ褒ス、

〔因幡志〕三十七

去月廿九日、於天馬口合戰之時、突鑓討捕今村與四郎、剩被疵二ヶ所蒙之由、尤神妙也、彌可勵軍忠之狀如件、

永正十四月十二日　（花押）

北河與三左衞門尉殿

天馬口合戰

近衞尚通等見舞ノ使者ヲ下ス

○天馬口合戰ノコト、詳ナラズ、

十四日、壬子義尹、近江甲賀ニ疾ム、仍リテ、大神宮ヲシテ、平癒ヲ祈ラシメラル、幕府モ亦、大神宮及ビ東寺ヲシテ、之ヲ祈ラシム、

〔後法成寺尚通公記〕七　四月十七日、乙卯夜來雨下、從卯刻晴、畠山式部少輔許ヘ、大樹御虫氣之由、無心元由、以書狀申下之、使左京亮、從德大寺彌五郎被下、令同道、昨日入夜、左京亮、御所ヘ祗候、則式部少輔致披露、御祝著之由、有御返事、伯、中將祗候之間、彼方ヘも申遣、逢使者、祝著之由申之、

廿一日、己未晴、昨曉大樹御歡樂大事由有風風聞、言語道斷、驚存者也、

廿六日、甲子晴陰、時々小雨洒、千秋刑部少輔來、大樹彌被得御驗之由、從光稱院有御言傳、令對面、種々令雜談、

〔和長卿記〕二　四月十六日、晴陰、小雨相交、禁中有和漢御會、各參入、漸欲相始之時分、○和漢聯句御會ノコト、正月二十五日ノ條ニ收ム、自江州有注進、廣橋（守光）被官人速水言上、武家自去十四日晚頭申刻許、御發病、以外也、或中毒、或中氣等說々也、先御絕入、已後至十五日、言語一向不通云々、此已後所々注進、諸家又馳走、

中毒或ハ中氣トノ說ヲ言語通ゼズ

十七日、依飛脚、聖知院被參、宮內卿法眼先江州之間□□此後祐遊（マヽ）葉被參云々、

□□病事御再發、以外也、既事切之由有風聞、給人□爲返言語、祐葉（マヽ）致御灸云々、依之御發□氣云々、但追々有注進、御息災云々、

再發

〔嚴助往年記〕上　三月十八日、○中略、義尹、近江ヘ出奔スルコトニカヽル、三月十七日ノ條ニ收ム、於甲賀以外歡樂、驕而御本服、

〔內宮引付〕守晨上

永正十年四月十四日

一七箇日ノ祈

大樹御不例御祈事、自明日一七ヶ日、殊可抽丹誠之由、可令下知神宮之旨、被仰下候、仍執達如件、

四月廿二日　　右中將公兄（正親町三條）

祭主三位（藤波伊忠）殿

一禰宜參籠祈禱ヲ始ムル

就大樹御不例御祈事、御敎書如此、仍下案文之、一七ヶ日殊可抽懇祈之旨、可被告知二宮之狀如件、

四月廿三日　　祭主三位　判

大司宿館

宮司告狀四月廿八日

就公方樣御不例之儀、頭人闔閤書狀之趣、御下文之旨、具承候、先以一禰宜令參籠、奉始御祈禱候、每日於宮中可抽丹誠忠勤候、御祓之事者、可奉納于神前候、天照太神御納受之儀者、御立願之信心肝要之由、可被經次第御沙汰候、守則誠恐謹言、

卯月卅日　　一禰宜荒木田判

進上　祭主三位殿　　守則

此時先御祈禱御請ヲ申、御祓等可致進上之由、頭人闔閤ヨリ惣官へ書狀アリ、同惣官之下文ニ相副之、神宮ニ到來、其後子細ヲ承分之處ニ、彼千貫之義者、頭人闔閤私之儀云々、（内宮禰宜荒木田守晨引付異事ナシ、）

〔東寺百合文書〕（二十六之五十六）○山城

東寺ノ祈禱

就御不例御祈禱事被仰出候、廿三日開白之日取候、廿九日可爲結願候、御卷數給候て、可致進上候、此分年預御房へ可被申候、恐々謹言、

永正十　卯月廿一日　　英致（松田）（花押）

東寺雜掌

〔東寺百合文書〕（永正十）（縣紙）○山城（ゑ一之十）

病驗著シ

東寺年預御房（御返報）　　松田對馬守　英致」

御祈禱卷數三合下給候、則可致披露候、御懇祈珍重候、彌御大驗候、可御心安

永正十年四月十四日

五月一日歸京ノ治定

候、御京著來月一日治定候、三日可爲御京著候、〇義尹、京都ニ歸ルコト、五月三日ノ條ニ見ユ、於京都可被申候、恐々謹言、

卯月廿九日　英致（花押）

東寺年預御房　御返報

十七日、乙卯、足利政氏、智宗ノ相模三崎ニ於ケル戰功ヲ褒ス、

〔相州文書〕六　鎌倉郡六江ノ島岩本院所藏

政氏感狀　僧智宗

敵指詰之時、於三崎要害勵戰功、被疵之條、神妙也、彌可抽粉骨之狀如件、

永正十年四月十七日　（足利政氏）（花押）

智宗僧

○三崎合戰ノコト、詳ナラズ、

十九日、丁巳、賀茂社奏事始、

〔京都御所東山御文庫記錄〕引　〇山城二十三番一ノ七十九

（永正）同十年四月十九日、今日奏事始申之、書目六、

永正十年四月十九日　（甘露寺）元長奏

甘露寺元長奏事始ノ日錄ヲ書ス

鴨社東御方神事無爲事、

同社造營事、〇假殿造替ノコト、六月十七日ノ條ニ見ユ、

同奉行可被加增歟否事、

同社祝從四位下伊忠縣主申從四位上事、

別雷社神事無爲事、

著直衣參內、懷中奏事目錄、於議定所候圓座、披之讀之、併如例造營奉行可被加祐春歟之由申入、被聞食仰也、一々蒙御氣色、卷目六懷中退出、頂戴天盃、退出、〇元長卿記同ジ、

二十日、戊午、東大寺法華會、

〔興福寺略年代記〕永正十年四月廿日、東大寺法華會執行、

〔東大寺法華會注記方記〕永正注記　永正十年癸酉卯月日　光乘

一當會講師之事、東大寺二度沙汰之後、興福寺之躰、講師之事沙汰之、巡次第如此云々、講師ニ從東大寺會料被進云々、會料六貫文、御布施米四石、時之和市以代物被進之時事也、

亭饗料一斗、其外堅者之悉棒曳被進之云々、今度及其沙汰之間、存知分引

講師沙汰ノ次第

會料布施米

亭饗料

付之、猶尋屆可記置事也、

講師ハ興福寺勤仕ノ番

一今度講師之事、興福寺懃仕之番也、東大寺二度、興福寺一度、此定押廻云々、有其沙汰云々、

會式

一會式之事可有始行候、如前々可令申沙汰之由、自東大寺寺務執之、出世後見執之而申給畢、

寺務光通

一東大寺々務(光通)東室殿也、出世後見舜賢房得業延阿、

聽衆

一丁衆(聽下同ジ)專寺、興福寺、藥師寺、法隆寺以下丁衆、從出世後見取調之給之者也、同年戒等被注出之、則僧名出來了、

堅者

一堅者事、當年七口也、則被注出了、

聽衆以下ノ宿坊

一堅者方問題之事、問答書以被注之、可有注進之由申遣畢、

一丁衆以下宿坊之事、僧名一紙書認之、書調而可給之由、今度申付之間、則注進也、興福寺丁衆分宿坊事者、於此方可取之、以此注文初結出仕催促、無其煩者也、

東大寺聽衆年戒

折紙

東大寺聽衆年戒

探題大夫法印權大僧都秀海

講師訓英

講師西南院權律師圓深、西南院辭退之間、長敎房法印、權大僧都訓英懃仕之、

條々子細委奥ニ記之、

讀師

唄師

散華師

散華師順盛法師

會始

康慶 大進權律師、年六十五、戒五十一、

精義

長敎 興春房擬講、年五十八、戒四十五、

英順 大夫擬得業、年五十二、戒三十九、

延海 舜賢房、年五十四、戒三十九、

倉賢 宗舜房、年四十九、戒卅七、

春藝 卿擬得業、年四十二、戒廿八、

快惠 祐禪房、年四十、戒二十五、

會始

延理 宮內卿權律師、年六十一、戒四十七、

精義

英海 少將擬講、年五十六、戒四十三、

信祐 專順房擬得業、年五十、戒三十九、

英憲 禪榮房擬得業、年五十、戒三十九、(八十)

盛重 俊善房、年四十三、戒二十九、

公意 觀順房、年四十二、戒二十七、

興福寺聽衆年戒

已上東大寺

興福寺聽衆年戒

快乘(問海ノ)實禪房擬講、年六十、戒四十三、

賴藝 延信房五師、年五十九、戒四十五、

興清 顯乘擬得業、年五十九、戒四十四、　信清 實光房〃〃、年五十九、戒四十三、
胤乘 勤禪房〃〃〃、年五十五、戒四十、　慶秀 圓願房〃〃、年五十五、戒四十、
懷春 覺順房〃〃〃、年五十三、戒三十六、　清宣 民部卿〃〃、年五十一、戒三十六、

已上興福寺

藥師寺聽衆 藥師寺聽衆年戒

薬師寺聽衆

長懷 慣了擬得業、年五十五、戒卅九、　懷禪 宗順房〃〃、年四十、戒二十五、

已上藥師寺

法隆寺聽衆 法隆寺聽衆年戒

法隆寺丁衆

長弘 覺賢房擬得業、年五十三、戒三十八、

以上法隆寺

床ノ次第 一床

折帋

東大寺法華會床之次第

一床 南上首、

探題大夫法印權大僧都秀海
會始大進權律師康慶
會始宮內卿權律師延理

二床

長徹擬講　賴藝擬得業
快乘擬講　興清擬得業
英海擬講　信清擬得業
胤乘〃〃〃　慶秀〃〃〃
威儀師

三床 南上首、

維那　注記
英順擬得業　信祐〃〃〃
延海〃〃〃　長懷〃〃〃
英憲〃〃〃　倩賢〃〃〃

四床

四床 北上首、

散華師　長弘擬得業
盛重〃〃〃　懷春〃〃〃
清宣擬得業　春藝〃〃〃

公意〻〻〻　快惠〻〻〻
懐歟快禪〻〻〻

已上

竪者竪問役事（シイ）

竪者竪問役　初夜

初夜竪者淨憲（了専房、三藏院内、）

精義快乘擬講

一問賴藝擬得業　二問信祐擬得業
三〻盛重〻〻〻　四〻胤乘〻〻〻
五〻脩賢〻〻〻

第二日

第二日竪者英嚴（少納言禪花坊、）

精義英海擬講

一問興清擬得業　二問延海擬得業
三〻春藝〻〻〻　四問慶秀〻〻〻
五問清宣擬得業

第二日夕座竪者英訓（密乘坊内、）

精義快乘五師（興福寺、（シイ））

第三日朝座

一問信清擬得業　二問英憲〻〻〻
三問公意〻〻〻　四〻英順〻〻〻
五〻盛重〻〻〻

第三日朝座竪者澄藝（中將公、如意輪院内、）

精義長徹擬講

一問胤乘擬得業　二〻長弘擬得業
三〻快惠〻〻〻　四〻長懷〻〻〻
五〻公意〻〻〻

同夕座

第三日夕座竪者實憲（了順坊、（シイ）、德藏坊、（シイ））

精義英海擬講

第四日朝座

一問慶秀擬得業　二問脩賢〻〻〻
三〻懷禪〻〻〻　四〻延海〻〻〻
五問春藝擬得業

第四日朝座竪者宗助（長教房、三藏院、）

精義長徹擬講

一問長懐擬得業　二問懐春擬得業
三〻英憲〻〻〻　四〻長弘〻〻〻
五〻懐禪〻〻〻

同夕座

第四日夕座竪者賴賢式部卿公、

精義英海擬講

一問英順擬得業　二〻清宣〻〻〻
三〻信祐〻〻〻　四〻懐春〻〻〻
五〻快惠〻〻〻

竪者義名

一會始之事、兩人之間可爲隔度云々、
一竪者義名事、義者宗之名也、義名云々、義名ト云者、宗之名事也、
問題ニ三論衆ト宗モ、華嚴宗トモ、依論義不可有劬勞者也、
一三論宗ナラハ、
聲聞賢聖之義一章、疏四種相違義書之、
一華嚴宗者ナラハ、

會問役

斷惑義一章、四種相違義書之、問題端書如此在之、宗之事以是可覺悟者也、
一會問役事、東大寺講師之時者、興福寺丁衆懃仕之、興福寺講師之時者、東大寺丁衆之內問役懃仕之、藥師寺、法隆寺者いつも懃之、
一興福寺講師御渡之時、副問者在之、副問者事、朝座副問者一人、
一會問役之事、內々其體治定候者、其人體ゑ於西戸之際、會問役之由申之、每日朝座者於馬道差之、

四床聽衆

一四床丁衆九口也、分花衆八人定例也、自未八人、加散花師而九口也、
一分花行道之時、三床丁衆借事、如維摩會、四床丁衆無人數之時、令借之條勿論也、
今度三床借渡丁衆畢、其時詞云、分花行道之時、三床借渡丁衆畢、其時詞云、分花行道之由催之者也、

一床聽衆竪者請定

一一床丁衆幷竪者請定事、爲寺務雖被治定候、令注進京都御室、惣在廳取繼之、
以御室之儀、自京都被下請書者也、

初日集會ノ鐘

一初日集會鐘事、如舊記者、大佛之大鐘也、興福寺丁衆令遲參者、爲驚覺云々、
近來者令搥堂內云々、日暮者、急以鎰取可下知堂童子、立馬道者、上鐘可催出丁衆者也、其使鎰取也、

樂所及ビ立明ノ奉行

一竪者可立在所事、舊記西近廊ニ立之由在之、淳乘注記之時者、如維摩會立後之近廊云々、泰緣、嚴乘注記之時、被立後之近廊者也、先年源乘注記之時、立後近廊畢、於于今者未來可爲此儀者也、

一會始三度案内不申之、以鎰取催出者也、

一樂所幷立明等者、年預五師奉行也、無沙汰之時者、就年預五師可加問答事也、源乘注記之時及度々畢、不及違亂樣能々可被加下知旨當日早々以狀申送之、此段故實也、

一堂莊嚴事、立馬道者、急行向直可檢知事、

一行事少綱幷侍等ニ、所役之次第直可申含事、

一綱所幷當寺之丁衆ニ、以鎰取、及晩者急可罷立候、早々宿坊ニ可被移之由申遣云々、爲故實、宿坊付申遣之時、早々東大寺ニ可被移由申上之事也、

一烈之時開堂戸刻、烈之亂聲烈之鐘可搥之由下知畢、亂聲者樂所、烈之鐘堂童子、以鎰取急可加下知事、注記向東西成烈之由相觸上者、別而烈之鐘不可搥之由、嚴乘者被記置了、雖然源乘注記之時者、近來大都烈之鐘被搥之上者、今度加下知令搥之者也、

職掌役人

大行道

一會堂之戸、正面四間五間開之條連綿也、同後戸影向戸坤戸開之、

一樂所、執蓋、執香、亂聲、幷講師、登樂、下樂、舞等事、臨期不及違亂樣爲故實、源乘注記之時者、申合年預五師條、無其煩云々、今度自兼日申合者也、

一職掌役人事、伶人之内三人、大行道之時者、自西戸入了、行香之時者、自正面入堂内畢、

一行香之時、少綱自東可進正面、令遲々者、注記行向後戸、可加下知事、

一初結講師登樂同下樂在之、令遲々者、以鎰取可令催促事、

一硯筆者、自寺務被出之云々、硯之箱同筆、二管墨、一廷、小刀一、在之、會式已後注記取之、

一堂内敷設等事、敷儀注記不令存知事、

一大行道事、四床之丁衆者、散花師ヲ寂前トシテ、四床ヨリ南ヘ經テ、自佛前又立還、經一床之前、後戸ヨリ西ニ東上首ニ立烈テ通上首者也、一床僧綱令下床而、通行一床之北時、散花師一人者寂前ニ廻佛後、付其跡テ、一床之丁衆廻佛後者也、二床之丁衆者、二三床之間ヲ北ヘ經テ、一床之丁衆之跡ニ付テ廻佛後ヲ者也、三床之丁衆者、三四床之間ヲ南ヘ經テ、又二三床之間

ヲ北ヘ經テ、二床之丁衆跡ニ付テ廻佛後者也、四床之丁衆者、三床之丁衆之跡ニ付テ廻佛後者也、散花師一人立留佛前、惣丁衆差(ナシイ)座之後、令三禮、向西退歸、

集會ノ鐘

一職掌三人也、此内一人者、一床之丁衆無下床以前、急花籠曳之、今二人之内一人者、高座之西方之柱邊ニ立テ、四床之(ナシイ)丁衆ニ曳之、今一人ハ一床之北端之西浦ニ立テ、二三床之丁衆(ニイ)曳之、維摩會之時者、職掌三人之内一人者有官也、一床之(ナシイ)分有官役也(云イ)、

一諸僧催促之時、出仕之躰、不參之仁、能々可有覺悟之事(ナシイ)也、初結(著イ)ハ皆參也、何方不參候哉、密々ニ直東西丁衆ニ付、才覺可催促事、

一集會鐘事、初日朝座者、注記下知之、從(自初日イ)夕座至第四日夕座、自講師下知之、結日者、亭(アハラ)屋寂然者奉行之、所司可爲下知、源乘注記之時、無沙汰之間、申送亭屋之、爲亭下知、今度又結日鐘事(ノイ)、亭屋下知也、亭屋寂之所司也奉行

一會ヲ重之時、講師ハ西室之軒ニ被立留者也、丁衆參堂之後可進之、使取鉦少綱三度之(ナシイ)案内、此時不及申之云々、會式(ナイ)重時(之時事イ)也、重會ヲ時、講讀、會始唄、散花(ナシイ)其外諸役者ニ重會之由相觸者也、三度之(ナシイ)案内不申ト云ハ、重會式時事也、

影迎戸

論義ノ問題奥書

床著座支配

西室軒ニ御立之上者、則以鉦取進申者也、尤可有覺悟事、

一夕座若無竪者之時者、講下之鐘不搥之間、注記同侍不召之、維那聲(聲イ)一打之可有覺悟事、

一影迎戸之事、何故之重之時分、探題影迎戸タテ侍レト被申之時、注記行向後戸而、直ニ令下知堂童子、令立(之イ)者也、

一論義之問題奥書事、

一問之奥ニ(ハイ)ワ(トノ)如(コトクイフ)等云事(コトナラヒニチウイフ)并重何寺某大法師得否、二三之問者、如等云事并ニ問何寺某大法師得否、四五問者、云事(イフコト)并ニ問何寺某大法師得否、

竪問役(名イ)　竪者役實名(イ)　竪問役ヲ(イホツシトツフ)　竪問役ヲ(五問イ)

一花嚴宗(ナシイ)住位僧某所立、斷惑義一章、因明四種之儀(義)并十帖、九ハ得、一ハ未判、

竪者名(曾イ)　竪者名(作嚴宗イ)

一三論宗(ナシイ)住位僧某所立、聲問賢聖之義一章、因明四種相違之儀(義)、并十帖、九ハ得、一ハ未判、

一得略事八ハ得タリ、二ハ未判トモ、九ハ得タリ、一ハ未判トモ、并ニ得タリトモ、精義之命ニ隨而可讀上者也、并得タリトハ、十帖悉得タル也、

一床著座支配事、於僧綱分者一床也、威儀師二床之(ナシイ)南端、維那、注記三床南二、一唄師三床、北端、散花師四床、北端、殘丁衆之内、從末八人、號分花衆、四床ニ著

集會所衆僧立列ノ次第

永正十年四月二十日

座、加散花師、九口也、是定法也、維摩會同前也、但維摩會時、僧綱依無人二三
四床、丁衆多之時ハ、四床之十、人十一人著座云々、弘安年中度々如此云
々、

殘丁衆之內算之、二三床可令支配之、

一年戒事、不依已講、成業、官位勝劣、年戒次第ニ載之、但同年同戒之躰、專寺者
上首、他寺者次座、興福寺丁衆ト藥師丁衆同年同薦之時者、興福寺可爲上
首也、藥師寺ハ次座、藥師寺丁衆ト法隆寺丁衆ト同年同薦之時者、藥師寺
者可爲上首、此次第維摩會同前、

一床著座支配事、

一床三口 僧綱、 二床九口 加威儀師定、
三床八口 加維那、注記、唄師師定、 四床九口 加散花師定、
專寺十八人 加僧綱、讀師、散花師、擬講、成業定、 興福寺十二人 講師并丁衆三口、綱所加定、
藥師寺二人 法隆寺一人

已上卅七人、堅者七人、

一集會所衆僧左右、左西、右東、立列東西事、於興福寺丁衆者悉西也、東大寺丁衆內

三輪宗同西方ニ集會、花嚴宗東方也、藥師寺、法隆寺同東方也、散花師同東
方ニ集會、一床之衆ハ西東エヒスカケニ著座ニ、南之端西方一番、寂上首
座也、

西上首

一 三 五 七 初結集會所著座之次第、一床分、

南 北

二 四 六

一會堂之儀、舞終者可寄花籠役之由、伶人方以鎰取申遣畢、
一自暮座者、侍隨花籠役者也、通路者一床之前通者也、歸路同前、
一松明之時者、經四床之後、至常住之在所燃之、此立明事者、一床頭程燒之先
例也、
一續紙持來之時、自四床後持來、此續紙者、堅者之口數程被出之者也、
也、

一探題第二度以鎰取申之、於第三度者、侍參御迎者也、
一初結烈已前、會堂戶可開之由、以鎰取下知堂童子等、自影迎戶可開初也、影
迎戶後戶正面三間西戶開之、次烈之亂聲鐘三槌之、次於集會所成烈之由觸

亭屋ノ次第

之時引烈、威儀師西維那東注記者從近廊經壇上至西戸、

一結日、自會堂衆僧退出之後、三口綱所令同道、直ニ行向亭屋、鉦取召具、

亭屋集會ノ樣

一亭屋之次第、烈者自巽角戌亥角之土間ノ土戸ニ引烈者也、成烈之由、行事之後、自末立座而退出、烈者自巽角戌亥角之土間ノ北戸ニ引烈、成烈之由、行事所司以少綱綱所方ヘ申送之時、引烈一行ノサキ上首、綱所ハ北脇ノ外ニ立留、令入ノ脇ノ外ニ立留、衆僧令入後、三口綱所入而著座、東向、威儀師北ニ入、衆僧之後、三口綱所同自土戸入而著座、東向、烈之亂聲在之、行事所司奉行舞四在之、亭屋之儀、無特題目、東大寺三綱奉行之、則行事之所司、明年法花會堅義躰交名讀上之、

以往ハ晝間ニ始行シ近來ハ

一亭屋集會之樣、諸僧者東方巽角集會、三口綱所者土間、自諸僧西坤角集會、西上首、東大寺三綱者、同所艮角集會、烈之事申送案内時、爲寂前威儀師兩從儀師付威之跡ニツクイ、戌亥角、土間之土戸之外ニ、三口綱所立留、諸僧自土戸入後、三口綱所自土戸烈立、西上首、自綱所東方三綱烈立、東上首、諸僧入内、各著座後、三口綱所入内著座、東向、三綱入内北方床ニ著座、南向、

一往古者、於亭屋各饗膳、近來以生料被成之者也、

一以往者、晝專始行之會式也、近來夜陰被始行歟、竪者六口七口之時、晝夜被始行之條、尤可然事也、舊記云、午時衆僧供所可寄也、供所ト云ハ亭屋之事也、行事所司令搥集會鐘、以少綱令催促丁衆者定例也、依之結日之鐘者、亭屋之下知也、注記尤可有覺悟事、

夜間ニ始行ス

結日ノ鐘ハ亭屋ノ下知

一四床丁衆事、北室之軒ニ立者、以往之定規式也、但維摩會之時者、近來西戸之外ニ立而、堂童子催之時、自西戸入堂内、此次第法花會同前也、先年源乘之注記之時、出西戸、堂童子催之時被入者也、

一他寺三綱、初結於堂内之東之端南床令著座、北向、自東戸出入、注記不可存知事也、

花籠曳樣

一初結講師登樂下樂在之、令遲々者、以鉦取可申遣樂所事、

一呪願一床一藺之役、三禮寂末之已講役也、著座次第可見懷中之記也、

一集會鐘事、初日朝座者、注記下知之、堂童子搥之者也、

自初日夕座至第四日夕座者、從講師被搥之畢、若有無沙汰者、講師方ヘ可申事、結日者、亭屋下知、有無沙汰者、行事所司方ヘ可申遣者也、

一花籠職掌曳樣事、職掌三人也、此内一人者、一床之丁衆無下床以前、急花籠曳之、今二人ハ、内一人ハ高座西方之柱邊ニ立テ、四床之丁衆ニ曳之、今一

人者一床之北端之柱之西浦ニ立テ、二三床之丁衆ニ曳之、維摩會之時者、職掌三人之内一人ハ有官也、一床分有官曳之事也、

一初結之外、中間者、堂童子花籠曳之事也、

一晝堅義之時者、松明料注記不召、侍行向後戸、蜜々令下知堂童子令燃之、

一講讀參堂本路事、以往者如當寺大會、經庭前而、自正面之壇參堂云々、初結乘輿經東西之近廊而參堂者雨儀也、依爲便路、近來者如雨義出仕云々、又探題雨儀之時、初結者、自室西軒令出集會所給者也、

講師讀師參堂ノ本路

一一床僧綱探題、會始兩人合三人幷堅義者七人、合御請十通、此外講師之御請一通、自京都下御請之間、其趣之注進畢、則御請等鎰取調之下向畢、

會料絹代

一東大寺ヨリ鎰取綱掌方ヘ下行物事、會料絹之代貳貫百文、同米壹石時和市、

同又米五斗和市、堅者人別米二斗、雜紙一束、一床之人別一斗、同寺務ヨリ酒肴代三百文、○傍註ハ、東大寺法華會之記ニ據ル、

安藝小早川弘平、同扶平ノ子福鶴丸ヲ養子ト爲ス、

〔小早川家文書〕二

就無弘平實子、福鶴殿親子之契約被申定候、誠千秋万歳候、一跡之事、不可有

實子出生セバ福鶴丸ニ一所ヲ給スベシ

余儀候、雖然、於實子出生者、福鶴殿一所可被進置候、御方よりも一所御合力候て、此方可爲御一味之由申合候、尤目出候、恐々謹言、

永正十卯月廿日

神保掃部助　景胤(花押)
木谷宮内少輔　景忠(花押)
柚木内藏人亮　武包(花押)
川井大炊助　景秀(花押)
末長治部少輔　數景(花押)

貳分右馬助殿
眞田左馬允殿
田坂四郎左衞門尉殿

永正十年四月二十日

土屋備前守殿
眞田備中守殿　御宿所

〔竹原小早川家系〕

弘平
興景（實子興景出生前ノ養子）
菜福鶴丸、實小早川掃部頭扶平次男、爲弘平養子、（興景出生以前養子也、）
〔小早川家系〕
小早川扶平
小早川興平
菜福鶴丸、爲小早川安藝守弘平養子、
義氏
常平

二十三日、辛酉、因幡山名豐賴、矢部北川備後守ニ、同國三成別府ノ地ヲ充行フ、

〔因幡志〕三十七

知頭郡三成別符事、爲新給所宛行也、早守先例、可致沙汰之狀如件、

永正十四月廿三日　豐賴（山名）（花押）

矢部北川備後守殿

二十四日、壬戌、三河松平長親（松平長親）、同國大樹寺ニ燈明錢及ビ定香錢ヲ寄進ス、

〔大樹寺文書〕一三河

（端裏書）「寄進狀　灯明、定香錢、夏冬寄進、貫五百文納所也、道閱」

寄進申灯明錢幷定香錢之事

合貳貫五百文者、

右爲灯明錢寄進申所也、在所平田おとり堂分、作人長坂縫殿助、夏冬兩度ニ沙汰あるへく候、寄進狀事、重而藏人（信忠）ゟより可進候、先一筆令申候、仍爲後日如件、

永正十年酉年卯月廿四日　道閱（花押）

進上　大樹寺

寄進狀ハ信忠ヨリ出ス

二十六日、甲子、下野芳賀高孝、同國成高寺ニ、神主郷內直心庵給分ヲ寄進ス、

〔寺社古狀〕〇下野

亡父忠翁ノ志ニ因ル

爲亡父忠翁（高勝カ）之志、神主郷之内直心庵給分令寄付于當寺候、雖諒乏少地候、覃後昆不可有相違歟、然則守累孫此掟、可致（被カ）加後鑑者也、仍寄付之狀如斯、

永正拾年癸酉卯月廿六日　右馬允高孝（芳賀）（花押）

欽上　成高寺

衣鉢侍者禪師

○高孝、成高寺ニ下野乙連郷内如意院給分ヲ寄進スルコト、九年九月十一日ノ條ニ見ユ、

三十日、戊辰、連歌御會、

〔元長卿記〕八

四月卅日、晴、及晩陰、雷鳴細雨下、有御連歌、依召參内、重親（庭田）朝臣申發句、

発句庭田重親

ゑける葉よ木ゝ万もをくる風もおし

晩頭退出、

是月、上野箕輪城將長野憲業、同國大戸ヲ陷レント欲シ、榛名山滿行權現ニ祈願ス、

〔榛名山文書〕○上野

（朱書）「箕輪城主長野伊豫守立願狀」

大戸要害令落居、憲業屬本意候者、百疋之下地お榛名滿行權現に、末代可奉寄進候、

永正十年四月吉日　長野伊豫守憲業（花押）

奉懸　嚴殿（厳）寺

嚴殿寺

桂悟、了菴、明國浙江育王山廣利寺ノ住持ト爲ル、

〔高桐院文書〕○山城

日東了菴禪師轉職育王寺疏　并敍

浙江市舶司事黄相作ノ敍

了菴異域叢林之彦也、僧臘八十餘、龐眉鶴髮、動止雅恂、尤不苟於言咲、清齋習靜之餘、默究經典祕義而已、初在本國、大檀越征夷大將軍（義尹）以瑞龍山太平興國南禪々寺丈室乏人、特命主之、緇流允服、頃啣國王之命、遠使中華、得窺聲明文物之盛、聞寧波有育王寺、琳宮梵宇金碧焜煌、乃轉職此寺、而居者久之、大修教典、寺衆懽騰、寧波府衞諸官僚、亦喜其能不墜迦葉而像教中有人矣、予故爲之疏、

同疏

竊惟、大教顯于西方、流慈照于東域、分形分跡之時、大開廣濟、常現常光之世、每覺凡愚、及乎衣鉢失傳、刼灰易代、金容掩色、不鏡三千之光、麗象開圖、空端四八

之相、微言極含類於三途、遺訓導群生於十地、況日本乃扶桑之鄰壤、而徐僊託蓬島以潛形、間生異士、今在了菴、飛錫瑞龍山、究一乘五律之道、浮杯育王寺、了八藏三篋之文、萬派必朝江、千岐同適國、塵々刹々、現一毫端、去々來々、無千界外、大海法流洗塵勞而不竭、智燈長焰皈幽暗而長明、不減不增、無垢無淨、袖裏千年鐵柱骨、本自西來、手中萬歲胡孫藤、行將東去、(謨カ)堇疏、

正德八年癸酉四月吉日

賜進士出身奉訓大夫提督浙江市舶司事華人黃相書于雙柏亭（印文丙辰進士）朱印　朱印（印文大夫之章）

右本疏竪紙十一行、三十八字、藏於龍寶塔頭高桐禪院、寬保元辛酉六月、高桐掃諸軸盡、往覽之、偶得閱此疏、直寫之、延寶傳燈雖載住育王、未見本據、今於此疏、住育王一事明白、可爲的證也、

辛酉六月十九日　雜華輪下楚芳識

〔本朝高僧傳〕四十三　京兆南禪寺沙門桂悟傳

悟年八十三、奉使入明、々帝詔住育王山、悟臨門云、育王門戶八万四千、毘盧樓閣兩華現、前進步云、纔動一步東土西天、是日遣中使賜金襴僧伽黎、卽拈衣云、晝錦恩榮北闕天、黃梅夜半不曾傳、育平山頂橫雲霧、魚相福田(檐カ)檐一肩、每有上堂、緇白(歡カ)觀呼、公卿縉紳崇德來謁、○上下略、全文ハ永正十一年是歲、桂悟寂スル條ニ收ム、

○桂悟、明ニ赴キ、鄞江ニ著スルコト、八年九月是月ノ條ニ見ユ、

五月小己巳朔盡

二日、庚午、美濃瑞光寺住持某、甘露寺元長ニ賴リ、同寺ヲ勅願寺ト爲サンコトヲ請フ、

〔元長卿記〕八　四月二日（五カ）、晴、晩雨下、向四條亭、儲朝飡、濃州瑞光寺住持入來、依勅願寺之儀申請也、

伊勢長野尹藤、分部光定ノ同國五百野口ニ於ケル戰功ヲ褒ス、

〔分部文書〕○江近

去月六日、於五百野口（伊勢安濃郡）合戰被疵之條、神妙之御働、御忠節無比類候、早々被加御養生、彌御粉骨、猶以可爲祝著候、恐々謹々、

永正拾五月二日　尹藤（長野）（花押）

分部四郎次郎殿　進之候

○五百野口合戰ノコト、詳ナラズ、

三日、辛未、義尹、近江甲賀ヨリ京都ニ還ル、細川高國、大内義興等、之ヲ坂本ニ迎フ、

〔公卿補任〕四十五　從二位源義尹、四、八、十五月三日歸洛、

千秋刑部少輔義尹ヲ近江ニ迎フ

義尹甲賀ヲ發ス

歸洛ノ行列

甲賀奉公衆

〔後法成寺尙通公記〕七　四月廿八日、丙寅、晴、及晩小雨洒、千秋刑部少輔爲御迎參江州、爲暇乞被來、

五月一日、己巳、晴、夕立雷數聲、今日爲御迎、細川右京（高國）大夫、畠山尾張（尙順）入道、同修理（義元）大夫、大内左京（義興）大夫等、大津、坂本邊祗候云々、大樹亦今日甲賀御立云々、

三日、辛未、晴、大樹（朱書）大樹歸洛行列御歸洛也、供奉衆細川右馬（尹賢）頭、畠山次郎（種長）、同式部（顯光）少輔、大館刑部（政重）大輔、一色兵部（尹泰）大輔、伊勢（伊勢貞陸）守以下十二三騎、奉公衆、御輿前二行、七八十人云々、板輿也、甲賀奉公衆種村刑部（親久）少輔父子以下御先ニ馬上也、畠山修理大夫ヌリ輿、騎馬四五騎也、次大樹、御後、細川安房（政春）入道塗輿、騎馬四五騎也、其後和泉守護彌（細川澄元）九郎、次畠山尾州馬上、後騎十一二騎也、次大内左京兆ヌリ輿、後騎十一二騎也、次細川右京兆ヌリ輿、後騎十二三騎也、人數三萬餘人計歟、見物衆如竹葦云々、

日（頭書）野來、御上洛以後御對面之後（養カ）種々令雜談、千秋刑部少輔來乞對面、令雜談、

四日、壬申、晴、小雨濺、德女中被來、入夜飛鳥井來、今度之儀種々相語今日飛鳥井、伯、畠山式部少輔許江遣俊永、上洛珍重之由申遣之、

一乘院良譽禁裏武家ニ參賀ス

義尹園城寺ニ逗留ス

畠山順光ヲ以テ洛ノ事ヲ歸期日ス及ビ供衆ノ事ヲ觸レシム

十六日、甲申、朝間陰、從午剋晴、一門今朝禁裏武家江參賀、

〔拾芥記〕中　五月三日、天晴、室町殿義尹、自甲賀還御也、兼日細川、大内兩京兆、畠山尾張入道、細川右馬助等參御迎、室町殿御歡樂、御中風之後減云々、

〔嚴助往年記〕上　五月朔日、御立甲賀、三井寺ニ御逗留、爲門跡御手代水本御加持被參、自門跡悉被立沙汰云々、細川、畠山、大内、能登修理大夫等參御迎、御歸洛也、

〔益田家什書〕（縣紙）二六十

一

益田治部少輔殿　御宿所　蜷川新右衞門尉　親孝

昨日者、預御使候、畏存候、條々目出以面拜可令申候、夜前亥刻、自畠山式部少輔殿、一色兵部大輔殿（尹泰）、伊勢守方へ還御之儀被仰出候、同御日執幷御供衆之事觸可申之旨候、今日於細川房州御參會候間、御定日之事者可相定候由候、旁珍重至極候、時宜雖可爲御存知候、一筆令啓上候、恐々謹言、

卯月十六日　親孝判

益田宗兼

松田英致ヲ東寺ニ義尹ノ歸京ヲ報ズ

土岐頼明義尹ニ太刀ヲ進メテ歸洛ヲ賀ス

〔東寺百合文書〕（益田治部少輔宗兼）ゑ一之十　○山城

「（縣紙）永正十」

東寺年預御房　御返報　松田對馬守　英致」

○上略、幕府、東寺ヲシテ、義尹ノ病氣平癒ヲ祈ラシムルコトニカヽル、四月十四日ノ條ニ收ム、御京（今）著來月一日治定候、三日可爲御京著候、於京都可被申候、恐々謹言、

卯月廿九日　東寺年預御房　御返報　英致（花押）

〔土岐文書〕（縣紙）「永正十二七廿六ニ到來、」

土岐明智彦九郎殿（頼明）　御返報　一色兵部大輔　尹泰」

如仰未申通候處、預御禮候、祝著之至候、仍就公方樣御歸座之儀、御太刀一腰御進上之趣、則令披露候處、目出候由可申旨候、隨而私ゑ御太刀被懸御意候、畏悦千万候、將亦太刀一腰令進入候、誠表祝言計候、猶向後者雖無指題目候、細々可申承事可爲本望候、恐々謹言、

永正十年五月三日

七月十四日　尹泰（花押）

土岐明智彦九良殿　御返報

就公方様御入洛、爲御禮御太刀一腰御進上候、則致披露候、目出度候、早々御參洛尤可爲專一候、自然之於御取合者、聊不可有疎意候、恐々謹言、

一色材延（一色）顯明ニ上洛ヲ勸ム

八月七日　材延（花押）

土岐明智彦九郎殿　御返報

〔皇年代私記〕永正十年五月、上洛、

幕府ノ威衰ヘ諸侯ニ阿ル

〔曆仁以來年代記〕同五月三日、御歸座、諸大名、諸近衆、各御迎也、〔永正十年〕〔異本年代記抜萃、年代記抄節同ジ、〕

〔密宗年表〕永正十年五月三日歸京、改名於義稙、爾來武將威名衰、阿於諸侯、〔山史、〕〔○義尹、名ヲ義稙ト改ムルコト、十一月九日ノ條ニ見ユ、〕

○義尹、大内義興、細川高國等ノ專恣ヲ怒リ、甲賀ニ出奔スルコト、三月十七日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

伊勢貞宗義尹ヲ近江ニ迎フ

本願寺光兼ヲシテ山科無常堂ヲ包マシム

遊行二十一代

五十五歳

〔實悟記〕昔人物語又見及申事等書註申條々

野村殿に實如（光兼）上人御座候時、年忘記、江州山家へ將軍義稙御沒落之時、都へ御歸洛之時、伊勢貞宗、江州へ御迎に參候之時、山科葬所通候とて、御坊へ被申入、此葬所を御所御通候へき由申て、葬所如何候間、無常堂ノ跡前、そとつゝませられは可然由、貞宗被申入候しかは、安き事、報恩講大庭にしかるゝいなはきをもたせ、打かけ〳〵つゝませられ、即時に一圓に堂もみえぬ樣につゝませられ候へは、勢衆きもをつふし、此大なる堂つゝまれたる事は、何方にも不可有候とて、貞宗感し候けると、其比の沙汰にて候つる事に候、

八日、丙子、相模清淨光寺知蓮、駿河長善寺ニ寂ス、

〔藤澤清淨光寺〕往古過去帳〕下　他阿彌陀佛遊行廿一代（永正十年癸酉五月八日寂、）

〔遊行歷代譜〕二十一代知蓮、（七條金光寺十三代、八代御弟子、元阿彌、）（如樂、）百四代後土御門院即位三十三年、明應六丁巳五月八日、於越前國敦賀西方寺賦算、三十九、遊行十六年、百五代後柏原院即位十三年、永正十癸酉五月八日、於駿州府中長善寺入滅、五十五、入戒十五、獨住九ケ月、

〔藤澤道場記〕第廿一（知蓮）（永正十年五月八日、於駿州府中長善寺入滅、五十五歳、）

○知蓮、長善寺ニ入ルコト、正月二十九日、清淨光寺火クル條ニ見ユ、

十四日、壬午、興福寺一乘院良譽、奈良ヨリ上洛ス、

〔後法成寺尚通公記〕七　五月十四日、壬午、朝間小雨濺、晴陰、一乘院良譽、一門上洛、一荷兩種百疋持來、女中ヘ一荷兩種、德女中一荷兩種持來、

六月六日、癸卯、晴、心中念誦如例、一門被罷向鷹司亭、有一盞云々、一門酒迎之返興行、三獻アリ、頗及大飲、前藤中（武者小路綱光）納言、飛鳥井前中（雅俊）納言、千秋等也、

九日、丙午、晴、於清水十穀坊各一門江申沙汰、四時分ニ罷向、輿馬等也、御靈殿以下女中不殘、前藤中納言、飛鳥井前中納言、侍從（冷泉爲孝）三位以下人數也、頗及大飲、有鼬舞、歸宅黃昏也、

十九日、丙辰、晴、從飛鳥井一門江二荷、瓜、土器物三種被進之、

十五日、癸未、因幡山名豐賴、北川與三左衞門尉ニ、同國國衙公用錢ノ內ヲ給ス、

良譽鷹司家ヲ訪フ

清水十穀坊ニテ良譽ヲ饗ス

公用錢三十貫文

〔因幡志〕三十七

國衙公用錢之內參拾貫文事、爲給分相計之候、彌忠節肝要候、謹言、

永正十一五月十五日　　豐賴（山名）（花押）

北川與三左衞門尉殿

十六日、甲申、豐受大神宮禰宜等ノ請ヲ聽シ、伊勢宮河ノ新關ヲ停ム、

勅裁ヲ北畠材親（材親）ニ下サル

〔請符集〕

進上

祭主卿書狀一通（藤波伊忠）

豐受太神宮禰宜等申宮河新關事、解、本

右進上如件、

永正十年四月十一日　　左大史小槻時元

進上　頭右中將（正親町實胤）殿

宮川新關事

就勢州宮川朝餉新關事、神宮次第令奏聞候之處、雖有子細、被引移之、神訴異于他間、停廢事被聞食了、早可加下知之旨、被成勅裁於北畠大納言（材親）入道了、可存此旨由、可被下知之狀如件、

五月十六日　　右中將

永正十年五月十六日

神宮ニ下知セシム

就勢州宮川新關事、御教書如斯、此旨早可令下知神宮給候也、恐々謹言、

五月十六日　左大史判

謹上　祭主三位殿

興福寺六方衆筒井順盛、同寺衆徒ト隙アリ、春日社及ビ興福寺、其門ヲ閉ヅ、

〔後法成寺尚通公記〕七　五月十七日、乙酉、晴、〇中略及晩、從南都筒井（順盛）與寺門取合之由注進、

〔續史愚抄〕四十四後柏原院中　五月十六日、甲申、南都六方與衆中確執、因爲六方、社頭及七堂等、自今日閉門由、後日春日社司言、元長卿記追

〔興福寺略年代記〕永正十年癸酉五月十六日、興福寺閉門、

〇春日社、興福寺、門ヲ開クコト、十月二十六日、ノ條ニ見ユ、四月及ビ六月ニ、興福寺、東大寺、門ヲ閉ヅルコト、便宜左ニ合敍ス、

興福東大兩寺閉門

〔興福寺略年代記〕永正十年癸酉四月廿日、兩寺（興福寺、東大寺）一度閉門、

東大寺閉門

有宣ノ勘文

六月、東大寺閉門、

十八日、丙戌、細川尹賢、同高國ノ援ヲ得テ、近江山中某ヲ伐チ、火ヲ放ツテ歸ル、尋デ、遁世ス、

〔後法成寺尚通公記〕七　五月十八日、丙戌、晴、今朝山中（近江甲賀郡）江從細川右馬頭（尹賢）勢□云々、（細川高國）京兆合力大勢云々、令放火、卽歸陣云々、

十九日、丁亥、晴、右馬頭遁世之由聞及間遣人、祝著之由令返答、

十九日、丁亥、太白、辰星ト合ス、尋デ、土御門有宣、勘文ヲ上ル、

〔後法成寺尚通公記〕七　五月廿四日、壬辰、陰雨下、〇中略有宣（土御門）卿勘文進上、

今月十九日戊時、太白與辰星合相犯、相去一尺許、

天文要錄云、太白與辰星鬪者、君臣有愼、

又云、太白與辰星合、天下爲變謀、有外兵內亂、

又云、太白與辰星鬪者、大將軍愼之、

乙巳占曰、太白與辰星鬪者、四夷侵內、

又云、辰星與太白合、西方兵起、

荆州占云、辰星與太白合、必疾疫大喪事、

又云、金與水合、其下洪水、

永正十年五月廿三日　　從二位有宣

二十二日、庚寅播磨守護赤松義村、舊ニ依リ、同國淨土寺ニ段錢、諸役、臨時課役等ヲ免除ス、

〔淨土寺文書〕〇播磨

かとうこほり　ゑやうと寺の事、御代〳〵まとよ松（赤松政則）をんゐんとのさゑ御ゑんよて、ゑんせん、ゑよゑく、ゑんしのくゑやく以下御めんきよれ上い、せん〳〵のとくめんせらゑ候、この分あひ心えらるへく候、おゑしく御けちよそへ　ゑやうけさあるへく候よし、おほせいさされ候、りしく、

永正十年　五月廿二日

小寺かゝのりゝ殿（政隆）

黒印

〇本書ハ、義村ノ後見母洞、松院ヨリ出セルモノナリ、

丹羽親康、但馬ヨリ上洛ス、又北小路俊永、能登ニ下ル。

〔後法成寺尚通公記〕七　五月廿二日、庚寅晴、〇中略及晩丹羽親康三位來、今度但馬ヨリ上洛、雁一進上、令對面、勸一盞、俊永（北小路）下向能州、來九月中ニ可上洛云々、

二十五日、癸巳、石見高橋元光、備後三吉氏家ト戰フ、是日、幕府、益田宗兼ヲ

シテ、氏家ヲ援ケシム、

〔益田家什書〕二十五

高橋民部少輔元光、對三吉彈正忠氏家及鉾楯、既彼城可沒落云々、太無謂、所詮急速被合力氏家者、尤可爲神妙之由、被仰出候也、仍執達如件、

永正十五月廿五日

之秀（假屋）判

貞運（同）判

益田治部少輔殿（宗兼）

〔參考〕

〔藝藩通志〕百三十一　土官流寓　備後國三次郡五　三吉兼範　里傳ヨ、兼範ハ、權大納言正二位行成（藤原）卿の四男なりと、いふ、大日本史を案に、行成卿の子ヨ、兼範といへるハ見へも、是三吉家の元祖ヨして、備後國五萬三千貫を領し、子孫十五世兼宗、兼家、信兼、秀高、光高、高家、家秀、秀明、熙秀、豐秀、豐高、相續て、畠敷村比叡尾山ヨ城居も、元弘年中ヨハ、宮方ヨ屬し、致高、隆亮、廣高、其後足利直冬ヨ從ふ、又山名氏、大内氏ヨ屬も、十四世隆亮ハ、所領八萬石に及ぶといふ、十五世廣高ハ、毛利ヨ屬し、城を上里村ヨ移も、比熊山城これなり、〇下略

永正十年五月二十五日

比叡尾山
比熊山城

〔藝藩通志〕百三十一　備後國三次郡五　城墟宅址戰場附

三吉氏の元祖藤原兼範より十餘世、此ゟ據る、廣高に至、始て比熊山ゟ移る、比熊山　上里村ゟあり、天正中ゟ、三吉廣高、新城を築き、比叡尾山より移る、時に毛利氏ゟ屬セ、關ヶ原敗後、城廢セ、

二十六日、甲午、因幡山名豐賴、北川與三左衞門尉ノ同國布勢城ニ於ケル戰功ヲ褒ス、

〔因幡民談〕十二

去月廿六日、（布勢）當城敵取詰之處、於正木口突鑓云々、尤神妙也、彌可被抽戰功之狀如件、

永正十
五月廿六日　（山名豐賴）（花押）

矢部北川與三左衞門尉殿

二十七日、乙未、義尹、山城松尾社ニ神馬ヲ寄進ス、

〔松尾神社文書〕二　○山城

松尾社爲御神馬、一疋　青毛、可牽進之由、所被仰下也、仍執達如件、

伊勢守貞陸（花押）（伊勢）

永正十年五月廿七日

鳥居造立ノ時ノ約束

〔東文書〕三　○山城

（松浦藏書）「永正十年酉五月廿七日」

先年當社鳥居造立之時、○鳥居造立ノコト、詳ナラズ、御約束神馬一疋　青毛、事、只今被牽進候、目出候、恐々謹言、

五月廿七日　貞運（假歷）（花押）

松尾社御師東殿

法名

甲斐穴山信懸卒ス、

〔高野山過去帳〕○諸寺過去帳所收　建中寺殿中翁道義　甲州武田彌九郎信懸、永正十年癸酉五月廿七日卒、

〔武田家過去帳〕○紀伊　建忠寺殿中翁道義　神儀　甲州武田彌九郎信懸公爲菩提也、但武田伊豆守信友公祖父也、永正十年癸酉五月廿七日卒、

世系

〔諸家系圖纂〕四ノ一　武田

信英　實信重次男、兵部少輔、法名天輪寺、

信懸　彌九郎、

乙若　大花、

慶壽院

〔諸家系圖纂〕四ノ三 武田

信介 刑部少輔、號穴山、法名英中、號天輪寺、

信懸 刑部太輔、法名忠翁道義、

信永 宗九郎、

信堯 刑部太輔、

信風 甲斐守、

〔源氏系圖〕南松院本 ○甲斐

兵部少輔 (朱)(信俊、後公)穴山殿、英中、天輪寺殿、

穴山殿乙若丸 太華仁公松岳院殿、

彌九郎信義 忠翁道義建忠寺殿、

慶壽院主

女子太多

一乘院良譽見物、

二十八日、丙申、細川高國、猿樂ヲ張行ス、

〔後法成寺尚通公記〕七 五月廿八日、丙申、晴、○中略 於細川右京兆(高國)有猿樂、一乘(良譽)院密々見物、

座主堯胤法親王令旨

延暦寺證覺ヲ講師ト爲サンコトヲ請フ

六月小 戊戌朔盡

四日、辛丑、延暦寺六月會、勅使右少辨葉室賴繼、之ニ莅ム、

〔賴繼卿記〕○歷代殘闕日記百所收 □(延)□(暦カ)寺六月會可參向之由、甘露寺中納(元長)言被仰下間、參向了、中御門亭(宣胤)より出立了、

□分也、二會事、可令申沙汰給候由、座主宮(三千院尭胤法親王)之御消息所候也、恐々謹言、

□月廿七日(五カ) 法眼任藝

藏人右少辨殿(葉室賴繼)

□(誦)□(殊カ)蒙天恩、因准先例、以傳燈大法師位證覺、可爲□(法)華會講師之由、下賜宣旨狀、

□(右)□(讃カ)考案內、上名簿望朝選、學者之常也、證覺圓宗機熟、性□眼穿、苟存昇進擬講所、伏請天恩、因准先例、以件證覺、可爲來講師之由、欲下賜宣旨、仍勒事狀、謹請處分、

永正十年四月 日 都維那

寺主

上座權少僧都法眼和尚位眞秀

六月會のりうし宣下事、座主宮よりりやうに御申、このよし御心え候て、御ひろう候へく候、しく（表書也、）

勾當內侍とのへ御局へ　より繼

獻上

宣旨

（宿紙一枚ニ書之、禮紙ニ一マキ一マキテ、山門ヨリノ申狀ヲマキソヘ畢、ヒ子リメヲ水引ニテイフヘシ、）

延暦寺申請、殊蒙天恩、因准先例、以大法師證覺、可爲天台兩法花會講師事、

（副寺解、）

仰、依請、

右宣旨、早可令下知給之狀如件、

五月一日　　右少辨賴繼奉

進上　三條中納言（公條）殿

上卿三條西中納言公條卿也、（申狀ヲソヘテ被下之、又辨より官務ニソヘテ下、）

（證覺ヲ以テ講師ト爲ス）

（賴繼講師宣下ヲ傳請ス）

權中納言公條

□（延）暦寺申請、殊蒙天恩、因准先例、以大法師證覺、□（可）爲天台兩法花會講師、（副寺解、）

早可令下知給之狀如件、

□（五）□（月）一日　　右少辨殿

□三條中納言

（上卿三條西公條ノ下知）

□（延）暦寺申請、殊蒙天恩、因准先例、以大法師證覺、可爲天台兩法華會講師事、

（副寺解、）

仰、依請、

右宣旨、早可被致下知之狀如件、

五月一日　　右少辨判

四位史（小槻時元）殿

（山門ヨリノ申狀ヲソヘテ下之、依爲山引ヨリノ申狀ヲマキソヘ畢、辨方、杉原ニ書之、ヒ子リメノ上下水引ニテイフ也、杉原一枚ニ書、禮紙ニ）

〔請符集〕

永正十年六月四日

二會講師

大法師證覺

右少辨藤原朝臣傳宣、權中納言藤原朝臣公條宣、奉勅、件人宜爲天台兩法華會來講師者、

永正十年五月一日　修理東大寺大佛長官左大史小槻宿禰（時元）判　奉

十日、丁未、因幡山名豐賴、北川與三左衞門尉ニ、同國府中廣瀨ノ內龍口跡ノ地等ヲ給ス、

〔因幡志〕三十七

府中廣瀨之內龍口跡夏、布施南方內、（布施ノ內）石谷左京進後家分、（石谷家分）野坂嶋村內屋敷貳ヶ所、爲給分相計之候、守先例令領知、彌可抽忠功者也、謹言、

永正十六月十日　豐賴（山名）（花押）

北川與三左衞門尉殿

十三日、庚戌、義尹、土御門有宣ヲシテ、小泰山府君祭ヲ行ハシム、

〔後法成寺尙通公記〕七　六月十五日、壬子、晴、有宣（土御門）卿一門（二條院良豐）江申御禮、一門余令對面、相語云、一昨日自大樹小泰山武君（府君）爲御祈禱被行之云々、

十四日、辛亥、祇園御靈會、

〔後法成寺尙通公記〕七　六月七日、甲辰、晴、一門令同道、於去年棧敷、祇苑（園）會令見物、各給一盞、

十七日、甲寅、鴨社假殿造替ノ日時ヲ定ム、

〔元長卿記〕八　六月二日、晴、鴨社假殿造替日次の事、今月中旬下旬之內、木作始已下、次第之日時宣下事、令披露了、

鴨社假殿造替日次の事、おほを出され、經營仕候へんする由申候、次經所の邊よ杉一本候、これをかゝして、材木よめしはらひ候へく候、用脚の潤色よて、他事まて事行へき御事候、勅許子細かく御さ候へゝ、一（ヤ）てよ造畢可然樣よとゝたかしく申候、五位職事、一藹（萬里小路）よて候へゝ、秀房（萬里小路）よおほをつゝられ候へき歟、先日時早々勸させられ候（ヤ）へき、（こ）ゝろるへく存候、このよし心え候て、御申候へく候、あかゝ〜く、

勾當內侍殿御局へ　もとあろ（甘露寺）

猶々、正殿造替よゝ、社解よて嚴重のやうよ候、ろり殿よゝ、ちろき程もこれまてゝ候ゝぬ、

藏人萬里小路秀房ヲシテ奉行セシム

鴨社假殿造替木作始已下次第日時風記幷宣下事、可被申(令カ)沙汰給由、被仰下候也、恐々謹言、

六月二日　藏人辨(萬里小路秀房)殿

中旬下旬之間、早々勘解由(勘解由小路在重)可被仰遣候也、

〔請符集〕

宣旨　櫃中納言(元長)、元

鴨御祖社假殿造營木作始幷立柱上棟日時事、副風記、

右宣旨、早可被下知之狀如件、

六月十七日　(小槻時元)四位史殿

陰陽頭勘解由小路在重ヲ勘造ス造替宣下日次

鴨社假殿造替　宣下日次

今月五日壬寅

右中辨(萬里小路秀房)判

木作始日次

十一日戊申

木作始日

十四日辛亥　時辰未

十八日乙卯　時卯巳

六月二日

陰陽頭賀茂(勘解由小路)在重

立柱上棟日次

鴨社假殿立柱上棟日次

七月五日辛未　時辰

立柱礎次第

立柱幷礎次第

先東　次西　次北　次南

遷宮日次

遷宮日

十八日甲申　時戌亥

六月十日

陰陽頭賀茂在重

鴨社ヘノ宣下

左辨官下　鴨御祖社

永正十年六月十七日

永正十年六月十七日

應任日時造立當社假殿事

木作始日時

始木作日時

今月十八日乙卯　時卯

立柱日時

立柱日時

七月五日辛未　時辰

立柱次第

立柱次第

先東　次西　次北　次南

上棟日時

上棟日時

七月五日辛未　時辰

遷宮日時

遷宮日時

七月十八日甲申　時戌

右權中納言藤原朝臣元長宣、奉勅、宜任日時令勤行者、社宜承知、依宣行之、

永正十年六月十七日　左大史小槻宿禰 判

右中辨藤原朝臣 判

〔續史愚抄〕四十四 後柏原院中　六月十七日、甲戌(寅)、被定造御祖社假殿木作始、立柱、

上卿元長 奉行秀房

上棟等日時、風記、上卿甘露寺中納言、元長、奉行藏人右中辨秀房、勘文曰、木造始今月十八日、立柱上棟七月五日、遷宮七月十八日、假殿遷宮事、八月二日、於陣被定歟、而此日載風記、頗不審、重可考者、元長卿記、剪時元記、

○鴨社舊殿撤却及ビ假殿遷宮ノ日時ヲ定ムルコト、八月二日ノ條ニ見ユ、

二十六日、癸亥、伊達次郎、稙宗、湯村助十郎ヲシテ、出羽北條金原郷及ビ長井莊玉庭郷等ノ地ヲ安堵セシム、

〔伊達正統世次考〕八 稙宗公 上 一　永正十年癸酉夏六月廿六日、賜判書於湯村助十郎、曰、自桑折五郎方買地出羽國置民郡北條金原郷内云云、自西大枝宗保買地下長井莊玉庭郷内云云、自飯田赤瀨買地關根郷内杉下在家、自土屋上野所買地瓜畠内江上在家一宇、自寺嶋河内方買地下長井黑澤郷内云云、自國分彦三郎所買地波幾宇北方内云云、自濱田淡路方買地上長井女嶋郷内云云、右各任本狀、末代不可有相違者也、仍證文如件、湯村助十郎殿、宗、書判、

關根郷　瓜畠　下長井黑澤郷　波幾宇北方　上長井女嶋郷

今按、此年未賜公方一字、故唯書宗矣、

二十七日、甲子、夷賊、松前光廣ノ大館城ヲ襲フ、城將相原季胤、村上政儀等、

之ト戰ヒテ自殺ス、

〔新羅記〕（永正）同十年六月二十七日之早朝、夷狄發向來而攻落松前之大館、守護相原彥三郎季胤、又村上三河守政儀令生害也、（記異事ナシ、）○蝦夷年代

〔松前家譜〕乾　二世光廣　（永正）十年癸酉六月廿七日曉、夷賊大館城ヲ襲フテ、之ヲ陷ル、相原季胤、村上政儀自殺ス、賊遂ニ社寺ヲ毀チ、悉ク祝人僧徒ヲ殺ス、

是月、細川高國、鞍馬寺ニ、同寺緣起ヲ寄進ス、

〔鞍馬蓋寺緣起〕

（奥書）詞青蓮院准后　前天台座主尊應八十三歲、

繪狩野大炊助藤原元信、

右鞍馬寺緣起者、依有子細、任尊天御圖、新開畫圖、奉寄附當寺、

右京大夫源（細川）朝臣高國　御判

永正十年癸酉六月　日　圓藏坊延慶四十五歲

依有祈念之子細、當寺仁參籠申之處、圓藏房延慶、此詞被寫置、細々有披見度由、依御所望、雖惶多、如形寫候也、

詞書青蓮院尊應　繪狩野元信　圓藏坊延慶ノ所望ニ依リ祝部種長詞書ヲ寫ス

永正十年六月廿九日　寅

件緣起、以鞍馬寺之（付）住物尊應准后眞筆、令校合之訖、

十正廿五　右筆祝部種長宿禰　生年八十歲

七月大 丁卯朔盡

五日、辛未、正四位上正親町實胤ヲ從三位ニ敍ス、

〔公卿補任〕四十五 參議正四位上藤實胤(正親町)、廿四、右中將、七月五日敍從三位、

○冷泉爲孝ヲ正三位ニ、錦小路親康ヲ從三位ニ敍スルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔公卿補任〕四十五 非參議從三位藤爲孝(冷泉)、卅九、七月日敍正三位、當月上旬自播州上洛、

〔錦小路家譜〕親康 永正十年月日敍從三位、

幕府三條第作事始、

〔嚴助往年記〕上 七月五日、三條御所御事始、

〔正月以下御事始記〕永正十年七月五日、下京三條御所御普請初、御事始、

一御普請初、辰刻、細川右京大夫高綱(國カ)勸之、被官人兩藥師寺罷出(國啓、宿長)也、

一御事始、未刻、同日摠奉行畠山修理大夫(義元)、同小奉行伊勢右京亮(貞慈)、宮下野守、結城七郎、

一右筆方松田丹後守(長秀)、齋藤美作守、齋藤上野介(時基)、同御普請奉行金山三郎、

冷泉爲孝

錦小路親康

普請始

總奉行畠山義元

右筆松田長秀等普請奉行

金山三郎

一御事始當坐ニ、番匠ニ御太刀御馬被下之、檜大工同前、塗大工同前、都合御太刀三振、御馬三疋、御太刀ハ伊勢右京亮渡之也、

太刀進上ノ次第

一摠奉行以下幷伊勢(伊勢)守貞陸著座敷皮也、此以後御太刀各進上之、次第右京大夫殿、畠山修理大夫殿、大内左京大夫殿、以下如常、摠番奉行以下御普請初、御事初之御禮、御太刀二振進上、面々ハ持太刀也、摠番以下ハ金ホウ、同朋ハ各相注候て御禮申也、摠々御太刀以前ハ、畠山修理大夫初而、先役人一番ニ御太刀進上候也、

尙通大祥院ノ施餓鬼ヲ聽聞ス

十四日、庚辰、孟蘭盆會ニ依リ、近衞尙通、燈籠ヲ獻ズ、

〔後法成寺尙通公記〕七 七月十四日、庚辰、晴、大祥院施餓鬼、密々令丁(聽)聞、禁裏灯呂進上、

十七日、癸未、伊勢宗瑞、相模底倉村ニ、諸公事等ヲ免除ス、

〔相州文書〕十九 足柄下郡底倉村藤屋勘右衞門

於當村、諸公事以下、末代共令免許候、仍如件、

永正十 癸酉

七月十七日 (伊勢宗瑞)(花押)

底倉村

○宗瑞、底倉村ニ萬雜公事ヲ免除スルコト、八年八月四日ノ條ニ見ユ、

十八日、甲申、權中納言兼左近衞權中將二條尹房ヲ權大納言ニ任ジ、左近衞權中將一條房家ヲ權中納言ニ任ズ、

〔公卿補任〕四十五

權大納言從三位藤（二條）尹房、十八才、左中將、七月十八日任權大納言、

藤（二條）房家、卅九、七月十八日任、左中將如元、在土佐國、

尹房家土佐ニ在國

中將元ノ如シ

〔大中納言參議等宣旨〕○宮內省圖書寮所藏文書所收

永正十年七月十八日　宣旨

權中納言藤（二條房家）原朝臣

左近衞權中將如元、

藏人右中辨藤（萬里小路）原秀房　奉

○富小路氏直ヲ左近衞將監ニ任ズルコト等、便宜左ニ合敍ス、

〔文武諸官宣旨〕○宮內省圖書寮所藏文書所收

永正十年正月廿三日　宣旨

富小路氏直

藤（富小路）原氏直

宜任左近將監、

藏人頭左中辨藤（甘露寺）原伊長　奉

〔元長卿記〕八　正月廿三日、晴、金覺院來、佳例扇子遣之、新藏人氏直今日奏慶云々、遣樽、

〔賴繼卿記〕○歷代殘闕日記百所收　上卿中御門　八月九日　松殿宰相所望也、

大石久弘

大石久弘

宜任左衞門少尉、

藏人（右少辨藤原賴繼）　奉

源季久

源季久

丹後守源季久

宜任民部少輔、

安倍長言

宮內少輔安倍（倍）陪長言

永正十年七月十八日

永正十年八月十二日　宣旨

永正十年七月十八日

宜任左京大夫、

藏人右少辨藤原賴繼奉

口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、

八月十二日　　右少辨賴繼奉

進上　三條中納言殿（公條）

○文武諸官宣旨、十七日ト爲ス、

源季久民部少輔ゝ事、一條前關白（冬良）申されゝ候、めしつゝゝゝれ候諸大夫ゝて候、又長言左京大夫の事申入候、土御門の二位（有宣）とり申候、このよし御心え候て、御ひろう候へく候、ゝしく、

ウハ書也、勾當內侍とのへ御局へ　　より繼

文のやうひろうして候、いつゝも御心え候、をん下せられ候へと、おゝを事候、御心え候へく候、ゝしく、

返事

季久ハ一條冬良長言ハ土御門有宣ノ吹擧ニ依ル

永正十年七月二十日

〔綾小路家譜〕第七代資能母不詳、初稱資數、綾小路資能轉任右近衛權中將、

二十日、丙戌御生母贈皇太后朝子御正忌、御法會ヲ山城般舟三昧院ニ修セラル、

〔拾芥記〕中　七月廿日、天晴、於伏見般若院（殿）、爲贈皇太后御佛事、有御經供養、願文諷誦予草進、御導師花園（大泉寺カ）房清、

〔願文集〕六　贈皇太后

夫周宣再成中興名、偏因姜后諫齊威、況有昇平譽、既用虞姬謀、陰禮內和、風化外盛者乎、伏惟、先妣贈皇太后尊靈、養得貴種於源流、恭專仕進於禁闕、窈窕淑質、助妃子之靚莊、嬋娟薄眉、擬合德之美色、宮妓三千羨寵、朝宮（官カ）一百改容、吁乎自告逝徂以來、薤露之聽猶如在耳、欲求神靈無迹、薰帳之色空傷多情、爰眇身寶祚雖尊、未傳大孝於虞舜、皇后所諡、資光烈於漢明、追慕至今、修善迎忌、因茲奉供養舊圖釋迦如來尊像一幅、奉摺寫妙法蓮華經一部八卷、幷開結、心阿等經各一卷、迺命權少僧都房清、爲唱導師、天口吐辯河、克滔法水、星眸映膽斗、恣入玄門、冠冕諸宗皷吹當代、方今松檜遶寺、梵場之莊嚴惟新、蘭芷觸風、香火之舊緣無盡、然則尊儀獲性蓮清淨之妙果、速詣樂邦、答法華開題之餘薰、忽脫妄

五條爲學御願文諷誦ヲ草ス導師花園房清

御願文

釋迦像供養法華經摺寫

永正十年七月二十日

永正十年七月二十二日

境、凡厥皆共了了、卽證如如、敬白、

永正十年七月廿日

敬白

請諷誦事

三寶衆僧御布施

右先妣贈皇太后尊靈、孟秋之天殘暑之候、迎二十二回遠忌、追賁呈誠、修一乘一如妙因、隨宜開會、龍涎餘薰處、鷲嶺則此場、仰願有緣無緣共得巨益、上界下界遍歸眞如、仍諷誦所修如件、敬白、

永正十年七月廿日

草　大内記菅爲ー學

清書　行季卿（世尊寺）

御導師花園房清

諷誦文

二十二回御遠忌

清書世尊寺行季

二十二日、戊子、信濃仁科盛直卒ス、

〔信濃靈松寺記〕平氏代々覺

平氏五代仁科彈正少弼盛直公（永正十癸酉七月廿二日卒、此ノ代ニ駒澤ニ大澤寺開發ト承ル也、）法名青松寺殿一庭宗清庵主、導師靈松六代龍門薫和尙也、（○信濃天正寺記異事ナシ、）

〔仁科家舊記〕五代仁科彈正小弼平朝臣盛直公、有四男、內一人出家、一（女ヵ）內分地ニ人出ス、永正十癸酉七月廿二日卒ス、法名青松寺殿一庭宗清庵主、

師、

仁科城主御代々

仁科彈正少弼平盛直

盛直言行廉潔ニシテ、ハナハタ佛乘ヲタツトブ、大澤寺開基絕芳奇禪師ニ飯依シテ、剃度授戒、法名盛譽ト號ス、法恩報センタメ、駒澤山ニ一宇ノ蘭若ヲタテ、神龍山大澤寺ト號ス、今以繁榮ノ法窟也、

法名

佛ヲ崇ビ絕芳ニ歸依ス大澤寺ヲ建ツ

〔仁科系圖〕

持盛

盛直　仁科彈正少弼、從五位下、

女子　樂岩寺左馬助義國室、

女子　高梨伊豆守清秀室、

世系

永正十年七月二十二日

義尚ノ六角征伐ニ從軍ス

上杉憲定定實爲景ノ不和ヲ伊達稙宗ニ報ズ

明盛（仁科彈正少弼、從五位下、）盛直　延德元酉歲、將軍足利義尚公、近江國御發向、依之美濃、信濃諸士出陣可有之依嚴命、同國村上、海野、伊奈等、盛直馳參於湖東戰功、然所將軍義尚公於陣中三月二十六日薨、（義尚、六角高頼ヲ近江ニ伐ツコト、長享元年九月十二日ノ條ニ、同國鉤ノ陣ニ薨ズルコト、延德元年三月二十六日ノ條ニ見ユ、）依之各本國江引取、永正十癸酉歲七月二十二日卒、六十六歲、

二十四日、庚寅、從三位松殿忠顯ヲ正三位ニ敍ス、

〔公卿補任〕（四十五）　參議從三位藤（松殿）忠顯、（五十七、）七月廿四日敍正三位、

越後守護代長尾爲景、守護上杉定實ト和セズ、爲景、信濃ノ情勢ニ就キ、島津貞忠ニ問フ、是日、貞忠、之ニ答フ、

〔伊達家文書〕一

（懸紙）〔謹上　伊達殿

藤原憲定〕

雖未申通候、令啓候、抑累年越州不思議之樣體、定可爲御覺悟之前候、就中、去年以來、對（上杉）定實、長尾彈正左衞門尉（爲景）慮外之刷、前代未聞、依之、宇佐美彌（房忠）七郎露忠信候之處、剩取成不儀、催國中之衆、小（中野頼忠）野要害ヘ取懸候、（中略、全文ハ、十一年五月二十六日、爲景、房忠ヲ小野要害ニ攻ムルル條ニ收ム、）（永正十一年）六月十三日

謹上　伊達殿（植宗）

藤原憲定（花押）（上杉）

信濃中野牢人ノ騷動

貞忠河西ノ通路安全ヲ保證ス

〔上杉家文書〕一

就爰元之時宜、急候間、今朝關河方迄進飛脚候キ、然處、御同前御尋、畏入候、村上香坂領中候於號小嶋田地、中野牢人相集之由、其聞得候間、時宜無心元存候處、中野家中ニ綉子細候ハヽ風聞候間、不誠存候、雖然、渡堅申付候處、去廿二寅刻、彼牢人衆被官中野ニ相殘候者共、露色候處、依無南口通路失利、散々罷成候間、中野ヘ旁追懸、或者生取、又者ゟらめ候由申候、今分ニ候ハヽ、指事有間敷候ゟと存候、可有御心安候、河西通路之事者、愚老候ハん間ハ、涯分可申付候間、別條有間敷候、河東之事、彌須田、綿内ヘ可被仰付候、別而栗田方懸自戰被綉候ハヽ、今日只今まてハ此方ヘ無其聞得候、但彼地之事者、佛在所候間、中野牢人衆も、有遊行事可有之候歟、委者不存候、何樣御意透、彼方ヘ可申越候、先書爰元之樣體具申候間、早々及御報候、非無沙汰候、恐々謹言、

永正十年七月二十四日

（永正十年）七月廿四日　　島津貞忠（花押）

（修景）長尾殿御報

當國其御國まて、色々不思議成縒之由申候、御進退何篇ゟも御用心簡要候、雖然、無面目申事候へ共、當國衆我々を始として、何も若輩候間、甲斐々々敷致計儀得間敷候間、可有御心安候、返々、今度者草間大炊助致武略、夜更小嶋之被官山々よりはりし出し、數多捕取、兩人とつ付こりけ候、寔無比類候、

草間大炊助ノ企はつ付

○爲景、貞忠等ノ信濃ヨリ亂入セントスルニ依リ、揚河北衆及ビ中條藤資ヲシテ出陣ノ用意ヲ爲サシムルコト、八月五日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔編年上杉家記稿〕十四　七月二十四日、是ヨリ前、長尾爲景、信濃ノ諸將、將ニ越後ヲ窺ハントスルヲ聞キ、書ヲ島津大隅守貞忠ニ與ヘテ、其意ヲ問フ、貞忠答フルニ他ナキヲ以テス、既ニシテ警聞未タ止マス、爲景復タ人ヲ遣ハシ之ヲ問ハシム、答フルニ中野黨浮浪ノ亂アルヲ以テス、其實ハ之ニ應スルナリ、其書ニ曰、○上杉家文書ニ同ジキヲ以テ略ス、

翌日御歸第

二十五日、辛卯、常磐井宮恒直親王、清水寺ニ參詣シ、賊ニ襲ハレ、疵ヲ被ラセラル、

〔拾芥記〕中　七月廿五日、今夜常磐井宮御方恒直親王、清水寺御參詣、被打瀧之（マヽ）給、於瀧壺邊、三人出合、欲殺彼宮、鑓疵處々有之、雖然逃給不苦、明日乘輿御歸宅、

幕府、丹後守護一色某ノ、山城三寶院門跡領同國朝來村ヲ押領スルヲ停メ、同院ヲシテ之ヲ安堵セシム、

〔三寶院文書〕（概紙）〇五十二山城　下野守之秀（飯尾）

三寶院御門跡領丹後國朝來村事、當知行無相違候處、近年守護（一色某）押領云々、太無謂、所詮早退彼妨、彌全領知、可被抽御祈禱精誠之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正十年七月廿五日　　下野守（花押）

當御門跡雜掌　　散位（諏訪長俊）（花押）

〔三寶院御門跡雜掌〕

勸進狀

兵火ニ罹リ燒亡ス

是月、近江百濟寺僧某、同寺樓門ヲ建立セントシ、諸國ニ募緣ス、

〔百濟寺勸進帳〕○近江

勸進沙門敬白

請特蒙十方四輩助緣、建一宇二階樓門之狀

右近江州釋迦山百濟寺者、聖德太子之開闢、觀自在尊之靈場矣、曆歲積而八百餘回、大慈大悲無邊惠日久破生老病死之暗、利益遍於六十餘州、一十一面利生法雨遠除煩惱業苦之焰、自尒已降、所學者一實圓頓之敎法、扇台嶺古風送星霜、所修者三密瑜伽之觀行、酌龍猛餘流、累居緒焉、然間文龜第三之天仲(四月)呂上旬之候、兵火忽起魔風頻吹、佛陁蓮舍成焰煙昇天、神祇叢祠和塵埃埋地、當于尒時、重門高樓只殘礎石、金剛力士同混塘煨、衆徒等心雖抽肝膽之精誠、力不堪土木之造營、越布衣不覆肩、胡瓦鉢無潤口、若不賴萬人助緣、何能遂一宇建立、方今巡夷洛都鄙之鄉里、求道俗男女之扶助、梵天三銖衣終摩盡四十里石、一針一草何輕之、山谷一滴露尙穿徹百千步巖、一簞一瓢莫恥之、凡觀世音菩薩者、極樂淨土之一生補處、娑婆世界之施無畏者也、弘願則大悲闡提契正覺於衆生窮盡之期、密號又妙法蓮華、顯內證於自性淸淨之理、一心稱名息風除三毒七難之雲、一時禮拜心水浮二求兩願之月、以地獄爲栖、則種智首戴火輪、以罪人爲友、則楞嚴膚受鐵杖、大悲代受苦之勝利、資黃懷有憑、定業亦能轉之妙文、銘丹府勿忘、冀因薩埵護念、酬冥衆加持、投一紙半錢之輩、每手得無盡藏寶、運寸鐵尺木之類、每步誇轉輪王福、乃至卵濕化悉坐寂光宮之床、鬼畜人天併遊阿字殿之臺矣、仍勸進狀蓋以如斯、

永正十年七月日　勸進沙門敬白

○百濟寺ノ燒失スルコト、明應七年八月九日ノ條ニ、其堂宇ヲ再建セントシ、諸國ニ募緣スルコト、永正三年九月是月ノ條ニ見ユ、

八月小 丁酉朔盡

一日、丁酉、八朔御祝、

〔後法成寺尚通公記〕七　八月一日、晴陰、雨下、岩阿院（稱カ）喝食、前藤中納言（武者小路藤光）、侍從（河鰭實治）、三位、禪昌院、蒯菴、千秋刑部少輔等來、令對面、勸一盞、禁裏、引合十帖、（兎高親王）短尺一包、竹園、短尺一包、杉原十帖、大樹太刀金一腰、引合三十帖、進之、御返、花瓶、茶椀一、引合十帖、竹園、扇一本、杉原十帖、大樹、太刀金一腰、引合十帖、近衛尚通引合短冊ヲ獻ズ　義尹ニ太刀ヲ贈ル

〔宣胤卿記〕八朔　同十年、癸酉、自當年中納言（中御門宣秀）進也、中御門宣秀籠ヲ檀紙蟲ヲ獻ズ　義尹ニ太刀ヲ贈ル

內裏　檀紙十帖　虫籠一　同日御返同十帖　御筆十管

室町殿御太刀　御返同　同日自勸修寺尚顯中到來同前、

○諸家贈遺ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔後法成寺尚通公記〕七　七月廿九日、晴、平松前宰相（資冬カ）入道朝飯來、及晚世尊寺（行季）來、卯毛筆十管さのむよ進上、令對面、勸一盞、

八月一日、晴陰、雨降、○中略三福寺（マヽカナ）杉原十帖、一、色御返扇一本、茶袋（紫春）、持明院花瓶一、美濃紙十帖、御返花瓶一、茶椀杉原十帖、世尊寺卯毛筆十管、御返杉原十帖、大祥院幷繼孝院等如例年、多羅尾、小川三福寺持明院基春　世尊寺行季

同前、

二日、晴、自竹園御返、則持明院、世尊寺等返今日遣之、

三日、陰、雨下、三福寺御返遣之、

越後中條藤資、長尾爲景ニ誓書ヲ送リ、忠誠ヲ約ス、尋デ、爲景、之ニ答ヘテ、疎意無キヲ盟フ、同國新發田能敦モ亦、藤資ト進退ヲ共ニセンコトヲ約ス、

〔和田中條文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

起請文事

右子細者、先祖以來、奉對御名字、不可存別條候、就中藤資事、及度々奉公申來候上者、毛頭も無別意候、到于子孫候も、對爲景御名字、御餘儀有間敷候、若僞而申候者、

八幡大菩薩、春日大明神、諏方上下、當國一宮彌彥、二田氏神若王子可蒙御罰者也、仍起請文如件、

永正十年辛酉八月一日　　中條越前守藤資（花押血判）

長尾彈正左衞門尉（爲景）殿參

藤資起請文　先祖以來長尾氏ニ對シ別條ヲ存ゼズ

爲景起請文

起請文事

永正十年八月一日

右子細者、御代々幷我等名字、無御餘儀申請候、依之藤資御事者、不及沙汰候、至而御子孫も、不可有御等閑旨、黼寶印、以血判存候、御深志忝候、於爲景も、彌毛頭不可存別心候、若僞而申候者、〇神文略ス、

永正十年八月十九日　長尾左衞門尉爲景判

能敦ヨリ藤資ヘノ書狀　築地忠基出家ス

追而、築地(忠基)殿へも、乍恐御床敷由申度候、殊御やつさい、自何御浦山敷存

訖に候、能々世上を御らんしはめられ候と存事こ候、

就御陣立之儀、態示被下候、忝奉存候、如仰、我々も如御意こ雖存候、鎭馬御催

促候故者、御參府あるへく候歟、我々も御覺悟之外あるへからぬ候、何篇こ

も御覺悟を承、可致其心得候、此方へも珍敷左右無之候、承候一儀訖こ存候、

萬一大切訖こ候、今時分加樣之事共出來、偏こ我々式訖も不運訖こ存候、少

もいきはらをのへ候きと存候時者、加樣之儀又〻敵出來、中々他國へも、一

左右こ乞食をいさし候へ〻、まもへしと存計候、萬端重而可申上候間、早々

申述候、恐々謹言、

十月十七日　新發田源二郎能敦(花押)

二日、戊戌、是ヨリ先、鴨社舊殿撤却日時ヲ定ム、是日、同宮假殿遷宮日時ヲ定ム、

〔請符集〕

中條殿(藤資)御報

可被撤却鴨社古御殿日次、此儀木作始、次立柱分宣旨書加之、仍一通也、

七月三日己巳　時辰

六月廿八日　陰陽頭賀茂在重

宣旨　權中納言元(甘露寺元長)

可被撤却鴨社古御殿日時事　副風記、

右宣旨、早可被下知之狀如件、

六月廿九日　右中辨(高倉小路冬房)判

左辨官下　鴨御祖社

四位(小槻時元)史殿

永正十年八月二日

舊殿撤却日時七月三日辰刻

應任日時、令撤却當社古御殿事

七月三日己巳　時辰

右權中納言藤原朝臣元長宣、奉勅、宜任日時令勤行者、社宜承知、依宣行之、

永正十年六月廿九日　左大史小槻宿禰判

右中辨藤原（萬里小路秀房）

假殿遷宮日時二十八日亥刻

左辨官下鴨御祖社

應任日時、令勤行當社假殿遷御事

今月廿八日甲子　時亥

右權中納言藤原朝臣元長宣、奉勅、宜任日時令勤行者、社宜承知、依宣行之、

永正十年八月二日　左大使小槻宿禰（時元）判奉

右中辨藤原朝臣判

〔續史愚抄〕（四十四後柏原院中）六月廿九日、丙戌、被定可撤却鴨御祖社古殿日時、風記、上卿甘露寺中納言、元長、奉行藏人右中辨秀房、日時七月三日、時記、元

八月二日、戊戌、被定鴨御祖社假殿遷宮日時、上卿甘露寺中納言、元長、奉行藏人右中辨秀房、日時今月廿八日、時記、元

奉行萬里小路秀房

○鴨社假殿造替ノ日時ヲ定ムルコト、六月十七日ノ條ニ見ユ、

筑前守護大内義興、武藤次郎ノ忠節ヲ賞シ、彈正忠ニ吹擧ス、

〔大内氏實錄土代〕（十四仙田一郎舊藏）

數年於岩戸在城、馳走之由、麻生右衞門大夫家明注進之狀一見候、尤神妙候、

仍爲其賞、令吹擧彈正忠者也、彌可抽忠節之狀如件、（大内義興）（花押）

永正十年八月二日

武藤次郎殿

岩戸在城ノ忠節ニ因ル麻生家明

三日、己亥、越後守護代長尾爲景、吉江景宗ノ忠功ヲ賞シ、越後蒲原郡ノ地ヲ知行セシム、

〔國分氏文書纂〕

比日忠功不淺存候、仍蒲原郡之内千貫文之地出之候、可有領知候、仍如件、

永正十年八月三日　（長尾）爲景　黑印

吉江織部佐（景宗）殿

千貫文ノ地

〔吉江系圖〕

義周 後景周、

「景宗 文明十年五月生、織部佐、○中略 同(永正)十年八月三日、爲景賜越後國蒲原郡千貫之地、」

「宗信」

五日、辛丑、越後守護代長尾爲景、守護上杉定實ノ黨島津貞忠等ノ、信濃ヨリ亂入セントスルニ依リ、揚河北衆ヲシテ之ニ備ヘシム、尋デ、中條彈正左衞門ニモ亦之ヲ命ズ、

〔讀史堂古文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

井上、海野(淺鋼カ)、島津(貞忠)、栗田、其外信州衆相談、自關口可亂入之由、方々注進到來、然者自上田口も、定凶徒可出張候歟、各有用意、御一左右之上、不移時日、可有出陣旨、揚河北衆へ堅可被申屆、被仰出候者也、仍如件、

八月五日　　(書藤)昌信

長尾六郎(房長)殿　　(長尾)景長

關口ヨリ亂入スベシトノ注進　上田口

彈正左衞門ヲシテ黒川(盛實)ニ命ヲ傳ヘシム

猶々啓候、關口事、信州より境一口候間、如聞候者、不可有程候、急度御用意簡要候、

井上、海野、嶋津、栗田、其外信州面々遂相談、從關口可亂入候由、方々注進候、然者上田口も凶徒可出張候歟、皆々有御用意、御一左右上、不移時日、御出陣由候、依之被成奉書候、御一覽後、黒川(盛實)殿へ可被申事候、恐々謹言、

八月八日　　桃溪庵宗弘(花押)

中條彈正左衞門尉殿

○爲景、信濃ノ情勢ニ就キ、貞忠ニ問ヒ、貞忠、之ニ答フルコト、七月二十四日ノ條ニ、爲景ノ部將長尾房景等、定實ノ黨ト越後河治ニ戰フコト、十月十三日ノ條ニ見ユ、

和泉守護細川澄賢、近衞尚通ニ小旗ノ揮毫ヲ請フ、

〔後法成寺尚通公記〕七　八月五日、雨降、從午刻晴、細川彌(澄賢)九郎小旗所望之間、可書遣之由、令返事、

七日、夜來雨降、從和泉守護小旗書遣之、備後來、令對面、門跡之事、種々令雜談、旗書樣如此、

八幡大菩薩　九万八千軍神
伊勢両太神宮　勝軍毘沙門天王
春日大明神　一万八千軍天　（ハタノ上一寸ハカリ置テ書也、）
先年以長塩備前守（元親）、細川京兆（高國）所望之時、如此書遣之、

細川高國所望ノ時ノ例ニ據ルノ

八日、甲辰、權大納言正二位冷泉政爲（爲泉）、六十九、八月八日出家、法名曉覺、

法名曉覺

〔公卿補任〕四十五　權大納言正二位藤政爲

〔後法成寺尚通公記〕七　（朱書）「下冷泉大納言落色之事」八月十七日晴、下冷泉大納言入道來、去八日落色（髮）也云々、近日播州可下國之間、暇乞來、數刻令雜談、勸一盞、

下國ニ就キ近衛尚通ヲ訪フ

○政爲薨ズルコト、大永三年九月二十一日ノ條ニ見ユ、

十四日、庚戌、刑部大輔從五位下蒲生秀行卒ス、

〔信樂院過去帳〕十四日、（蒲生秀行）玉巖　永正十癸酉八月、（貞秀）蒲生智閑嫡子、

法號貞秀ノ嫡子

〔蒲生系圖〕

貞秀　刑部大夫、輔イ

秀行　藤太郎、刑部大夫、輔イ　法名宗禍（祐）、小二郎、左衛門大夫、號接取院（嶋カ）眞清、

高江　小倉兵庫助之室、三河守母、

女　

秀須　與十郎、左馬允、法名宗悟、（順イ、晉羽イ）

秀紀　刑部大夫、輔イ　法名宗閑、藤兵衛尉、

〔蒲生家系圖〕

貞秀　刑部大輔、

秀行　藤太郎、刑部太輔、法名宗拾、

高江　小次郎、左衛門大夫、號攝取院、法名清貞、

秀紀　藤兵衛尉、刑部大輔、法名宗閑、

〔蒲生舊趾考〕三　蒲生氏系圖

貞秀　藤太郎、

秀行　幼名鶴菊丸、藤太郎、刑部太夫、晉羽、中野兩城主、

高郷　小次郎、始高順、左衛門太夫、

永正十年八月十四日

女子　椿井加賀公室、同三河守政定母、興福寺官務衆徒、法名了雲院、永祿七年三月十七日卒、

女子　太田藤兵衛安道室、大永三癸未年定尼、十一月七日卒、天容善眞禪定尼、

秀順　音羽與十郎ト稱ス、

宗範　前戸部、永正十二年六月二十八日卒、雲住寺住、又西明寺七世寬淳ト號ス、

女子　永福寺三代生一房、天文十八己酉四月十三日卒、

女子　佐治主稅室、

養子　伴周坊淨秀息、三井金光院住權大僧都法印賢慶、〇下略

秀紀　次郎丸、藤兵衛尉、

女子　早世、法名正蓮童尼、

秀行　行年三十八、母ハ西坊城顯長女

永正五年九月十六日、任刑部太輔從五位下、永正十癸酉八月十四日卒去、三十八歲、法號勇功院玉嚴宗拾大居士、母西坊城紫光院(顯長)息女、專修院永嚴大姉、永正九壬午十月十六日逝去、

〔蒲生家系圖由緒書〕〇日向　蒲生知閑子息秀行、從五位下刑部大輔ト申ス、惣領ナレハトテ義澄將軍ヘ出シ、次男左衞門高鄕ハ江州佐々木左京義賢ノ幕下ニ屬シ、三男左馬允秀順ハ細川武藏守政元ヘ屬シ、音羽ノ城(二脫カ)居住ス、

秀行子藤兵衛尉秀紀ハ、十三歲ニテ父秀行死去、高鄕常々知閑ヘ被申シハ、秀行既ニ相果ラレ、秀紀ハ幼少也、蒲生ノ家職ヲハ、某シニ被仰付給ハルヘシト訴訟度々也、知閑承引ナシ、遂ニ秀紀ヲ將軍ヘ繼目ノ御禮被申上ル、〇下略、蒲生文武記異事ナシ、

貞秀紀ヲ家督ト爲ス

十八日、甲寅陸奥蘆名盛高、同國會津示現寺領ニ、棟別錢ヲ免ズ、

〔新編會津風土記〕六十四　陸奥國耶麻郡之十一　示現寺五日組　熱鹽村寺院

示現寺領中棟別事、永代令免許候、并自然雖勸進等申方候、不可有御信用候、然者於子孫、不可有違變者也、仍爲後日之狀如件、

永正拾年癸酉八月十八日　盛高(蘆名)(花押)

示現寺當住桃溪進覽

二十日、丙辰大內義興、石清水八幡宮ニ神馬ヲ寄進ス、

〔石清水文書〕六　菊大路家文書

此御神馬事、可請申之由候間、此使者ニ可被上候、

御神馬一疋鹿毛印雀目結　永正十八月廿日　越後守武長(弘中)(花押)

謹上　東竹殿　雑掌御中

二十一日、丁巳、勸修寺覺圓法親王ヲ二品ニ敍ス、尋デ薨ズ、

〔諸門跡傳〕○一華頂要略百四十所收　勸修寺覺圓法親王　二品　始諱常信又常弘、　伏見殿貞常親王御息、
後土御門院猶子、母從二位盈子、贈一品、（庭田）重有女、安祥寺々務、永正十年八月廿一日敍
二品、五十三歳、同月廿八日薨、○諸門跡長吏次第異事ナシ、

〔東寺過去帳〕染王院法親王常弘　永正十癸酉八月廿八日、御入滅、後勝福院
法親王恒興御付法、勸修寺御門跡也、當伏見殿御連枝、五十三才、

〔伏見宮御系譜〕
四代　貞常親王

五代　邦高親王　舊邦廉、母從三位源盈子、庭田大納言重有卿女、
常信法親王　母同上、
後土御門院天皇御猶子、勸修寺恒好法親王資、安祥寺々務、改覺圓、寛正二
辛巳年月日誕生、永正十癸酉年八月廿八日寂、五十三、號染王院、

〔本朝皇胤紹運錄〕○實相院本

伏見宮貞常親王御子
後土御門天皇御猶子
安祥寺寺務
染王院ト號シ奉ル
恒興法親王御附弟

御世系

長吏天平寺撿校

御書狀

貞常親王

常信法親王　勸修寺、

〔眞言諸寺院記〕一勸修寺　第二十三長吏無品法親王常弘　後土御門天皇御
猶子、實伏見宮贈一品吏部貞常親王第四御子、恒弘法親王資、文明（十五）年親王宣
下、明應三年八月、補長吏、兼安祥寺々務、天平寺撿校、永正十年八月二十一日、
二品宣下、

〔實隆公記〕○永正八年三月二十九日裏文書
此一兩日竹園之事ゑて、御近所あまりゑ御ゆうしく存候て、指事候ハね共
申入候、先日ゑ西林院万いり候て、色々御物語とも申候つる、御物語誠細々
以書狀申度候へとも、定而中〳〵御六借事候へく候、且加斟酌候、毎々就愚
詠御無心申候事、千萬無心元候、又不依思、先夜ハ宰相中將（三條西公條カ）殿万いり合候、昨
日ハ事付御うれしき由、乍自由御申候て給候ハゝ、御うれしく候へく候、明
日こそ歸寺候へ、うさ〳〵此度以面申候ハて無念ゑて候、昨日ハ内御連歌
御座候て、終日夜る万て祗候候つる、返々何事とも事々御ゆうしく候まゝ、
一筆申入候、〳〵、

永正十年八月二十一日

三條西とのへらる　常信

○覺圓、得度アラセラルヽコト、文明十年十一月十三日ノ條ニ、後土御門天皇ノ御猶子ト爲リ給フコト、同十四年九月二十三日ノ條ニ、親王宣下ノコト、同十五年二月二十五日ノ條ニ、幕府ノ護持僧トナラセラルヽコト、永正六年正月是月ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕天皇皇族之部　覺圓

○勸修寺文書（一山城）

明應三年九月二十七日敷地課役免除狀

御花押

代物二十貫文本錢返

○勸修寺文書（十七山城）

三月二十一日寺領契約狀

薩摩島津運久、同國智德院賴眞ニ、田布施野崎名ノ地ヲ賣却ス、

〔前編薩藩舊記雜錄〕四十二一乘院文書

田布施野崎名之內

十石薗之門　田數二町

廿貫文ニ賣渡し申候、

三年分子ノ歲、本錢以廿貫文ヲ請可申也、仍狀如件、

永正十年癸酉八月廿一日　（島津運久）一瓢（花押）

坊津

智德院

永正十年八月二十一日

永正十年八月二十一日　上包　坊津智德院　一瓢

此御書相模守運久譜中ニ在リ、正文在坊津一乘院トアリ、

田布施之内十石薗門代物

合貳拾貫文者、

與三方右衛門六　兩人

渡進之候、

永正拾年八月廿一日　智德院　賴眞判

鎌田壹岐守殿

鮫島土佐守殿

○十月、島津忠興、薩摩阿久根院水田坪付ヲ出スコト、便宜左ニ合敍ス、

〔前編薩藩舊記雜錄〕四十二　大固寺文書

薩摩國阿久根之院　阿久根院　水田坪付

水田坪付　栗村門

一壹町三段

一六町卅　折尾門

一九段　長田

一貳段　久留主

以上三町卅

永正十年十月吉日　（朱書）「薩州家四代」忠興（島津）印

二十二日、戊午、越後安田實秀、誓書ヲ中條藤資ニ送リ、異心無キコトヲ盟フ、

〔和田中條文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

起證（請）文

右意趣者、奉對越州（中條藤資）ゟ、自今以後一點不奉別心存候、毎事無御隔心可被加御意候、乍恐相守、於末代不可有御等閑候、若此言僞候ハヽ、○神文略ス、

永正十年八月廿二日　安田彌太郎　實秀

中條越（藤資）州參

二十四日、庚申、畠山尚順、同義英ト河内ニ戰フ、義英、敗レテ、和泉堺ニ奔ル、

〔拾芥記〕中　八月廿四日、畠山尾張入（尚順）道、於河内畠山上總（義英）守手合戰、上總守

永正十年八月二十二日　二十四日

義英ノ弟播磨戰死ス

弟播摩(磨)被打云々、未分明之由有其沙汰、上總守引退、在和泉堺云々、兩方手負死人及四五百人云、

〔後法成寺尙通公記〕七　八月廿六日、晴、及晩蒯菴來、河州落居、敵退散、畠山上總介高野江沒落、同播州打死云々、

義英高野山ニ奔ルトノ說

〔金剛寺文書〕

大和松尾寺義英ニ黨ス

本券文者、同永正十年八月廿五日、當國觀心寺陳テ、總州(畠山義英)樣弓矢執負、泉州ヘ向テ逃去給、其時松尾寺依爲敵同意、卽發向也、當寺者悉彼寺ヘ陰間、悉失也、

(無動院寛空御影供米田塢寄進寫書)

○下略

〔東寺過去帳〕於河內州、畠山尾張守與同上總守合戰、死亡族數百人、鷄冠手(井カ)四郎兵衞、谷修理亮其外數十人、尾張守方、谷修理亮、上總守方、播磨守、上總守舍弟、其外數十人、

(寫書)

永正十八廿四、合戰於觀心寺幷金臺寺邊、兩屋形衆相向合戰、同日上打死、同日上總方沒落了、播磨殿廿二才云々、

二十七日、癸亥、日向伊東尹祐、犬追物ヲ興行ス、

〔日向記〕三　犬追物數ヶ度興行事

犬追物手組

檢見喚次

○上略　同年(永正十年)八月、犬追物興行、犬數百疋、

犬追物手組之日記永正十年癸酉八月廿七日、

伊東殿(尹祐)　十三疋　長倉四郎兵衞尉　二疋

伊東參河守　三疋　上別府治部少輔　三疋

八代越前守　一疋　山田二郎三郎　一疋

伊東彈正左衞門尉　二疋　大脇掃部助　二疋

八代駿河守　一疋　川崎四郎左衞門尉　三疋

伊東相模守　二疋　佐々宇津右衞門尉　一疋

檢見荒武伊勢守　喚次野村淡路守

〔蠹簡集殘編〕三　○土佐(藤紙)　(義行)　松井山城守殿

二十八日、甲子、遠江守護今川氏親、松井義行ニ、同國下平河ノ地及ビ鎌田御厨領家分ヲ充行フ、

(今川)　氏親

遠江國下平河事

右於當國、別而依被走廻、充行訖、者彌可抽忠節之狀、仍而如件、

永正十年八月二十八日

永正十癸酉年八月廿八日　　修理大夫(今川氏親)(花押)

松井山城守殿

「(懸紙)松井山城守殿　　氏親」

遠江國鎌田御厨領家分事

右依父山城守忠節充行畢、者彌可抽忠功之狀、仍而如件、

永正十年八月廿八日　　修理大夫(花押)

松井山城守殿

三十日、丙寅、常陸佐竹義舜、茂木持知ニ、下野山内郷及ビ小深郷ヲ給ス、

〔茂木文書〕三〇羽後

下野國山内郷并小深郷、此度悉進置候者也、

永正拾年癸酉八月晦日　　義舜(佐竹)(花押)

茂木筑後守(持知)殿

九月大丙寅朔盡

六日、辛未、出雲尼子經久、子政久ト共ニ、同國阿用城ヲ攻ム、是日、政久、戰死ス、

〔佐々木系圖〕○周防

- 經久　又四郎、民部少輔、伊與守、
  - 政久　又四郎、民部少輔、母吉川伊豆守(經基)女、永正十年九月六日、雲州阿與城ニテ、爲流矢死、
  - 晴久

〔諸家系圖纂〕九之一　宇多源氏　佐々木　尼子流

- 經久　又四郎、伊豫守、民部少、
  - 政久　民部少輔、又四郎、母吉川伊豆守女、永正十年九月六日、大内合戰之時、安西(阿用)城中流矢死去、二十六歳、
  - 國久
  - 興久
  - 女子
  - 晴久

〔參考〕

世系　母ハ吉川經基女

永正十年九月六日

城主阿與入道ニ防戰努ム

政久向城ノ矢倉ニ登リ笛ヲ吹ク

阿與入道ハ弓ノ名手

〔陰德記〕四　兩御所（義稙、義晴）御和睦、付尼子經久責阿與之城事

永正十五年、○略中中國ニハ去々年（十年カ）ヨリ、尼子伊與守（經久、後ニ同ジ）京都ヲ逃下リ、出雲ノ國中ヲ打隨ヘ、同八月ヨリ阿與（大原郡）ノ城ヲ取圍ミ、息ヲモ不繼責タリケリ、サレモ阿與ノ入道身命ヲ捨テ、防戰シケル間、輙可落樣モ無カリケリ、然間經久先役所ヲ構、付城五ケ所築キ、遠攻ニコソセラレケレ、去程ニ城堅固ニ抱シカハ、寄手攻飽ンテ、徒ニ日數ヲ送リケル程ニ、徒然サノ儘、經久ノ嫡男民部少輔政久、夜ナ々々向城ノ矢倉ニ上リ、楊調ヲ取出、音モ澄ヤカニ吹ナラシテ、更行月ニ心ヲ澄シ御座ケルヲ、阿與入道城中ヨリ是ヲ聞テ、向城ニ笛ノ音ノ夜毎ニイト面白ク聞ユルハ、如何樣ニモ政久タルヘシ、此人ハ父經久ト相共ニ上洛ノ吃、勝レテ笛ノ上手ニテ御座マセハ、禁裏仙洞ニモ被召出、管絃ノ御遊ノ折節ハ、笛ノ役勤メ給フト聞テ有、哀究竟ノ「哉、我弓ニ於テハ養由カ術ヲ得タリト覺タリ、百歩ニテ柳ノ葉ハ扨置、下針也トモ射テン物ヲト思ケレモ、烏羽玉ノ暗キ夜ナレハ、何ニ敵有トモ見分ル「難叶、如何セント案シ煩ヒケルカ、急度思出メ、彼向城ノ前ニ竹ノ一村有ケル中ヘ紛入、向城ノ矢間ヘ矢ヲ射入ケルニ、十ヲ十射込ケリ、扨ハ思敵ハ射テン物ヲト

政久ヲ射ル

政久詩歌管絃ニ長ズ

思、弓手ヲ何ノ竹ノ節ニ當テ、妻手ヲ此竹ノ刻目ニ引付射レハ、笛ノ音ノ聞ユル矢倉ノ矢間ヘ射込ヌト射覺テコソ皈リケレ、扨テ笛ノ音ヤ聞ユルト待居ケル處ニ、同九月六日、又彼笛ノ聲ノ聞エケレハ、安世（同與下同ジ）入道彼籔ノ中ヘ忍入テ、兼テ心覺ニシタリケル竹ノ節剋目ニ、弓手妻手押當、ヨッ引ヒヤウト放ツ、矢アヤマタス、向城ノ矢間ヘ射込タリケルニ、政久楊調取出シ、音取吹スマシ、矢間ヘサシノソキ、傾ク月ノ影ヲイト名義（殘カ）ヲシト詠メ給處ヲ、喉ヲ後ヘ究ト射徹ケル間、笛ヲカシコヘ抛捨テ、ウツフ樣（ス脫カ）ニ倒レ給ヲ、供ニ有ケル若黨モ、コハ如何ニト周章シ、急抱上ケテ見レハ、早事切レ給、又急經久ニシカ〳〵ノ由告タリケレハ、大ニ驚アハテ惑ヒ來リテ、諸佛諸神ニ願ナト立、針ヨ藥ヨト宣ケレモ、喉ノ眞中大鴈俣ヲ以寸ト射切ケレハ、更ニ蘇生シ給ヘキトモ不見ケリ、今年廿六歳トソ聞エシ、武藝ニ勝レ給ノミナラス、詩歌管絃ニモ長シ給ケレハ、花實相應ノ大將ニテ御座ケル物ヲ、傳聞平家ノ薩摩守忠度トヤランモ、角ヤ御座ケント、世擧テ感シアヘリケリ、角人ノ唱ヘケル人ヲ、無益（アヤナク）敵ニ射殺サセ給ケル經久ノ心ノ中、思ヒヤラレテ哀ナリ、伊與守落ル涙ヲ押テ、今ハ大聖釋迦如來ノ再出世シ給ニ祈ヲカケ、耆婆

扁鵲カ再來シテ良藥ヲ與ルトモ、蘇生スヘカラス、哀別離苦ノ悲、今更非可嘆、更ハ政久カ孝養ニ、安世ノ城中ニ籠リ居所ノ兵ヒ、猫兒老鼠ニ至迄、生有者ヲハ盡ク討果テン物ヲトテ、翌日七日七千餘騎ヲ引卒シ、自ラ眞先ニ進ミ給ヘハ、二男紀伊守國久、三男宮內大輔興久ヲ先トシテ、龜井能登守、卯山飛彈守（備後）、牛尾遠江守已下我先ニト切岸ニ責寄タリ、安世門矢倉ヘ走リ上リ、政久ノ御弔合戰可有ト存、鏃少々磨キテ御マウケノ爲ニ蓄ヘ置候トテ、引詰差詰散々ニ射ル、入道カ猶子ニ、同孫六、苗田久七ナト云兵ヒ、爰ヲ先途ト防ケル程ニ、面ニ立タル牛尾、山中、川添ノ者共十八人門ノ前ニ射伏ラレ、其外雜人原數百人手負ケレハ、寄手少進ミカ子テ有ケル處ニ、伊與守經久、若キ政久射殺サレ、老タル某カ命生テ何カセン、唯同シ道ニ成ント、瞋レル眼ニ千入ノ紅ノ如ナル涙ヲ流シ、眞先ニ進マレケレハ、誰カハ一人モ可殘、皆我先ニト進ミ、射レヒ切ヒ不用、塀格子ヲ一度ニ引破、城ノ中ヘソ乘タリケル、安世入道弓拋捨テ、十文字ヲツ取、突伏セカケ伏、向敵數十人手ヲ負ケレヒ、前後左右ヨリ込入ケル間、終ニ其所ニテ討レニケリ、是ヲ見テ一族若黨イツノ爲ニ命ヲ可惜トテ、思々ニ切死シテケリ、安世孫六、苗田久七等ハ入

（經久ノ弔合戰）
（阿與入道戰死シ城陷ル）

道カ妻子差殺、軍ノ城ニ火ヲカケ、我身モ腹ヲソ切タリケル、寄手城中ノ男女老若ヲ不嫌、切伏ケル程ニ、千三百餘人カ頸ヲ取テ、鬨ヲ咄ト作リ、頓テ打入給ケリ、不白院殿華屋常榮居士トハ、則政久ノ御ㄱナリ、御母ハ吉川伊豆守經基ノ息女トカヤ、

（政久ノ法名）

〔中國治亂記〕（略）○上　伊豫守經久ハ、長祿二年十一月廿日誕生、天文十年ニ八十四歲ニ逝去ス、號省心院殿申ス、彼人ノ代ニ、出雲、伯耆、因幡、隱岐、石見、安藝、美作、備前、備中、備後、播磨十一ケ國ヲ押領シ、彼國々ニナヒカヌ草モナカリケル、然ルニ子息政久、民部少輔ト申セシ時、去ル永正十年九月六日、大內ト合戰時ニ、安世（阿用）城ニテ流矢ニ當テ、廿六歲ニテ早世ス、

九日、甲戌、節供、和歌御會、

〔續史愚抄〕（四十四後柏原院中）　九月九日、甲戌、和歌御會、題月照菊花、（新類題）

（題月照菊花）

十四日、己卯、細川高國、犬追物ヲ興行ス、

〔後法成寺尙通公記〕七　九月十四日、晴、細川京兆（高國）、三手犬張行云々、大內（義興）招請云々、

（大內義興ヲ招ク）

〔伊勢貞助記〕（七十八○後鑑二百所載）　一永正十九十四日、於細川殿馬場、三手犬追物

在之、内撿見貞陸（伊勢）、外撿見寺町石見守（通隆）、射手卅六騎、

二十一日、丙戌、皇妹安禪寺智圓女王薨ズ、

〔本朝皇胤紹運錄〕○前田家本

後土御門院

御世系

- 後柏原院
  - 尊傳　俗名尊敦、
  - 仁尊（圓滿院改レ悟）
  - 皇子　童形早世、
  - 皇女　大慈院、
  - 皇女（比丘尼安禪寺）早世、
  - 皇女（比丘尼）保安寺、
  - 皇女（比丘尼安禪寺）永正十九廿一、又早世、

〔皇親系〕七

後土御門天皇

- 智圓女王　母藤原房子、贈左大臣勸修寺教秀女、文明十八年十二月二十八日生、後落飾

爲尼、住安禪寺、永正十年九月二十一日薨、年二十八、

〔諸寺院上中〕皇親御事蹟〕安禪寺　安禪寺中古皇女御領住次第

後土御門帝皇女、奉稱智圓法尼（母贈左府教秀公女、從三位房子、）

○智圓女王、御誕生アラセラルヽコト、文明十八年九月二十八日ノ條ニ見ユ、

二十三日、戊子、豐前守護大内義興、同國宇佐宮神官宮氏ヲシテ、同宮大大工職ヲ安堵セシム、

〔小山田文書〕○豐前

宇佐神官宮氏訴狀之趣、則遂披露之處、小山田門相續之上者、家職不可有相違之由被仰出候、殊更、神社佛閣、井垣、玉垣新造之、祭禮任先例、無懈怠可相勤旨、堅固可被仰渡候、且爲御祈禱之由候也、仍執達如件、

永正十九月廿三日　兼道（花押）　興重（花押）

小山田門相續ニ依ル

佐田泰景（泰景）殿

二十八日、癸巳、後土御門天皇聖忌、御法會ヲ山城般舟三昧院ニ修セラル、

永正十年九月二十八日

〔願文集〕五　後土御門院十四回

夫囿於化者、終於盡順世、無常寓諸幻、而返諸眞、是名寂滅焉、神珠恒照濁垢、而寶月不避汙泥、想視西天大法揔無澆訛乎、蘇山雲如舊、南嶽和尙待成跫音矣、般舟寺尙遺、爰法華一乘者、般若論之前涅槃掛之後、轉凡作聖、不假薰修乎、三祇以色爲心、頓成隔異乎、一卽肆閉權敎之疑戶、排正宗之玄門、愈入髓沈痾、截盤根固執、況俱威王之餘勣、或並智勝之遺塵者哉、玆以奉爲先皇陛下、整梵場之莊嚴、罄宸哀（哀歎）之追賁、奉供養釋迦如來舊像一幅、奉摺寫妙法蓮華經一部八卷幷開結、心、阿等經各一卷、迺命前大僧正法印大和尙位公助、爲唱導師、儀形山立、襟度淵澄、瑞世曇華生、天亦莫測壽、域蟠桃熟、時至自然、邂逅若人、驚動吾輩、觀厥暮雲寒鴈落、盍得傳泉下之信、古砌秋鵰（雕）啼、曾似續花中之吟、嘆息焦恩且千、悲淚患眼幾許、伏惟、先皇陛下元極成體、曆數在躬、雍熙泰和、式洋溢于四海、鴻化德行、各巡撫于八紘、日月載就陽位之美焉、山川亦如王佐之才矣、堯作風治、禹作水治、皇基益固、舜生東夷、周生西夷、政績惟敦、抑遠言則如天、仰瞻聖之至聖、近言則如地、共曰賢而大賢、正聲雅樂、文獻歌詠無涯、四輔敎令、威儀忠信皆獲、傷哉、寢膳乖和、醫術失意、予雖同魯叟之禱爾、孰不傳越人之禁方、嗚呼

尊顏永藏、有啻碧雲紅霧色、神御弗返、緬望白揚青芒烟、眇身久期貞觀太平、猶闕元祐初政、龍牒龜書之不起、菲德堪慙、鳳文麟璽之若亡、永祚巨守、微志豈及聖恩之重、良因適恐惠業之輕、然則尊靈會十方刹土、以同居成成正覺、促恒河沙劫、爲一念無間長期、乃至群萌群生、沈魂沈魄、性相如々、眞玄了々、敬白、

永正十年九月廿八日

敬白

請諷誦事

三寶衆僧御布施

右

先皇陛下季秋之聖忌、每歲之追修、台嶺碩生、金口式響衆、靈山會旨、玄音忽達冥、于時講鐘鏗鍧徹九天之上、沈煙靉靆薰三寶之眸、功德無量、利益廣大、仍諷誦所修如件、敬白、

永正十年九月廿八日

二十九日、甲午、上杉定實ノ部將宇佐美房忠、長尾爲景ノ黨安田但馬守ヲ越

永正十年九月二十九日

後白川莊ニ攻メントシ、黑川盛實ヲ促シテ、中條藤資ト共ニ、七松ニ出陣セシム、

〔讀史堂古文書〕（編纂）〔黑川彈正左衞門尉殿參〕　○羽前伊佐早謙氏所藏　自新發田宇佐美彌七郎

一昨日者、雨故其地訖御取除、無是非候、然者中條（藤資）殿被仰合、七松要害際へ急度御著陣奉待候、今日向白川庄成働、今明日中に安田但馬守を可仕居候、早々有御相談、七松際へ御動奉待候、恐々謹言、

九月廿九日　宇佐美彌七郎房忠（花押）

黑川彈正（盛實）左衞門尉殿御宿所

○藤資、爲景ニ誓書ヲ送リ、忠誠ヲ致サンコトヲ約スルコト、八月一日ノ條ニ、爲景、藤資及ビ築地忠基ヲシテ、安田城ヲ攻メシムルコト、十二月是月ノ條ニ見ユ、

上杉朝興ノ部將太田資康、伊勢宗瑞ノ兵ト、相模三浦ニ戰ヒテ敗死ス、

〔上總松尾太田家譜〕

資長——

妻ハ三浦義同ノ女

相模大明寺ニ葬ル法名

上杉顯定ニ屬ス

資康　源六郎、六郎左衞門尉、號法恩齊、妻三浦陸奥守義同女、大永二年九月廿二日卒、永正十年九月廿九日、戰死於相模三浦、葬於三浦大明寺、法諡法恩齊道源日惠居士、

資時

資高

〔寛永諸家系圖傳〕二十二　太田

資長——

資康　源六郎、六郎右衞門尉、剃髮して法恩齊と號す、武州江戸城に生る、（上杉）山內顯定に屬しく戰功を彰はしたりし、永正十年九月廿九日、相州三浦にて討死、

資高

〔寛政重修諸家譜〕二百五十三　太田

資長——

資康　源六郎、六郎左衞門尉、寛永系圖、右衞門、六郎、剃髮號法恩齊、

資時

永正十年九月二十九日

上杉定正ニ叛キ同顯定ニ屬ス和歌ヲ嗜ム

資高

資康　文明十八年七月、父道灌、上杉定政（正下同ジ）のため殺害せらるゝれ後、資康江戸城を去り、定政を叛きて、山内れ上杉顯定ゐ屬も、れち剃髪して、法恩齋と號し、父の志を繼て、和歌をたしなむ、長享元年、顯定、定政狡うたんとせられしとき、資康甲斐國よおもむき、顯定のさ先よ援兵をさふ、二年六月、兩上杉武藏國比企郡須賀谷よをいて合戰も、資康、顯定よ去さのひ、先と先ゑゝかふ、されとき家臣桂外記某馬前よをいて奮戰して死も、永正十年九月二十九日、資康相模國ゐ軍を出し、三浦乃戰よ命を殞も、法名日惠、其地れ大明寺に葬る、妻ゝ三浦陸奥守義同入道道寸の女、

〔太田家記〕

資長

資康　源六郎、六郎左衛門、法名法恩齋、

住江戸、屬山内顯定之指呼、而攻城圍邑功多、永正十庚酉九月廿九日、於相州三浦討死、卽葬于大明寺、號日恩（惠）、

女子　饗場彌太郎利長室、

顯定死後扇谷朝興ニ上杉歸ス武藏立川原ニ戰死ストノ說

資時　源四郎、

資高　源六郎、六郎左衛門尉、大和守、生于江戸城、

資貞　源次郎、

女子

一資康公、山内顯定御死去以後、扇谷へ御歸參、朝興公へ御隨順（ナシイ）被成候歟、

一永正十年九月廿九日、於相州三浦こ御戰死、又一說よ、於武刄立川原御戰死と有之、

此兩度之合戰の内、資康公御討死之義、諸書を相考候よ、立川原合戰ゐて（こて可有之候）ゝ、年數相違有之候、然者三浦こて御討死なるへし、

一北條盛衰記こ曰、永正九年八月十三日、北條早雲（宗瑞）伊豆相模勢を催し、岡崎之城へ押寄ると云々、永正十五年七月十一日、三浦荒井之城落て、三浦陸奥守入道道寸切腹と云々、右之内江戸の城主上杉修理大夫朝興、三浦荒井の城後詰せんとて、武州の勢を催し、相模國之中郡よ旗を立らるゝ、早雲ゝ同國甘繩の邊よ陣を取、合戰ゝ、上杉勢利を失ひ、忽敗北せり（いふ事有之）と云々、

是を以て相考に、永正九年ゟ同十五年迄ハ、七ヶ年の合戰也、就中江戸の城主發向ゟつき、資康公陣中ニ而在ゟとハ左も有へし、朝興公の後詰被成候事、永正十年、資康公ハ三浦道寸之聟被成共申傳ゟ候へハ、此合戰ゟ御討死可被成事勿論也、又軍中ゟ御死ハ、尊骸を江戸へ不送して、三浦ゟて葬送も據所有之、

一立川原合戰も、三浦合戰も、山内殿扇谷殿兩上杉の合戰也、資康公の御討死ハ、三浦合戰之節ニ無紛候、

一三浦大明寺へ御葬送、是ハ三浦黨御縁者故、尊骸を江戸迄ハ不送して、猶其所葬たるもの也、

〔本圀寺年譜〕七　十年（永正）癸酉、○中略九月、大田道灌之子資康死、呼法恩齊（号）道源、道灌者、爲父道灌、武城本所建平河山法恩寺、乃屬當山、今觸頭一寺是、

〔參考〕

〔江戸名所圖會〕十八搖光之部　平河山法恩寺　柳嶋出村町にあり、日蓮宗ゟして、花洛本國（國）寺の觸頭、江戸三箇寺の一員たり、本堂ゟは宗祖上人の像を安も、日法上人の作かり、相傳ふ、當寺ハ太田大和守資高（道灌の孫ゟり、法華靈場記ゟ資高ハ江戸谷中法恩寺日悅尊靈ゟりと云々、）先考六郎左衛門尉資康入道法恩齋（日恩と號、）十三回忌追悼の爲、三田村の内を寄附し、日住上人を開祖とも、則大永四年甲申、武州江戸下平河ゟ精舍を營建し、一家の靈牌を居ると云々、

三十番神堂（本堂の前、左の方にあり、關東古戰錄といへるものゟ云、傍ゟ三十番神の堂をゟつらひ、密談所ゟかまへ置さりと、又北條五代記、小田原實記等の書に、資高北條家を背き、里見義弘ゟ力をあたせ、永く豐嶋郡の地を知行せんとて、兄弟のともらら、番神堂の前ゟて神水を呑、此事思ひ定ぬるうへハ、再ゟへもへらしし記せり、其頃ハ今の御城内平川の地ゟありしゟり、）

當寺往古ハ、今の御城内平河ゟありて、本住院と號せしとなり、北條家の所領役帳ゟ、本住坊寺領ゟ、三田内惣領分の地を附もとあり、則本住坊ハ本住院の事を云なるへし、法恩寺と改しハ、後世の事とも

えたり、遙ゟ天正の後、柳原の邊へ移され、其後谷中清水坂の地へ轉せられ、元祿の初、今の地へひろれたりといへり、境内ゟ、平河清水と稱もる稻荷の小祠あり、是乃ち、平河ゟり清水坂へうゟりたりし證ゟして、ふゟつの地名をあたせて、かくハ稱もるなり、

武藏法恩寺

資康ノ子資高亡父追善ノ爲メニ建ツ

モト本住院ト號ス

祇候ノ人々

御法名性海小御所南間ヲ道場ト爲ス

授戒道場圖

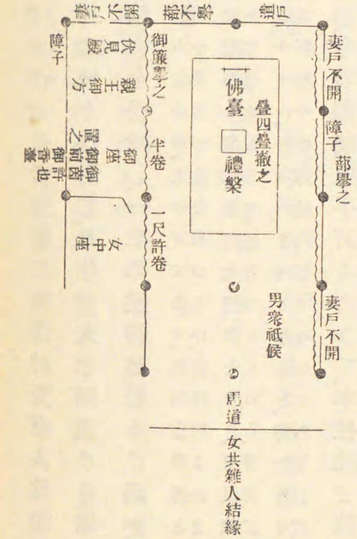
十月（大盡 丙申 朔）

一日、（丙申）御祝、

〔公條公記〕十月一日、丙申、天晴、今日當番也、未刻許參內、及晩退出、參伏見殿、入夜歸參、御祝也、御盃人々、予、右宰相中將（正親町實胤）、雅業王、（山科）言綱朝臣、（後）橘以緒等也、

二日、（丁酉）知仁親王、戒ヲ山城二尊院宗純（念空）ニ受ケ給フ、

〔公條公記〕十月二日、丁未（酉カ）、天晴、今日命二尊院念空、（實名宗純）親王御方御授戒也、御法名事、兼被仰之、仍被撰進之、以小御所南間爲道場、堂莊嚴等、彼伴僧一兩輩御名字五、其中性海被用之、奉仕之、其儀見差圖、佛具等、般舟三昧院佛具也、燈明佛具等、被持參之了、



戒ノ作法

參仕ノ人々

女房奉書

圓頓戒

未剋許、阿闍梨被參、則御燒香、（親王御方御前香爐、自彼寺被持參、予兼置之御前、）次取拂香爐被三禮、同時上下各三禮、次昇禮盤、戒儀被讀誦之、合掌作法等段々被申之、戒儀畢、下禮盤之時、如前各三禮、次慈覺大師御袈裟、被奉頂戴之了、次各被進御血脈、御所御法各如元、參仕人々、予、勸修寺中納言（尚顯）、四辻宰相中將（公音）、右宰相中將（正親町實胤）、今日初（鷲尾）爲弟子、隆康朝臣、言綱朝臣、（山科）始爲（庭田）弟子、重親朝臣、（綾小路）資數朝臣、（高倉）初爲（萬里小路）弟子、秀房、範久、（後）橘以緒初爲弟子、等也、事了御布施、於勾當局、付伴僧幸巡、被遣之、御盃、御所御分、御盃、花瓶宮御方御分也、入夜退出之後、向彼宿處、新大典侍里申請之、御今日無事、珍重之由申之、

〔光明院文書〕（端裏書）「永正十九十五」　○和泉

おのゝち御くゐんらくかにと御いり候やらん、よゐ御事ゝて空をしをり〳〵、さ候ゝゝ、廿八日まへ七日の中こ、ゑんとんゝいの御さゝありさゐ御事まて、御のゆり候へく候やうこ、心えて申との御事まて候、御もう〳〵よく候ゝゝ、御のゆり候へく候、いまさゑろと御ちしやうゝ候ゝまとも、おいゝゝ御さゝ候ゆとこ、わさくしよりまゐ申候、御心え候へく候、よろゐ御のゆり候て、申候へく候、〳〵し、

永正十年十月二日

三條公條ノ子女圓頓戒ヲ受ク

○十月三日、三條西公條ノ子女等、宗純ニ圓頓戒ヲ受クルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔公條公記〕十月三日、戊申(戊)、天晴、時々雨降、今日於私宅爲小童婦女、招彼念空、有圓頓戒事、頭(正親町實胤)中將、滋野井(季國)等始爲弟子、齋後被歸寺了、

關白九條尚經ノ母智子及ビ室保子ヲ從三位ニ敍ス、

〔公條公記〕十月七日、壬寅、天晴、○中略九條前關白(尚經)母儀、幷北政所敍品事、期女敍位處、依無盡期、同者職中申請度之由被申之、去二日之分勅許也、母儀智子、北政所保子也、

〔九條家譜〕

政基 准三后、關白、左大臣、母菅原(唐樹)在豐女、永正十三年四月四日薨、七十二歲、號慈眼院、

尚經 前關白、左大臣、母從三位智子、

稙通 前關白、內大臣、母從三位保子、內大臣實隆女、

〔諸家大系圖〕十三條

實隆

女子 保子、關白尚經公北政所、イ二、雅通(稙カ)公母、

參仕ノ人々

十六日ノ亥子御祝

內々ノ儀

尚經ノ謙退ニ依ル

四日、己亥、亥子御祝、

〔公條公記〕十月三日、戊申、天晴、時々雨降、○中略明夜武家御嚴重事被仰堀川局了、

四日、己亥、雨降、今夜入夜參內、參仕人々、甘露寺中納言(元長)、予、四辻宰相中將(公音)、右宰相中將(正親町實胤)、伊長朝臣(伊達寺)、爲學朝臣(五條)、隆康朝臣(藤尼)、言綱朝臣(山科)、重親朝臣(葛田)、季國(滋野井)、宗藤(松木)等也、

〔拾芥記〕中　十月四日、御亥子、

○十六日、亥子御祝ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔公條公記〕十月十六日、辛亥、天晴、今夜御亥子也、參內、甘露寺中納言、予、四辻宰相中將、右宰相中將、爲學朝臣、隆康朝臣、雅業王、言綱朝臣、重親朝臣、季國、範(高倉)久、橘(後)以緒等也、

五日、庚子、關白左大臣九條尚經ヲ罷ム、

〔公卿補任〕四十五　關白左大臣正二位藤尚經(九條)、四十六、氏長者、牛車、兵仗、是定、十月五日辭退、官職不及上表、內々儀歟、

〔後法成寺尚通公記〕七　九月五日、晴、當職事、從九條(尚經)可謙退之由有御返事、但今少可成其心得被申送、武者小路(綠光)狀也、